日本語用論学会

(The Pragmatics Society of Japan)

第3回（2000年度）大会

PROGRAM & ABSTRACTS

日時：2000年12月2日（土）
会場：神戸研究学園都市大学交流センター(UNITY)

日本語用論学会事務局：
573-1001
大阪府枚方市北片鉾町16-1
関西外国語大学外国語学部
澤田治美 研究室内
Tel：072-856-1721
Fax：072-855-5534

日本語用論学会

(The Pragmatics Society of Japan)

第3回（2000年度）大会

PROGRAM & ABSTRACTS

日時：2000年12月2日（土）
会場：神戸研究学園都市大学交流センター(UNITY)

日本語用論学会事務局：
573-1001
大阪府枚方市北片鉾町16-1
関西外国語大学外国語学部
澤田治美 研究室内
Tel：072-856-1721
Fax：072-855-5534

プログラム（アブストラクト目次）

受付11：00 ～（ギャラリーホワイエ ）

ワークショップ(10:30～12:00)

A室　（セミナー室４）　司会　杉本孝司　（大阪外国語大学）
テーマ：認知と言語使用

1.「構文の拡張可能性と体系的メタファー」　児玉一宏　（京都大学研修員）
2.「ヘッジ表現の対人機能とその動機付け」　高水　徹　（京都大学大学院）
3.「言語表現の機能的側面とiconicity」　山下美津子　（京都教育大学）
4.「象徴的媒介について」　岡本夏木　（京都教育大学名誉教授）

B室　（特別会議室）　司会　林　宅男　（桃山学院大学）
テーマ：コミュニケーションにおけるストラテジーとスタイル

1.「新聞英語の語用論的分析 -- オーストラリアの新聞三紙（The Australian, The Age, Herald Sun）の比較による--」　中村秩祥子　（龍谷大学大学院）
2.「発信者の<発信能力>と受信者の<解読能力>の一致度--<断り>行為の場合-」　村井巻子　（京都大学 留学生センター 非常勤講師）
3.「批判に際して用いられる日米人のコミュニケーション・ストラテジー」　小林純子　（関西外国語大学）

C室　（セミナー室３）　司会　西光義弘　（神戸大学）
テーマ：構文研究と語用論

1.「結果構文の <捉え方> (construal)に関する一考察」　松本知子　（同志社女子大学大学院研究生）
2.「there 構文と it 構文：談話情報からの考察」　海賓康臣　（立命館大学大学院研究生）
3.「時間節構文における事象の相互関係」　田中美和子　（関西外国語大学大学院）
4.「日本語における主要部内在型関係節 (Head-internal relative clauses) の語用論的解釈の分析」　西山幹枝　（大阪大学大学院研究生）

D室　（セミナー室１）　司会　東森　勲　（神戸女学院大学）
テーマ：言語表現とコンテクスト

1.「Cataphoric *that*」　笹本涼子　（奈良女子大学大学院）
2.「Repetition, Refrain, and Relevance-- 詩的効果と反復の型 --」　塩田英子　（龍谷大学大学院）
3.「口語コーパスによる談話辞の語用論的分析」　松岡信哉　（龍谷大学非常勤講師）

総会（12:00～12:20）（セミナー室４）司会　高司正夫（宮崎公立大学）

1. 開会の辞　高原　脩　（神戸市外国語大学）
2. 会長挨拶　小泉　保　（関西外国語大学）
3. 事務局長報告　澤田治美　（関西外国語大学）
4. 編集委員会報告　高原　脩　（神戸市外国語大学）
5. 会計報告　田中廣明　（関西外国語大学）
6. その他

書籍展示（ギャラリーホワイエ）(10:30～18:00)

研究発表　(12:30〜15:35)

A室（セミナー室4）　司会　武内　道子（神奈川大学）

1. 「English Primary Interjections in Relevance Theoretical Approach」　西川眞由美　（奈良女子大学大学院）. . . 1
2. 「表意/高次表意からみた日英語比較への一視点 」　内田聖二　（奈良女子大学）. 9

（10分休憩）

司会　山口　治彦（神戸市外国語大学）

3. 「not un-Xについての一考察」　榊原　愛　（大阪大学大学院）. 16
4. 「反論という言語行為へのアプローチ—表現形式・機能及び構造を中心に—」　趙　華敏　（同志社女子大学大学院・中国北京大学外国語学院）. . . 23
5. 「認知的不調和としてのアイロニー：認知から情緒へ」　春木茂宏　（大阪大学大学院）. 31

B室（セミナー室3）　司会　橋内　武（桃山学院大学）

1. 「話題による参与構造の変化：教員会議の談話から」　内田らら　（日本女子大学大学院）. . . . 38
2. 「Multiple Perspectives on Everyday Discourse: A Frame Analysis of Japanese Particle *de*」　林　礼子　（甲南女子大学）. 44

（10分休憩）

司会　神尾　昭雄（獨協大学）

3. 「'S KNOW WHETHER' という表現について」　森　貞　（福井工業高等専門学校）. . . 51
4. 「条件文とモダリティー—視点を中心に—」　岡本芳和　（関西外国語大学大学院）. . . 59
5. 「メタ言語否定について—話し手の意図と聞き手の解釈—」　田中廣明　（関西外国語大学）. 67

シンポジウム　(15:45〜18:00)

（セミナー室4）　司会　高原　脩　（神戸市外国語大学）. 74

＜プロフェッショナルと語用論—語用論はいかに「場」の行動を分析するか—＞

1. 「場面と意味」　講師　国広哲弥　（東京大学名誉教授）. 76
2. 「障害をもつ人との会話—重い知的障害及び高機能自閉症」　講師　大井　学　（金沢大学）. 81
3. 「法的場面のエスノメソドロジー—法律相談における語りの分析 」　講師　樫村志郎　（神戸大学）. 89

閉会の辞　小泉　保（関西外国語大学）

懇親会（18:30〜　）　神戸市外国語大学 三木記念会館（会費3,000円）

English Primary Interjections
In Relevance Theoretical Approach

西川眞由美
奈良女子大学大学院

1．Introduction

従来 paralinguistic だという理由で言語研究の対象から外されてきた interjection ではあるが、最近の研究で interjection の様々な側面が明らかになりつつある。しかしながら、まだ interjection の使用例を十分に説明しているとは言い難い。本発表の目的は、interjection の中で最も基本的な freestanding primary interjection[*1]（以下 interjection と称す）だけに焦点を絞り、本来的使用と拡張的的使用を区別して関連性理論の認知語用論で考察し、妥当な説明が可能であることを論じる。

2．Observation

(1) Oh

Mary: Jim came to the party last night.

Tom: Oh!

(2) Huh

Mary: I will marry Jim.

Tom: Huh! / Huh? / Huh.

(3) Ouch

a. (Mary hits her arm on the table.) Mary: Ouch!

b. (Tom hits his arm on the table.) Mary: Ouch!

c. (The drill has begun to hurt at the dentist.) Mary: Ouch!

d. (Mary is surprised at the bill.) Mary: Ouch!

e. Tom: I have to pay $10.000 for taxes this year.
Mary: Ouch!

f. Tom: Jim has to pay $10.000 for taxes this year.
Mary: Ouch!

(4) Wow

a. Child: I got three A's today.
Mother: Wow!

b. Child: I got three E's today.

---

*1 primary interjection とは Ameka (1992) による分類で、それ以外に使用できない interjection をさす。freestanding interjection とは、host utterance と共起せずそれ自身で発話になる interjection をさす。

Mother: Wow! (Wierzbicka, 1992, 164)

(5) Oops

a. (Mary dropped something.) Mary: Oops!

b. (Tom dropped something.) Mary: Oops!

3. Preliminaries and Problems

① Semantic analysis (Wierzbicka, 1992: Ameka, 1992: Wilkins, 1992)

② Pragmatic analysis (Wilkins, 1992)

③ Socio-linguistic analysis (Goffman, 1983)

これらの分析の claim と problem を以下に示す。

3. 1 Semantic Analysis

Claim: interjection は通常の言語発話と同様、それぞれの意味論的構造の中に（複数、或いは単数の）命題を encode しその命題は NSM (Natural Semantic Metalanguage) [*2] で記述できる。そして interjection を耳にした人は decoding によってその意味を理解する。interjection は、言語的意味を持つ lexical utterance (lexeme であると同時に utterance) であり、verbal communication である。

NSM definitions of ouch, wow and oops:

(6) **Ow! (Ouch!)**

I suddenly feel a pain (in this part of my body) right now that I wouldn't have expected to feel.

I said "[a ω!]" because I want to show that I am feeling pain right now [and because I know that this is how speakers of English can show (other speakers of English) that they are in pain (in a situation like the situation here.) (Wilkins, 1992, 149)

(7) **Wow!**

I now know something

I wouldn't have thought I would know it

I think : it is very good

(I wouldn't have thought it could be like that)

I feel something because of that (Wierzbicka, 1992, 164)

(8) **Oops!**

---

*2 Wilkins は NSM を、"This is a method of reductive paraphrasing in which linguistic elements are defined by a proposition, or series of propositions, presented as active, declarative natural language sentences, which are composed from a metalexicon of natural language words that are semantically simpler than the terms being defined" (1992, 136) と説明している。

I now know :
I did something bad
something bad happened because of that
I didn't want it (to happen)
I would not want someone to think that it is very bad
(I feel something because of that) (Wierzbicka, 1992, 163)

Problem 1: interjection の non-truth-conditionality を説明できない。

(9) Mary: Ouch!
Tom: *It's not true.
(10) Mary: I suddenly feel a pain right now that I wouldn't have expected to feel.
Tom: It's not true. (cf. Wilkins, 1992)

Problem 2: 何故同様の命題を encode する文発話の代わりに interjection が用いられるのかを説明できない。

Problem 3: (1)の Oh や(2)の Huh は文脈や intonation, pitch, facial expression などによって様々な情報を伝達するが、それを確定した一つの命題で記述出来ない。[*3]

Problem 4: (3d)[発話者の精神的痛みを表す]の ouch を説明できない。

Problem 5: (3b)(3d)(3e)(3f)(5b)[発話者以外の誰かの心の状態を表す]の ouch, oops を説明できない。

Problem 6: (3c)の警告、(3b)(3e)(3f)の同情、(3f)の Tom への共感、(4b)の皮肉、(5b)の注意等の情報を説明できない。

3．2 Pragmatic Analysis (Wilkins, 1992)

Claim : interjection は lexical utterance であり、その意味論的構造に encode された様々な deictics を含む命題が、語用論的プロセスを経て完全命題になり、それが伝達され、かつ何らかの発話行為を遂行する。

Problem 7: (3b)(3e)(3f)(5b)[発話者以外の誰かの痛みやミスを表す]ouch や oops では、同一命題内での deictics(例えば I)の指示対象を統一できない。

Problem 8: (3c)の警告、(5b)の注意のような間接発話行為的な情報を説明できない。

3．3 Socio-linguistic Analysis (Goffman, 1983)

Claim : interjection は"a natural overflowing, a flooding up of previously contained feeling, a bursting of normal restraints, a case of being caught off guard"

*3 Wierzbicka, Ameka, Wilkins ともに Oh, Huh の NSM 記述はしていない。

(p.99)でありながら、他人がいるところで発されれば様々な対人関係的意味を伝達する。例えば、oops は guiding control を失った直後に発するもので、それが単なる accident であることを示すため、他の人にも気をつけるようにという警告のため oops というのだと論ずる。また、ouch は response cry であるが、歯を削ろうとしている歯医者さんや注射針を深く入れた人に「私を痛い目に遭わせようとしている」と言うことを知らせるため、又は他の誰かに costly で startling なことが起こった時その人の代わりに sympathetic identification として発すると述べている。、

Problem 9： natural emotional expression であり、openly designed communication でない interjection が何故このように多様な伝達を行うのかを説明していない。

4．Alternative Proposals

Proposal 1: interjection はもともと外的刺激に対する瞬時の声の反応と考えられ(Darwin, 1955, Bryant, 1921 参照)、特定の physical gesture との間に iconicity を持ち(c.f. Bolinger, 1989, Wierzbicka, 1992)、speaker の心の状態、態度、感情に関する assumption を顕在化する。様々な状況で繰り返し使われる interjection は、それに伴う intonation, pitch, facial expression 等と一体化した形で記憶装置に置かれ、hearer はそれを聞いた瞬間記憶装置にアクセスし speaker の心の状態、態度、感情に関する assumption を呼び出す。これは verbal communication の様に encode された意味を decoding と inference で解釈していくものと違って、純粋に inference によるものである。その意味で、gesture や facial expression と似た解釈過程を取る。しかし時に verbal communication と同じくらい強い assumption を顕在化する。それは明確な知覚経験に基づくからと考えられる(Sperber and Wilson, 1995 参照)。

Proposal 2: 意図性から、interjection を二つの伝達形態に分ける。
basic use --- non-ostensive communication (response cry)
extended use --- ostensive communication (情報意図と伝達意図を持つ)[*4]

Proposal 3: interjection は描写的ではなく解釈的に用いられている。[*5]
speaker の心の状態、態度、感情の解釈的使用 --- basic use
speaker 以外の誰かの心の状態、態度、感情の解釈的使用 --- extended use

Proposal 4: ouch, wow, oops 等の特定の assumption を特に強く顕在化する interjection は、その assumption が文脈前提（推意前提）とともにさらなる推意（推意結論）を復元する。

---

*4 ostensive communicatio(意図明示的伝達)については、Sperber and Wilson 1995, 50-54 参照。informative intention(情報意図), communicative intention(伝達意図)については、Sperber and Wilson 1995, 29 を参照。

*5 解釈的使用(interpretive use)と描写的使用(descriptive use)に関しては、Sperber and Wilson 1995, 224-237 を参照。

Proposal 5: ostensive communication は optimal relevance の見込みを伝達する(Sperber and Wilson, 1995)。interjection が ostensive communication として使用されたとき伝達する optimal relevance は interjection の iconicity から来る economy（瞬時に記憶装置にアクセスし想定を引き出す）と expressivity（瞬時に vivid で pictorial な assumption を引き出す)によって effort と effect の両方から説明できる（Nänny, Max, and Fischer, Olga, 1999 参照)。

5．Cognitive Analysis in Relevance Theory

5．1 Proposal 1

3．1に示す Problem 1, Problem 3 を説明できる。

(Problem 1)

interjection は意味論的構造に encode された命題は持たず、純粋に推論のみによって解釈される。故に non-truth-conditional である。

(Problem 3)

Huh はいくつかの physical gesture の vocalization であり、その gesture を時の人の心の状態、態度、感情を表している。また、Oh も Huh も繰り返された経験から intonation, pitch, facial expression 等とある程度一体化して話し手のある心の状態、態度、感情に関する想定と結びついて記憶されていると考えられる。例えば、(11)の文発話の場合も intonation, pitch, accent, facial expression によって伝達する情報が変わる。しかし、それは表出命題に対する態度が変わるだけであって、命題そのものは変化しない。

(11) He is my friend.

(1) Mary: Jim came to the party last night.
Tom : Oh!

(2) Mary: I will marry Jim.
Tom : Huh! / Huh? / Huh.

ところが、(1)の Oh や(2)の Huh は顕在化する assumption 自身が発話者の心の状態、態度、感情なので、intonation, pitch, facial expression によって完全に情報自身が変わってしまう。であるから確定的な一つの命題では記述できない。

5．2 Proposal 2

3．3の Problem 9 を説明できる。

(Problem 9)

interjection の本来の使用である basic use は無目的に発せられる response cry であるが、ある程度 conventionalized された interjection を使用するという(vocalization を行う)こと自身が 発話者の何らかの意図を表している場合がある。また、特定の assumption を強く顕在化する interjection は言語発話と同様に情報意図と伝達意図を持つ発話としてさまざまな extended use

としても使用されるということで説明できる。

5．3 Proposal 3

3．1の Problem 4, Problem 5 と 3．2の Problem 7 を説明できる。

(Problem 4)

発話者が突然の肉体的な痛みに対して ouch を発した時の心の状態、態度、感情を、突然の精神的な痛みの場合にも解釈的に使用している。

(Problem 5)

(3b) (3e) では Mary は、肉体的、精神的痛みに対する Tom の心の状態、態度、感情を解釈的に使用している。(3f) では、同じく Jim の心の状態、態度、感情を解釈的に使用している。(5b) では、Tom の心の状態、態度、感情を解釈的に使用している。

(Problem 7)

interjection は本来その意味論的構造に命題を encode しているわけではない。又、発話者以外の誰かの心の状態、態度、感情を解釈的に使用する場合があるということで説明できる。

5．4 Proposal 4

3．1の Problem 6 と 3．2の Problem 8 を説明できる。

(Problem 6)

P6. ouch が、(12) のような特定の assumption を強く顕在化すると仮定しよう。(3c) の場合、(12) は (13) の様な前提と結びついて (14) の様な結論を導くと考えられる。

(12) The speaker is feeling sudden pain.
(13) People do not like painful thing.
(14) Mary does not want any more pain. (= Don't give me any more pain.)

(3b) (3e) (3f) の場合は、Mary は Tom や Jim の心の状態を metarepresent していると考えられる。つまり、Mary は (15) の様な assumption 定を伝達する事により、「同情」を伝えていると考えられる。

(15) Mary knows that Tom (3b, 3e)/Jim (3f) is feeling sudden pain.

(3f) の場合、Mary は Jim の心の状態を metarepresent するだけでなく、 Tom が Jim の痛みを知ったときの心の状態をも metarepresent していると考えられられる。つまり、(16) の様な assumption を伝達することにより Mary は Tom への「共感」を伝えていると考えられる。

(16) Mary knows that Tom knows that Jim is feeling sudden pain.

wow が (17) の様な特定の assumption を強く顕在化するとすると、(4b) の

母親は wow を発することによっていつも顕在化している(17)を echoic[*6] に使用することによって、そうは思っていないということ、つまり皮肉を伝達していると考えられる。

(17) The speaker is very impressed with something unexpected.

oops が(18)の様な特定の assumption を強く顕在化するとすると、(19)の様な前提と結びついて、(20)の様な結論を導くと考えられる。

(18) The speaker is just aware of making an unexpected mistake.
(19) Making mistakes (even if they are unexpected ones) is not a good thing.
(20) We should be careful not to make unexpected mistakes.

(Problem 8)

ouch, oops のような interjection は上記のように特定の assumption を強く顕在化するので、言語発話と同じように推意として間接的発話行為のようなものを伝達すると考えられる。

5．5 Proposal 5

3．1の Problem 2 を説明できる。

(Problem 2)

文発話は encode された命題を decoding と inference によって解釈され、一つの強い assumption を伝達する。それに対して interjection は命題を encode せず、inference によって直接記憶装置にアクセスし特定の assumption を引き出す。(その assumption は弱く顕在化されるかも知れないが)瞬時に speaker の(時に speaker 以外の誰かの)心の状態、態度、感情を伝達したいだけならば、iconicity が持つ economy と expressivity から考えて interjection を使うだろう。

7．Conclusion

本発表では English primary freestanding interjection の分布に関して semantic approach, pragmatic approach, socio-linguistic approach での問題点を指摘し、Darwin, Wierzbicka, Bolinger の知見から interjection の本来の姿を見直し、basic use と extended use に分けて relevance theory の cognitive approach で考察を行うことにより先行研究の様々な問題点を解決できることを論じた。

*6 echoic (エコー的)に関しては、Sperber and Wilson 1995, 238 を参照。

REFERENCE

Aijmer, Karin, (1987). *Oh* and *Ah* in English Conversation. In: W. Meijs (ed.) *Corpus Linguistics and Beyond*, 61-86. Amsterdam: Rodopi.

Ameka, Felix, (1992). Interjections: The universal yet neglected part of speech. *Journal of Pragmatics* 18, 101-118.

荒木一雄・安井稔 (eds.) (1992)『現代英文法辞典』 東京：三省堂

Blakemore, Diane, (1992). *Understanding Utterances*. Oxford: Basil Blackwell. (武内道子・山崎英一 (1992)『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房)

Bolinger, Dwight, (1989). *Intonation and its Uses: Melody and Grammar in Discourse*. Stanford: Stanford University Press.

Carlson, Lauri, (1984). *'Well' in Dialogue Games: A Discourse Analysis of the Interjection 'well' in Idealized Conversation*. Amsterdam: Benjamins.

Fraser, Bruce, (1996). Pragmatic markers. *Pragmatics* 6, 167-190.

Goffman, Erving, (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Grice, H. Paul, (1975). Logic and conversation. In: Steven Davis (ed.) *Pragmatics Reader*, 305-315. New York: Oxford University Press.

James, Deborah, (1972). Another look at, *say*, Some Grammatical Constraints, on, *oh*, Interjections and Hesitations: University of Michigan, 242-251.

Kryk, Barbara, (1992). The pragmatics of interjections : The case of Polish. *Journal of Pragmatics* 18, 193-207.

Levinson, C. Stephen, (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Nänny, Max, and Fischer, Olga, (1999). Form miming meaning: Iconicity in language and literature. Amsterdam: John Benjamins publishing company.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik, (1985). *A Comprehensive Grammar of the English language*. London: Longman.

Sapir, Edward, (1921). *Language*. New York: Harcourt, Brace, & Co. (泉井 久之助訳 (1957)『言語』. 東京：紀伊国屋書店 .

Schourup, Lawrence, (1985). *Common discourse particles in English conversations*. New York/London: Garland Publishing.

Schourup, Lawrence, (1999). Discourse Markers. *Lingua* 107, 227-265.

Sperber, Dann, (). Metarepresentations in an evolutionary perspective. (to appear)

Sperber, Dan and Deirdre Wilson, (1995). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford:Blackwell. (内田 聖二・中逵 俊明・宋 南先・田中 圭子訳(1993)『関連性理論ー伝達と認知ー』. 東京：研究社出版

Wierzbicka, Anna, (1986). Special issue on 'particles'. *Journal of Pragmatics* 10, 519-534.

Wierzbicka, Anna, (1992). The semantics of interjections. *Journal of Pragmatics* 18, 159-192.

Wilkins, David, (1992). Interjections as deictics. *Journal of Pragmatics* 18, 119-158.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber, (1993). Linguistic form and relevance. *Lingua* 90, 1-25.

表意/高次表意からみた日英語比較への一視点

内　田　聖　二
奈良女子大学
uchida@cc.nara-wu.ac.jp

1．はじめに

（1）A: What did Susan say?
　　B: You've dropped your purse.　--Blass 1990

（2）a. Susan said [You've dropped your purse].
　　b. You(=A)'ve dropped your(=A's) purse.

（3）A: スーザンはなんて言ったの？
　　B: 君の財布が落ちたって/君の財布が落ちたと言いました。

（4）A: スーザンはなんて言ったの？
　　B: 君の財布が落ちたよ。

（5）A: スーザンはなんて言ったの？
　　B:？君の財布が落ちた。

（6）A: スーザンはなんて言ったの？
　　B: 君の財布が落ちたのだって/君の財布が落ちたのだと言いました。

2．情報のなわ張り理論

（7）Mother: What did Jack say?
　　Jane: He's coming to visit us soon.

（8）母親：ジャックは何て言ったの？
　　ジェーン：（ジャックが）今度遊びに来るって。

（9）英語は「直接形」、日本語は「間接形」

（10）直接形：明確な断言を行っており、形式上は述語の言い切りの形を取っている発話

　　間接形：「らしい、ようだ、そうだ、って」などで文が終わっているような発話

（11）日本語においては一般に単に他者から聞いただけの情報はその情報を受け取った人物のなわ張りには属することはできない。… 英語では情報を受け取った人物が信頼できる情報であると判断した情報はその人物のなわ張りに属することができる。（神尾 1998:58 ）

（12）「って」が「間接形」とするなら伝達部が明示されたものも「間接形」

（13）'He's coming to visit us soon,' he said.

（１４）日本語の間接形で話者のなわ張りに属する情報あり。

（１５）（B believes Toro broke the window.）

A：太郎はなんと言ってた？

B：割ったって。

（１６）英語の直接形で話者のなわ張りに属さない情報あり。

A：What did Toro say?

B：He didn't break the window.

（１７）直接形でも「信頼にたる情報」と判断したことにはならない。

（１８）伝聞のマーカーは談話もしくは談話のまとまった一部分の最初の文だけに生じればよい。（神尾 2000）

（１９）Tanaka analyzes the pair of Japanese adverbials *yahari/yappari*, two so-called attitudinal disjuncts. These have more or less the same meaning (= *as expected*), but *yappari* has colloquial connotations. (Yus 1999)

（２０）ある情報を述べるのに一般の直接形ではなく、「～のだ」という文末形を必要とする場合、その情報を得難い情報と認定することにする。（神尾 1998: 110）

「得難い情報」：その情報の所持者に特に尋ねなければわからないような情報

（２１）a. ??実は、うちのおやじがガンだよ。

b. 実は、うちのおやじがガンなんだよ。

（２２）？うちのおやじがガンだよ。

（２３）a.？実はうちのおやじが犯人だよ。

b. 実はうちのおやじが犯人なんだよ。

（２４）うちのおやじが犯人だよ。

（２５）a. 勝ったのは巨人だよ。

b. 勝ったのは巨人なんだよ。

（２６）a. ?実は、勝ったのは巨人だよ。

b. 実は、勝ったのは巨人なんだよ。

３．関連性理論

（２７）descriptive vs. interpretive use

（２８）It's raining.

（２９）And what did the inn-keeper say?

（３０）a. Je l'ai cherché partout!

b. I looked for it everywhere.

c. He has looked for your wallet everywhere. I don't believe him, though.

d. That he has looked for your wallet everywhere.

（３１）伝達文は interpretive use

（３２）explicature vs. higher-level explicature

（３３）An assumption communicated by an utterance *U* is *explicit* if and only if it is a development of a logical form encoded by *U*.

（３４）Peter told Mary that he was tired.

（３５）x told y at t_1 that z was tired at t_2.

（３６）Peter Brown told Mary Green at 3.00 p.m. on June 23 1992, that Peter Brown was tired at 3.00 p.m. on June 23 1992.

（３７）a. *Peter*: Can you help?

（３８）b. *Mary* (sadly): I can't.

（３９）a. Mary says she can't help Peter to find a job.

b. Mary believes she can't help Peter to find a job.

c. Mary regrets that she can't help Peter to find a job.

４．「って」と「（の）だ」

（４０）Itani(1996)

a. procedural: constraint on higher-level explicatures

b. interpretive

c. truth functional

（４１）今度遊びに来るって言いました。（＝基本表意）

（３０）d. That he has looked for your wallet everywhere.

（３１）a. marker of interpretive use

b. part of explicatures, not higher-level explicatures

（３２）a. 太郎が窓ガラスを割った。

b. 太郎が窓ガラスを割ったのだ。

（３３）a. 窓ガラスを割ったのは太郎だ。

b. 窓ガラスを割ったのは次郎でなく太郎だ。

（３４）A: 太郎は今何をしているの？

B: 勉強してる。

（３５）勉強しているのだ。

（３６）a. ＊太郎が窓ガラスを割った<u>だろう</u>だ。

b. ＊太郎が窓ガラスを割ただ<u>だろう</u>。

（３７）a. ＊太郎は窓ガラスを割る<u>まい</u>のだ。

b. ＊太郎は窓ガラスを割るのだ<u>まい</u>。

（３８）marker of interpretive use

（３９）It is Taro who broke the window.

（４０）a. I say that it is Taro who broke the window.

b. I believe that it is Taro who broke the window.

c. I know that it is Taro who broke the window.

（４１）「（の）だ」は何らかの「話し手の関与」を暗示し、その方向に聞き手の注意を向ける。即ち、手続き的情報を伝え、聞き手が高次表意を復元するのに貢献する。

５．日本語の明示性

（４２）a.「のだ」表現は基本的に「A（の）はBのだ」なる構文を志向する判断文

b. 係結び文は「判断文」の一種。（重見 1994）

（４３）即ち、従って、つまり、結局のところ、というのは、言い換えれば、実は、問題は、etc.

（４４）a. Thus different experiences with inferential processes may nevertheless converge on the same logical system.

b. 従って、推論過程を伴ういろいろな経験をしても、同一の論理体系に収斂する可能性があるのである。

（４５）a. It is these assumptions, of course, rather than the actual state of the world that affect the interpretation of an utterance.

b. もちろん、世界の実態よりもむしろ、この想定こそが発話理解に影響を与えるのである。

（４６）a. In short, she was a witch who could make wishes come true. I had a wish. (T. Capote, 'Dazzle')

b. つまり、夫人は願い事をかなえてくれる魔女であり、そして私には願い事があったのだ。（野坂昭如訳）

（４７）a. Thus both the code model and the inferential model can contribute to the study of verbal communication.

b. 即ち、コードモデルと推論モデルのどちらも言語伝達の研究に貢献することができるのである。

（４８）a. ？従って、推論過程を伴ういろいろな経験をしても、同一の論理体系に収斂する可能性がある。

b. ？もちろん、世界の実態よりもむしろ、この想定こそが発話理解に影響を与える。

c. ？つまり、夫人は願い事をかなえてくれる魔女であり、そして私には願い事があった。

d. ？即ち、コードモデルと推論モデルのどちらも言語伝達の研究に貢献することができる。

（４９）a. Bill hit Mary. She left.

b. Tom ate the rotten meat. He fell ill.

c. The game was cancelled. The rain was heavy.

（５０）a. Bill hit Mary. So she left.

b. Tom ate the rotten meat. Because of that he fell ill.

c. The game was cancelled. The reason for that was that the rain was heavy.

（５１）a. ビルがメアリーをなぐった。それでメアリーは出ていった。

b. トムは腐った肉を食べた。そのために病気になった。

c. 試合は中止になった。雨がひどかったから。

（５２）a. ？ビルがメアリーをなぐった。メアリーは出ていった。

b. ？トムは腐った肉を食べた。病気になった。

c. ？試合は中止になった。雨がひどかった。

（５３）a. If you have any questions about banking procedure, ask Jim. He knows the form. (OALD[5])

b. 銀行の手続きについてわからないことがあればジムに聞くとよい。必要書類について知っているから。

（５４）a. The thing is, is he getting to helpe us? (CULD)

b. 問題は彼が我々を援助してくれようとしているのかだ。

（５５）a. Don't count your chickens before they are hatched, they say.

b. 捕らぬ狸の皮算用っていうだろう。

６．日本語の明示性と英語の非明示性

（５６）高次表意は日本語では明示されるが、英語では必ずしも明示する必要はない。

（５７）He's coming toward us.

（５８）a. こっちへ来るわ。

b. こっちへ来るよ。

c. こっちへ来るぞ。

d. こっちへ来るね。

e. こっちへ来るさ。

f. こっちへ来るわよ。

（５９）英語も日本語も文尾に位置するある種の語彙項目が高次表意の復元にかかわっている。

（６０）Tom is coming, isn't he?

（６１）a. The speaker confirms Tom is coming.

b. The speaker asks if Tom is coming.

c. The speaker wonders if Tom is coming.

（６２）I couldn't hire him. He was a crook, you see.

（６３）I'm telling you that he is a crook.

（６４）He is a crook, you know.

（６５）I'm saying (as a known fact) that he is a crook.

（６６）：Are you a nurse here?

：No. I'm a doctor, actually.

（６７）I unexpectedly/contradictorily say that I'm a doctor.

（６８）a.終助詞は高次表意を具現する。

b.ある種の副詞は手続き的意味を伝え、高次表意を表す文末表現と相関する。

c.遂行動詞が具現される。

c.発話と発話が明示的に結びつけられる。

References

Blakemore, D. 1996. 'Are Apposition Markers Discourse Markers?' *Journal of Linguistics* 32, 325-347.

Blass, R. 1990. *Relevance Relations in Discourse: A Study with Special Reference to Sissala*. Cambridge: CUP.

Carston, R. 1988. "Implicature, Explicature and Truth-theoretic Semantics." In R. Kempson (ed.) *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*. Cambridge: CUP, 155-82.

Itani, R. 1996. *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*. Tokyo: Hituzi Shobo.

Kamio, A. (神尾昭雄) 1990. 『情報のなわ張り理論』大修館書店

Kamio, A. (神尾昭雄) 1990. 「情報のなわ張り理論：基礎から最近の発展まで」神尾昭雄・高見健一『談話と情報構造』大修館書店 1-111.

Kamio, A. (神尾昭雄) 2000. 'An Aspect of Text Organization from the Viewpoint of the Theory of Territory of Information: A Comparison of Japanese and English Evidentiality.' 第７２回日本英文学会口頭発表

Nishiyama, Y. (西山佑司) 2000. 「書評：Akio Kamio: *Territory of Information*」『英文學研究』Vol. LXXVII, No. 1. 71-77.

Noda, H. (野田春美) 1997. 『「の（だ）」の機能』くろしお出版

Shigemi, (重見一行) 1994. 「「連体なり」文と係結び文と「のだ」文―係結び文から「のだ」文へ―」『高知大学教育学部研究報告』第２部第４９号

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Tanomura, T. (田野村忠温) 1990. 『現代日本語の文法 I—「のだ」の意味と用法』和泉書院

Uchida, S. (内田聖二) 1998. 「「（の）だ」－関連性理論からの視点—」小西先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『現代英語の語法と文法』大修館書店 234-251.

Uchida, S. (内田聖二) 2000. 「いわゆる談話標識をめぐって－Constraints on Implicatures or Explicatures?－」『英語語法文法研究』第 7 号 19-33.

Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic Form and Relevance." *Lingua* Vol. 90, Nos. 1/2, 1-26.

not un－X についての一考察

榊原 愛
大阪大学大学院

1. 序

例文（1）で示すような二重否定 not un－X 表現には、二通りの読みがある。

（1）He is *not unhappy*.
　　a. 彼は幸せでないことはない。
　　b. 彼は非常に幸せだ。

本発表では、この二通りの読みがどのように生じるのかを、Sperber and Wilson（1986）の関連性理論の枠組みから考察する。特に、吉村（1999）の「認知環境の修正」が読みの違いに大きく関わっていることを示す。

•二重否定 not un－X の特徴（田中(1998)）：

（2）It is *not unwise* to take precautions.
　　a. 予防策を採っていても賢明でなくはない。［控えめ表現：S読み］
　　b. 予防策を採れば大いに賢明だ。　　［緩叙法：X読み］

控えめ表現
- S読み：控えめ表現（understatement）（somewhat X）（控えめに言って文字通り控えめに言う言い方）
- X読み：緩叙法（litotes）（extremely X）（控えめに言ってかえって強い印象を与える表現）

• 控えめ表現は、メタ言語としての特徴を持っている。二重否定には、not un－X が un－X という語の使用の適切性を否定する、メタ言語否定としての談話修正機能が認められる。

（3）I'm *not* happy － I'm ecstatic.
　　（私は嬉しいどころか、狂喜している。）

（田中(1998)に若干の修正）

2. 先行研究

2.1. Horn(1991)

（4）... the doubly negated expression is somewhat weaker than the straightforwardly positive one.　　(p. 84)

（5）**Division of pragmatic labour**
　　The use of a longer, marked expression in lieu of a shorter

expression involving less effort on the part of the speaker tends to signal that the speaker was not in a position to employ the simpler version felicitously. (p. 85)

意義:
not un－X 表現が使われることに何らかの意義があることを示した。

問題点:
X読みの生成に関する言及が、明示的でない。

2.2. van der Wouden (1997)

(6) It is *not unwise* to take precautions.

(7)

a	unwise	.....	wise	← a scale of wisdom
b	not wise		....	← logical denotation of *not wise*
c	....	not unwise		← logical denotation of *not unwise*
d	....	not unwise		← pragmatic possibilities of *not unwise* (p. 217)

(8) ... *not unwise* refers only to the middle area in the picture above and *unwise* refers to the left column only, whereas *not wise* covers the two columns to the left, i.e., the complete area not covered by *wise*. (p. 218)

(9) ? A not unmarried woman entered the room. (p. 218)

- 'unmarried' のような段階性のない語には、not un－X 表現は使えない。

意義:
not un－X 表現が論理的に指すところと語用論的に指すところの違いをスケール上で明確に表した。

問題点:
X読みの生成に関する言及が、明示的でない。

2.3. 田中(1998)

(10) It is *not unwise* to take precautions. (=(2a))

(11) It is *not unwise* to take precautions. (=(2b))

(12)

unwise	somewhat wise	neutral	wise	extremely wise
	(10) X読み			(11) Y読み

(田中(1998:200)に若干の修正)

意義:
X読みにも焦点が当てられた。

問題点:
S読み、X読みがスケール上で指す位置を示しただけで、それぞれの読みが生成されるメカニズムには触れていない。

まとめ:
上記の三研究では、いずれも次のような問題が生じる。
- not un－X 表現に生じる控えめ表現の特質が不明確。次の例文（13）に示すように、二重否定 not un－X 以外でも控えめ表現として使用できる。

(13) a. To a sick man: You don't look too good.
b. Doctor: I must have saved a few lives, here and there.
(van der Wouden(1997:216))

- 控えめの意味が生じるメカニズムが示されていない。

3. 認知環境

van der Wouden（1997）が示した（7c）からも明らかなように、not un－X 表現は論理的にはかなりの広い範囲を指すことができる。しかし、実際には聞き手や文脈によって、not un－X がスケール上のどこを指しているかは異なってくる。このことは、次の（14）からも明らかである。

（14）「「荘厳さ」のような印象概念やtallのような段階的概念の定義は、荘厳さや高さの専門家がいないことから誰の頭の中にもない。単語の大多数は定義不可能な概念を表しているに過ぎないのだ。」（今井(2000:420)）

•ある対象に対して、主観的な判断をする際には、絶対的な基準はなく、Sperber and Wilson（1986）で提案された認知環境が関係している。

• ＜ 認知環境 ＞
（15）「ある人が抱いている想定の総体をその人の「認知環境（cognitive environment）と呼ぶならば、人はすべて自分の認知環境が改善されることを欲している。..... 同時に人は、他人の認知環境を改善することにも熱心である。」（今井(2000:419)）

• ＜認知環境の修正＞
（16）「コミュニケーションにおける話者の意図は、聴者の認知環境（CE)、即ち、世界の表示を論理形式の削除、追加、確信度の変更により修正することである。このような変化は文脈効果と呼ばれ、新しく運ばれてきた論理形式を、既に認知環境に含まれている論理形式と比較する。認知環境が互いに矛盾する論理形式を含まないという意味で一貫性を維持しつつ、アクセス可能で最も信頼できる想定を表す論理形式で認知環境を満たすことが、コミュニケーションでの目標となる。」（吉村(1999:199)）

4. 認知環境から見た not un－X の意味

S読みの場合でも、X読みの場合でも、認知環境が修正される前の not un－X 表現が指すスケール上の領域は広範囲にわたり、漠然としている。そのために、かえって表現自体の情報量が少なくなっている。しかし、認知環境を修正することで、スケール上のある部分を顕在化することができる。また、この顕在化される部分の違いにより、S読み、X読みという二つの読みが生じるものと思われる。

4.1. S読み

(17) I haven't seen *Pretty Woman*, but I read the script ..., and it was a dark, kind of quirky, *not unintersting* script.
(Horn(1991:92))

(18) uninteresting | interesting

(19) uninteresting | interesting

(20) uninteresting | somewhat interesting | extremely interesting

(21) uninteresting | somewhat interesting

認知環境修正のステップ:

① 'uniteresting' につながる想定（'a dark, kind of quirky object'）が認知環境に導入される。
② 'not' で否定することにより、'uninteresting' でないことが明らかになる。
③ 'interesting' とも言えない（言えるのであれば、直接使うはず）。
④ 上方への推論の可能性を却下する文脈（'a dark, kind of quirky'）があるために、中間領域の 'somewhat interesting' が最も適切。

(22) It was a *not unkindly* remark. (田中(1998:204))

考察:

- 認知環境の修正の段階で、'somewhat X' という中間領域が顕在化される。
- 中間領域を顕在化させることで、話し手の判断が絶対的でないことを示唆する。 ⇔ 普通の控えめ表現では、 上記のステップを踏まない。

(23) a. They were *not unattractive* teeth, but they were the only flawed part of her. (田中(1998:204)
b. They were *somewhat attractive* teeth, but they were the only flawed part of her.

- (23b) では最初から、*somewhat attractive*が顕在化している。

4.2. X読み

(24) The children were invited to eat the ice cream, and they were *not*

unwilling. (Bolinger(1972:116))

(25) unwilling | willing

(26) unwilling | willing

(27) unwilling | somewhat willing | | extremely willing

(28) unwilling | extremely willing

認知環境修正のステップ:

① 'unwilling' という想定が認知環境に導入される。
② 'not' で否定することにより、'unwilling' でないことが明らかになる。
③ しかし、'willing' とも言えない。(言えるのであれば、直接使うはず)
④ 「子供はアイスクリームが大好きだ」という一般的概念が下方への推論の可能性を却下するため、極値を指す 'extremely willing' が最も適切。

(29) It also means that the male and females are *not unrelated* animals. (BNC: AMG1556)

考察:

- 認知環境の修正の段階で 'extremely X' に当たるスケール上の極値のみが顕在化される。
- 文脈や語用論的前提に依存して、間接的に極値を顕在化させることで、話し手の強い判断にヴェールをかぶせる。

4.3. メタ言語否定

(30) Unhappy? I'm *not unhappy* — in fact I'm delighted! (Horn(1991:94))

(31) unhappy | happy

(32) unhappy | happy

(33) unhappy happy

(34) unhappy happy | delighted

認知環境修正のステップ:

① 'unhappy' という想定が認知環境に入力される。
② 'not' で否定することにより、'unhappy' でないことが明らかになる。
③ 'happy' を中心に考えるスケール内には該当する値がない。
④ 'happy' を中心に考えるスケールに新たな領域が加えられる。

(35) It is *not unwise* to take precautions, it is downright stupid. (Horn(1989))

考察:

- メタ言語否定では、スケールに新たな領域が加わる。
- 認知環境の修正ステップが、S読みやX読みの場合と異なるので、田中（1998）の示すようにS読みやX読みが「メタ言語的特徴を持っている」、とは言えない。

4.4. 認知環境の修正と二つの読み

not un－X 表現で二つの読みが生じることを「認知環境の修正」という観点から考察した意義は次のような点にある。

（i）従来の研究では 'un－X' を軸として考察されていたのに対し、本発表では、'X' を軸にして、not un－X 表現の解釈過程を示した。

（ii）'X' の範囲にある、という共通性を持ちながら、認知環境を修正するステップにおいて、'X' よりもスケール上で下方が顕在化されるか、上方が顕在化されるか、によって、S読みとX読みが生じる。
- S読み ： 'somewhat X' に当たる中間領域が顕在化される。
- X読み ： 'extremely X' に当たるスケール上の極値のみが顕在化される。

（iii）メタ言語否定は「スケールに新たな領域が加えられる」という認知環境の修正が行われるために、S読みやX読みとは区別される必要がある。

5. 結語

- not un－X 表現に、S読みと、X読み、の二つの読みがあることは、認知環境の修正段階で、'X' よりも下方が顕在化されるか、上方が顕在化されるか、による。
- S読みにしてもX読みにしても、not un－X 表現により、話し手は言外の意味を弱めることができる。

参考文献

Bolinger, Dwight L. (1972) *Degree Words*. Mouton, Hague.

Carston, Robyn (1994) "Metalinguistic negation and echoic use," *UCL Working Papers in Linguistics* 6, 321-339.

Carston, Robyn (1996) "Metalinguistic negation and echoic use," *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.

Chapman, Siobhan. (1996) "Some observations on metalinguistic negation," *Journal of Linguistics* 32, 387-402.

Geurts, Bert (1998) "The Mechanisms of Denial," *Language* 74-2, 274-307.

廣瀬幸生、加賀信広（1997）『日英語比較選書－④ 指示と照応と否定』研究社 東京.

Horn, Laurence R. (1989) *A Natural History of Negation*, The University of Chicago Press, Chicago.

Horn, Laurence R.(1990) "Hamburgers and Truth: Why Gricean explanation is Gricean," *BLS* 16, 454-471.

Horn, Laurence R.(1991) "Duplex negatio affirmat ...The Economy of Double Negation," *CLS* 27-2, 80-106.

今井邦彦（2000）「関連性理論とはどういう理論か」『英語青年』第146巻, 7号. 418-

422.
Iwata, Seizi. (1998) "Some extensions of the echoic analysis of metalinguistic negation," *Lingua* 105, 49-65.
太田朗 (1980)『否定の意味』大修館書店，東京.
Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.(内田聖二他(訳) (1993)『関連性理論－伝達と認知－』研究社，東京.)
田中廣明 (1995)「not un-X 考」『英語青年』第141巻，第4号，12-15.
田中廣明 (1998)『語法と語用論の接点』開拓社 東京.
van der Wouden, Ton (1997) *Negative Contexts*, Routledge, London.
Yoshimura, Akiko (1994) "A Cognitive Constraint on Negative Polarity Phenomena," *BLS* 20, 599-610.
吉村あき子 (1999)『否定極性現象』英宝社，東京.
吉村あき子 (2000)「メタ言語否定と関連性理論」『英語青年』第146巻，7号，438-441.

使用コーパス

British National Corpus [BNC] (http://info.ox.ac.uk/bnc/)

反論という言語行為へのアプローチ
―表現形式・機能及び構造構築を中心に―

趙　華敏
同志社女子大学博士課程（後期）
中国北京大学外国語学院

0．はじめに

近年、語用論の中核をなす言語行為についての研究は多角な視点から進められてきた。中では既存の言語行為理論に依存し、具体的な談話行動を対象とした研究が多い。相手の意見をいかに角を立てずに否定するか、という話し手の態度表明のストラテジーについての研究もその中の一つである。しかし、実際の言語生活では、相手の意見を否定するだけでことが済まない場合も多々ある。本稿では、テレビ番組を文字化したものや対談、映画のシナリオ、大衆小説から集めた用例をデータに、相手の意見に反論する時、話し手が取る表現形式、その形式が働く機能について、分類・整理し、そして、一見多様な形式を見せている反論という言語行為はどういう構造をなしているか、その構造の構築を試みたい。

1．反論とは何か

今まで、否定の表現形式について、文法論、意味論の立場から行われた研究は少なくない。最近、語用論或いは談話分析の見地から否定表現を扱う研究も国内外で見られるようになった。筆者が注目している反論と反対に、いかに対立を緩和するかの研究もある。いずれも大変示唆に富んでいる。が、相手の命題を否定するだけで、まだ不十分で、更に反対の意見を出さなければならない時はどう表現すればいいかについての研究はまだ見ない。筆者はそれを究明したい。そのために、まず、扱う研究対象をはっきりさせておく。

次の例を見てみよう。

（1）コンテクスト：父親は娘の利益を守るために、婿を責めるが、娘は父親の言い方が気に食わない。
父親：きみ（婿）、そんなえらそうなことが言えるか。あのおふくろさん（婿の母親）に首根っこを押さえられてさ、女房も守れないくせに。
娘：<u>そんな失礼な言い方ないでしょ</u>。英作はね、自分のしたい仕事のために大阪から東京に、病院もお母さんも捨ててきたのよ。私のことを本間のお母さんから守ろうとしてずいぶんいやな思いに耐えた。今度のことも、私を守るためにお母さんに逆らって迎えに来てくれたじゃない。*そんな英作がお父さんに悪く言われることはないと思う！*　（渡る）

娘は下線のついた文でいったん父親の話を止めて、その後は父親が言ったのと反対の事実を述べる。最後は斜体字の文で父親に反論をする。これが本稿で捉えようとしている反論の言語行為である。

言語行為を考える時、その発話が適切か否かは優先的に注目される。どういう条件の下で反論の行為が適切とされるか、J.R Searle の言語行為の適切性条件（Searle1979 他）[i] に従い、具体的考えてみた。

命題内容条件　話し手は先方の命題に反する反対の命題を持っている
準備条件　①話し手は自分の命題が先方のと十分対抗できると信じている
②先方は議論する力を十分持っている
誠実性条件　話し手は自分が持つ命題が正しく、自分ないし先方にとって益になると思っている
本質条件　先方に自分の意見に同意し、或いは正当性を認めてもらう

以上の適切性条件に満たされる発話行為が反論の発話行為である。この条件を用いて上の例を判断してみる。例（1）では話し手は父親の英作に対する評価と正反対の意見を持っているという命題内容条件に満たされている。準備条件から見て、話し手は「英作はね、自分のしたい仕事のために……私を守るためにお母さんに逆らって迎えに来てくれた」と

いう十分すぎるくらいの理由で父親と対抗できる自信を持っている。勿論、先方も自分に反する力を持っているのを覚悟しての反論である。そして、自分の考えを相手に分かってもらうことによって、自分と英作には勿論、父親が英作をもう一度見直すにも有益であると思っている。最後に、本質的には、父親に自分の意見に同意してもらおうとしている。以上の理由で例（1）を反論の言語行為と判断する。

以下、この反論の適切性条件に準じて、反論の表現形式を見ていきたい。

2．反論の表現形式についての概観

言語行為を考える時に、その場の発話は適切かどうかは何よりも重要であると前節ですでに触れている。同じ発話でも、時や場所、対象人物が違えば、まったく違う効果が現れる。それが裏付けられるように、反論という言語行為は多彩な表現形式がある。

2．1　前置き表現の導入

ここでいう前置き表現は話し手の言語行為の諸側面にまつわる対人的な配慮のあり方を明示的な言葉で言ったりすることを言う。次の例を参照されたい。

（2）コンテクスト：争論の両方は選職時代の到来とまだ時期尚早というそれぞれの命題を持っている。

堺屋：……。このために埋もれた個性というのは何百万もあったと、これが、適材適所にまわれる利点もある。

内橋：うん、分かりますね。あのう、しかし、堺屋さんがおっしゃることは要するに、今、あのう、新しい言葉でね、えー、大変いい言葉だと思いますけれども、「選職時代」だと言っていますね。職を選ぶというね、……。そういう時代に選職と言う、職を選ぶというのは働いている人から見てですね、可能でしょうか。（選職）

下線部がここで言う前置き表現に当たるものである。いったん先方の考えを評価しておく。その後、自分の意見を持ち出す。例のように前置きで自分の態度をある程度すでに表明している。ただ、一言前置き表現と言っても、レベルの違いがある。相手の意見を部分的に受け入れてから、自分の論を述べるとか、相手の意見に真っ向から反対するとか、場合によって、皮肉っぽく聞こえる場合もある。表現伝達上の配慮や対人的な配慮が含められている待遇表現的なもので、正面衝突を避ける緩衝剤的な役割を果たしている。

2．2　対立立場の導入

直接に相手の意見について云々するのではなく、対立した意見を持ち出すことによって、話し手の態度表明をし、相手に反論する目的を実現する。

（3）コンテクスト：親子が小遣いと借金に関して違う考えを持っている。

母親：あなた、母さんの誕生日祝いにブラウスを買った時、おじいちゃんにお金を借りて、まだ返していないでしょ。それにまたお小遣いをもらうなんて。

息子：借金とお小遣いはちがうだろ。借金はいつか返さなくてはならないけど、お小遣いはもらうもんなんだ。（渡る）

例を整理すると、以下のようになる。

類　型	参加者	親の論	子の論
会　話	親　子	借金はまだ返していないのに、またお小遣い、返せるの？	借金と小遣いは違うもので、一緒にすべきではない。

表で見たように、両者は対立した立場に立ち、それぞれ自分の意見を述べることによって、反論の場面を織り成していく。

2．3　他人の言葉の借用

本来は自分の口から意見を言わなければならないのだが、何かの原因で直接に言いにくく、あるいは立場上、自分より有利か、権威のある人が言っていることを借りて言えば、もっと効果がある、というような表現である。

（4）コンテクスト：真のハワイ旅行を止めたい健吾と行きたがっている真。

健吾：お父さんやお母さんは夏休みもなく、働いているんだよ。申し訳なくて行けないよ。

真：お父さんもお母さんも行っていいって言ってるんだからいいだろ。（渡る）

相手の論に反するのが本心に違いないが、自身の立場から言ってもたいした効き目がないと自省して、自分より上位、あるいは有利な立場にいる人の言葉を借りて反論する例で

ある。

2．4　推意や言外の意味の導入

推意も言外の意味も語用論研究のもっとも注目する分野である。関連性理論によれば、文脈効果[ii]こそ推意が予想通りに働くかどうかの決め手である。次の例を見よう。

（5）コンテクスト：「20 世紀　世界を知るための本　ベスト 30」を選ぶ。

三浦：それでは、ああいうスタイルの小説の創始者ということでカフカを入れますか。ぼくは、個人的にはシュルツの『肉桂色の店』のほうがはるかに好きなんですが。

丸谷：しかし、シュルツも、カフカと同様にくたびれる。　（文藝）

例（5）の前提はカフカもシュルツも同じスタイルの小説家であるが、カフカは創始者の地位にあるので、三浦は個人的にはシュルツが好きでも、やむを得なくカフカを選ぶ。丸谷はシュルツを否定していると同時に相手の個人的な意見にも反対している。読んでいて同じ疲れるのなら、創始者を読むほうがもっと意義があり、正当性があるのを主張している。

2．5　遮断法の導入

遮断というのは聞き手が話し手の言うことを途中で止めることを言う。

（6）コンテクスト：元社長が女社長に不服を感じる。

女社長：「私が今まで何とかやって来たのは、運がよかったのと、社員みんなの協力があったからです。」

元社長：「馬鹿いえ、俺がちゃんと商売をしていたから、それを引き継いでやってるだけだ。」　（女）

2．5の形式はほとんどせっぱ詰まった時に、これ以上相手の論を聞いていられない。一秒でも早く自分の論を出したい時に現われやすく、**合図の発信**のようなものが多い。他に、相手が言うことを全面的に否定し、続けて言うのを止める**態度の明示**の表現がある。2．1の「前置き表現の導入」は反論の態度（部分反対か全面反対か）を相手に心理的な準備を与えるのがねらいであるのに対して、この種の表現は自分の態度を顕わに出し、**態度の明示**によって止める機能を果たしている傾向がある。

2．6　挑戦的な姿勢の導入

（7）コンテクスト：好きな人が聾話者だ。それを知らなかった哲夫は仲間のタキを尋ねて悩みを言う。

タキ：「……。かわいそうによお、あんな美人なのによお、口がきけねえじゃなあ、まったくよお」

哲夫：「だからどうしたって言うんだ、そったらこといって、タキさんは一体自分が何ほどの人間だと思ってんだ！」　（息子）

この種の反論は真っ向から相手の論に反するのが普通である。論より剣幕さで相手を圧倒するのが目的のようである。

以上、6つの形式に分けて見てきたが、反論の表現形式を**表Ⅰ**のように整理しておきたい。

表Ⅰ

態　度	表　現　形　式	代　表　例
正面衝突回避型	1．前置き表現の導入	「分かりますね」「それは～さんも悪いよ、けれどもね、」「おっしゃることはごもっともですが」「お言葉ですが」等々
	2．対立立場の導入	「しかし」「でも」及び反論そのもの
	3．他者の言葉の借用	「～さんが……と言っています」等々
	4．推意や言外の意味の導入	ケース・バイ・ケース
正面衝突型	5．遮断法の導入	合図の発信：「あのうね」「あなた！」「～さん！」「黙れ！」態度の明示：「冗談じゃない」「そんなことはない」「それは違う」　等々
	6．挑戦的な姿勢の導入	「だって」「どうしたって言うんだ」「誰が何をしたというんですか」等々

3．反論の諸形式の機能――ストラテジーに代わって

反論の必要に迫られた時に、どの形式が優先的に選ばれるかはコンテクストに左右されるところが大きい。ここでは非言語的な文脈[iii]を中心に、特に反論が行われる状況、双方の人間関係、力（権威）関係を見ていきたい。状況は公的な場と私的な場、人間関係は主として親疎・地位の上下、力関係は権威の強弱に焦点を絞りたい。人間関係は単に物理的な面だけではなく、心理的な要素も大きい。まず、表Ｉにまとめてある「正面衝突回避型」から見ていきたい。

３．１　正面衝突回避型

この類型の１番に立つ表現形式は「前置き表現の導入」である。対人的、待遇表現的な配慮を置くことによって聞き手に心理的な準備を与えるのが特徴である。用例の統計によると、この形式は主として公的な場（対談、シンポジウム等）での発話に多く用いられている。人間関係は基本的に平等であるが、話し手は心理的に自分を疎・下・弱の立場に置きたがる傾向がある。私的な場では話し手は物理的な疎・下・弱の立場に左右される点が目立つ。こういう選択の適切さはG.Leechの『丁寧さの原理』(1983) の「気配りの原則」ａ．「他者に対する負担を最小限にする。」「是認の原則」ａ．「他者の非難を最小限にする」によっても説明できる。公的な場や話し手より上位の人間への適用は「前置き表現の導入」の特徴と考えても差し支えないようである。

「正面衝突回避型」の他の表現形式は特に状況に束縛される傾向が見られない。人間関係に関しては親疎の要素は特に目立たない。狙っているところはまさに正面衝突を避けることであろう。言うべきことを言って、後は聞き手の出方次第である。「推意や言外の意味の導入」は聞き手に真意を悟らせる点が特徴であり、「他者の言葉の借用」という形式は話し手が言いにくさを避け、時には権威性を強めたい場合には有効だという点は見逃せない。

概して、正面衝突回避型の表現は人間関係の親疎より、地位の上下、力関係の強弱に左右され、下や弱に置かれる方が取りやすい表現形式である。

３．２　正面衝突型

３．２．１　遮断法の導入

合図の発信に使われる遮断は特に状況・人間関係・力関係に拘束されない。先方が言い終わるのを待っていられないという気持ちを合図に託されているのである。

文で遮断するほうは、話し手の態度がすでに文に現われているので、態度の明示となる。公私両方の場に見られるが、量的に私的な場で多く使われ、人間関係は「親・上」、力関係は「強」という傾向が見られる。

３．２．２　挑戦的な姿勢

表Ｉの１から５までの形式に比べて、この種の反論の出方は一番激しい。私的な場に使われるのが普通で、人間関係は近しい。力関係は特に気を配られていない。理性より感情が優先的に配慮される。

諸表現形式の機能は**表Ⅱ**を参照されたい。

表Ⅱ

機能 / 表現形式	状況		対人関係				力関係	
	公	私	親	疎	上→下	下→上	強→弱	弱→強
１．前置き表現の導入	＋	(＋)	(＋)	＋	(＋)	＋	(＋)	＋
２．対立立場の導入	＋	＋	＋	＋	(＋)	＋	(＋)	＋
３．他者の言葉の借用	＋	＋	(＋)	＋	(＋)	＋	(＋)	＋
４．推意と言外の意味の導入	＋	＋	(＋)	＋	(＋)	＋	(＋)	＋
５．遮断法の導入	(＋)	＋	＋	(＋)	＋	(＋)	＋	(＋)
６．挑戦的な姿勢	(＋)	＋	＋	(＋)	－	＋	－	＋

「＋」は機能する。「－」は機能しない。「(＋)」は機能するが、典型的でない。

4．反論という言語行為の構造

4．1　反論の基本的な構造

２と３で反論の表現形式と機能を一通り見てきたが、ここでは話し手と聞き手がどういうプロセスをたどって、反論を織り成していくのかを観察したい。まず、次の例を参照されたい。

（8）コンテクスト：病院で。夫婦がお母さんのことでもめている。

夫：たかがそんなくらいの怪我で、検査検査って、もう、大げさすぎるよ。

妻：精密検査をしてくださるのにはそれだけの理由があるから。わたし、ただ廊下を踏み外して落ちただけじゃないのよ。洗濯物を取り込んでいたら、急にお母さんが……突き飛ばして。……頭を思いっきり撃ったの。

夫：おふくろがやったと言うのか。

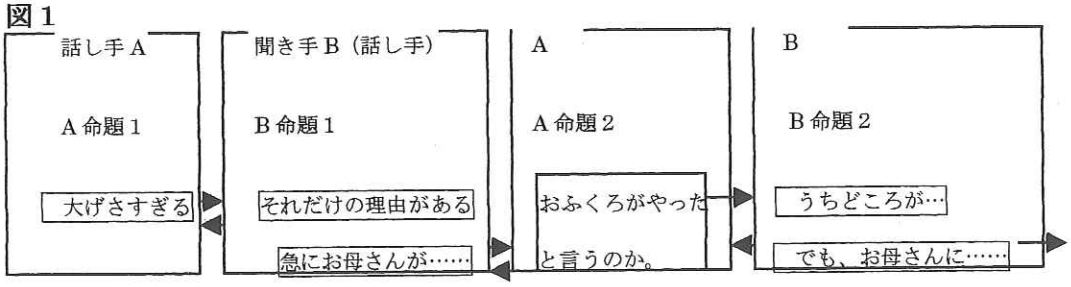
妻：うちどころが悪かったら、死んでたのかもしれないのよ。でも、お母さんに殺されそうになったなんて、人には口がさけったって言えないじゃない。……

夫：何か勘違いしてるんじゃないのか。いくらおふくろがおかしいといったって、そんな手荒なことをするはずがないだろう。……

妻：だって、ほんとうなんだもの。お母さんは……　　（渡る）

線の引いたところは反論のやり取りになる。この談話を図式すると以下のようになる。記述の便宜のため、最初の話し手（夫）をＡとし、聞き手（妻）をＢとする。ただし、言葉のやり取り（exchange）が続く限り、話し手であると同時に聞き手でもあり、同じことに、聞き手も話し手である。Ａに属する命題を「Ａ命題１……ｎ」とし、Ｂに属する命題は「Ｂ命題１……ｎ」とする。

図１



のように反論が展開されていく。勿論、ＡとＢは常に一対一ではなく、同じ命題を持つ複数対複数の談話も考えられる。図１の中では命題だけ扱っているが、どのように命題を切り出したほうが適切かは状況や人間関係、力関係によるストラテジーの選択が重要である。切り出しの部分も考慮に入れて、反論の例を分析すると、必要に応じていくつかのパターンが見られる。表Ｉにまとめた諸形式を大別すると、大きくマーカー式、ノンマーカー式及び両者の中間にある照応式がある。以下、分けて言及する。

4．2　モデル１　マーカー式

マーカーというのは反論の命題を引き出すための語や文のことである。前で触れた前置きの表現、話し手の話を遮断するのに用いられる合図の発信と態度の明示、それに一般に言う逆説の役割を果たす接続表現[iv]などがそうである。図２を参照されたい。

どのパターンが採用されるかは、話し手が表Ⅱの機能に対する判断による。モデルを具体例で示してみよう。

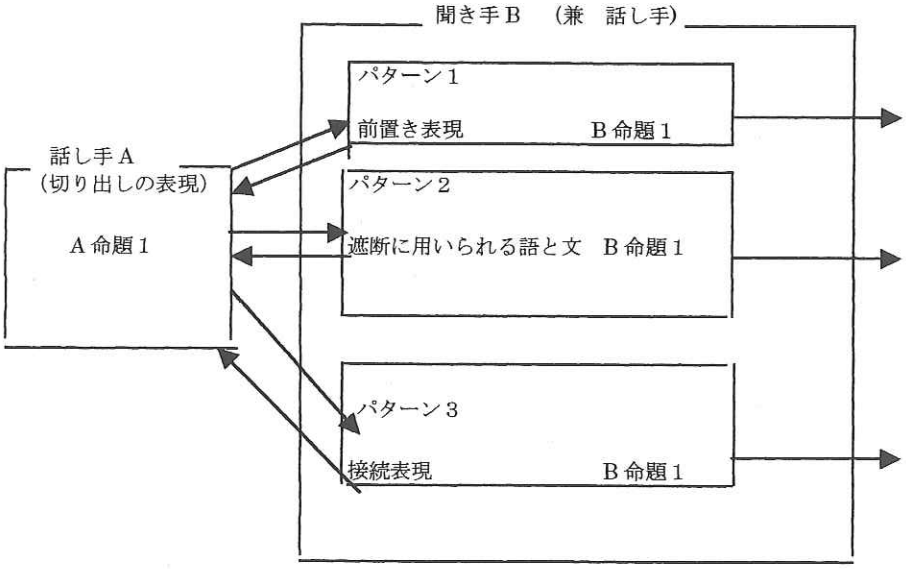
（9）コンテクスト：老婦人と青年の恋について対談する。

田辺：私はロマンチックなのかも分からないけど、*そういう雰囲気じゃなかったのよ。男のほうがものすごくやさしいもの。*
（前置き表現）　　（Ａ　命題１）

佐藤：いや、それはわからんよ。*外国の男って口がうまいから*……。
（遮断）　　（Ｂ　命題１）

田辺：だって、どってもやさしかったよね。　　（おせい）
（接続表現）　（A　命題２）

図２（モデル１）



４．３　モデル２　前方照応式

Halliday and Hasan (1976) はテクスト内の各各の文がどのような仕組みで互いに一つのまとまったテクストを構成しているかをつながりという概念を使って明らかにしている。ここで言う「つながり」は「照応[v]」によって実現されている。論争をする双方は相手の発話の中に現われるのと同じ語、同義語、指示詞、時には文全体を繰り返すことによって、鎖のように談話を繋いでいく。

(10) コンテクスト：婿は妻の父親の自分の母親に対する評価を受け入れがたく思っている。
父親：（自分の娘に向かって）それはね、そんなわがままはね、英作さんに通っても、あのおふくろさんに通りっこないって。
婿：私の母親だって馬鹿じゃありません。長子が一生懸命自分らしく生きようと努力しているのを見たら、いつかきっと分かってくれます。
父親：きみ、そんなえらそうなことが言えるか。……　　（渡る）

下線部の「あのおふくろさん」と「私の母親」は同一人物を指しているから同義語の照応になる。囲み文のいつかきっと分かってくれますは婿の命題で、父親の目にそんなえらそうなことに見える。指示詞兼文の照応と捉えられる。このように照応は一つの談話を構成するのにつながりの役割を果たしていると言えるであろう。

照応も有標という意味で、４．２のマーカー式と同じように扱う可能性も存在するが、違いは、マーカーは反論の切り返しになるが、照応は反論そのものの一部を成しているところにある。

４．３　モデル３　ノンマーカー式

ノンマーカー式というのは、４．２、４．３と対応的に、話し手と聞き手の発話をつなぐ語や文がないものを言う。関係がないように見える談話の繋ぎの働きをするのは推意と関連性である。

推意と称される以上、会話の中に言外の意味として存在し、実際の言語使用では表面化してこない。よって、推論の過程を通じて帰結が導き出されるのである。推論の過程は関連性理論と切り離しては考えられない。Sperber & Wilson (1986,1995)によれば、ａ．言

語情報に限らず、人間が日常的に取り入れられるあらゆる知覚情報、認知科学、心理学なども大いに働く。 b．当該の情報が前提となる文脈と相まって生じる文脈効果が大きければ大きいほど、またその処理のためにかける労力が小さければ小さいほど、当該の情報は関連性が大きいのである。

(11) コンテクスト：お嬢さんの農家の生活を体験したいという希望について親子が違う意見を持っている。

息子：馬鹿なことを言うもんじゃないよ。大事なお嬢さんをそんな簡単に、……何を考えてるんだ。

母親：住み込みで働きたいっておっしゃってるの。 (渡る)

息子の命題は大事なお嬢さんを泊めるのが軽率である。母親の命題は次のように推意できる。

①お嬢さんは住み込みで働きたいと言っている。

②そう頼まれた以上、泊めないわけにはいかない。

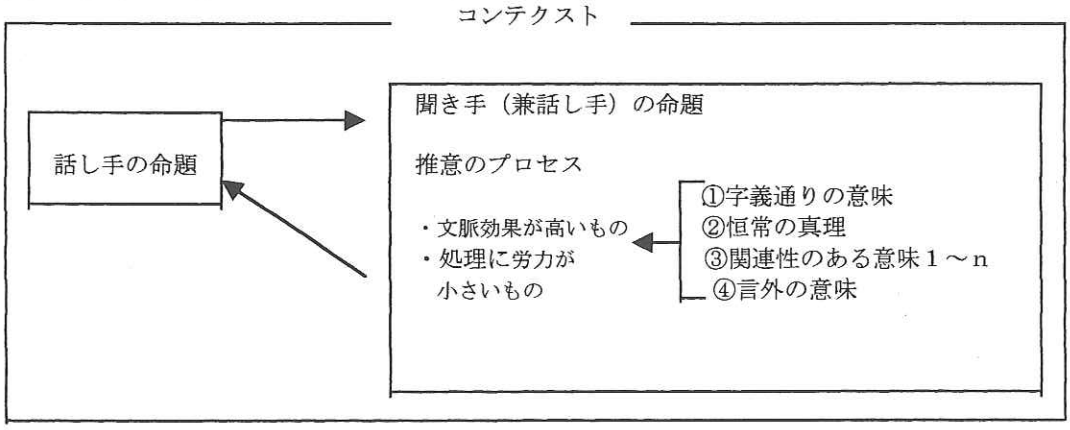
③お嬢さんを農家に泊めるのは普通ではないことは常識だ。

④本人が希望するのだから、何も私が非常識ではない。

①は字義どおりの意味である。②と③は通常のことで、誰もが分かっている。が、本人が頼むなら別のことになる。④は決して私が非常識ではないのが母親の本心であるし、息子の命題に反論することになる。

ノンマーカー式のモデルを次のように図示してみたい。

図３（モデル３）



以上、反論のモデルを３つ描いてみたが、取捨選択は表Ⅱに示された状況、人間関係、力関係、ひいては社会のしきたりによるところが大きい。

５．終わりに

以上、反論という発話行為へのアプローチを題に一通り見てきたが、まだ初歩的な段階にとどまり、より綿密な議論、検証を通じて、今の論を固めていきたい。構造と言っても、まだ、切り出しや反論の序の口にとどまっているに過ぎない。論そのものはどう成しているか、まだ言及していない。それを今後の課題にしたい。そして、中国語との対照研究を通じて、両言語の反論という発話行為の異同と特徴を突きとめたい。

[i] Searle は、個々の言語行為が成立するための条件として次の四つを挙げた。
命題内容条件　発話の内容が満たすべき条件
準備条件　発話の状況に関する条件（話し手の聞き手に対する対人関係、話し手の聞き手に関する信念など）
誠実性条件　話し手の意図に関する条件
本質条件　特定の発話行為の遂行に本質的な条件
以上は金水敏　今仁生美著『意味と文脈』P.138 による。

[ii] 関連性理論（relevance　theory）は D.Sperber と D.Wilson が Grice の協調の原理理論を出発点として提唱した理論である。関連性理論が想定する文脈効果は次の三つである。
a．処理しようとする情報が文脈内の情報と相関し、何らかの情報を導出する場合。
b．処理しようとする情報が文脈内の情報の証拠となり、この文脈の情報の確証度を高める場合。
c．処理しようとする情報が文脈内の情報と矛盾（し、この文脈の情報の削除を）する場合。
以上は金水敏　今仁生美著『意味と文脈』P.152 による。

[iii] 橋内武氏の『ディスコース』によると、コンテクストには言語的な文脈と非言語的な文脈がある。非言語的な文脈はテクストそのもの以外のさまざまな要素を指す。例えば、媒体、コミュニケーション行動の類型・目的、状況、参加者などがそれである。

[iv] 文と文、言語行為を考える場合、発話と発話を結ぶ機能を持つ接続語句と考える。本稿では主として接続詞を中心に言及している。

[v] Halliday&Hasan によれば、照応は文脈照応と外界照応に分けられ、文脈照応は更に前方照応と後方照応があるが、筆者がここで言う照応は「前方照応」を指す。

用例出典

おせい：	おせいカモカの対談集　（田辺聖子）
女：	女社長に乾杯！（赤川次郎）
選職：	選職時代の到来か？　（テレビ　毎日放送 News23）
文藝：	文藝春秋　2000.2　増刊号
息子：	息子　（山田洋次シナリオ集）
渡る：	ドラマ　渡る世間は鬼ばかり　（橋田壽賀子）

参考文献

J.L.オースティン　『言語と行為』　大修館書店　1978
沖　裕子　1995　「接続詞しかしの意味・用法」　『日本語研究　大 15 号』　東京都立大学国語学研究室
――――　1996　「対話型接続詞における省略の機構と逆接――「だって」と「なぜなら」「でも」――」　中條　修　編『論集　言葉と教育』　和泉書院　1996
柏崎秀子　1992　「話しかけ行動の談話分析――依頼・要求表現の実際を中心に――」　『日本語教育 79 号』
熊取谷哲夫　1992　「発話行為対照研究のための統合的アプローチ――日英語の「詫び」を例に――」　『日本語教育 79 号』
金水敏　今仁生美　2000　現代語学入門『意味と文脈』　岩波書店
杉戸清樹　1996　「メタ言語行動の視野――言語行動の「構え」を探る視点――」　『日本語語学』10 月号　VLO.15　明治書院
銭冠連　1997　『漢語文化語用論　Pragmatics in Chinese Culture』　清華大学出版社
張　勤　1999　『比較言語行為論　日本語と中国語を中心に』　好文出版
津田早苗　1994　『談話分析とコミュニケーション』　リーベル出版
橋内武　1999　『ディスコース　談話の織りなす世界』　くろしお出版
蓮沼昭子　1997　『「だって」と「でも」――取り立てと接続の相関――』　『外国語学部紀要　第 10 号』　姫路独協大学
澎増安　1998　『語用・修辞・文化』　学林出版社
本田厚子　1999　「日本のテレビ討論に見る対立緩和のルール」　『言語』1999.1　大修館書店
マルコム・クールタード　『談話分析を学ぶ人のために』　世界思想社　1999
ヤコブ L.メイ　『ことばは世界とどうかかわるか　Pragmatics』　ひつじ書房　1996
山梨正明　1992　『推論と照応』　くろしお出版

認知的不調和としてのアイロニー：認知から情緒へ

春木茂宏
大阪大学大学院

1. 序

本発表の目的：アイロニーの観察に基づき、その特性である、情緒的側面と認知的側面とを、認知的不調和分析（春木(2000)）が同時に説明できることを示す。

(i) アイロニーは、情緒的側面が強いのはなぜか。アイロニー（特に、サーカズム）が否定的感情と結びつきやすいのはなぜか。（4.1.1 節で扱う。）
(ii) その一方で、伝統的な修辞学者が述べてきたように、アイロニーの意味は字義とは逆であるという直感が、なぜ感じられるのか。（4.2 節で扱う。）
(iii) アイロニスト（アイロニー発話者）に対する解釈者の信頼の程度によって、アイロニー発話のアイロニー性の解釈が変化する。この振る舞いは、想定に付与される確信度を考慮に入れた、認知的不調和分析だけが説明しうる。（5 節で扱う。）

2. アイロニー

(1) [To avoid hitting a woman and her cow in the middle of the road, Stone's car runs into a fence.]
Stone: Oh, God. All right, I'm okay. All right. Oh, man, my car, oh! The whole front end is shot! Am I glad you're here! (From the film *Doc Hollywood*)
(2) フェイクネイル　カラーコンタクト　エクステンション　髪にかざって
フェイクファー　身にまとって　どうして本当の愛　捜してるの？
(宇多田ヒカル　*In My Room* "First Love")
(3) [X, with whom A has been on close terms until now, has betrayed a secret of A's to a business rival. A and his audience both know this. A says;]
X is a fine friend. (Grice (1975: 53), with my modifications)
(3') X is a mean friend.

Leggitt and Gibbs (2000)：アイロニーの表現（アイロニー、サーカズム、誇張表現、修辞疑問文など）と感情的反応との関連を検証した実験的研究
この実験結果を別の視点から見ると――
被験者は、話し手の立場で解釈すると、いくつかの表現では肯定的感情（主に、面白味、冗談、おふざけ）と結びつけるのにも関わらず、聞き手の立場として解釈すると全ての表現を否定的感情（怒りや嫌悪感）と結びつける傾向が観察できる。

<u>アイロニーの特性</u>
①情緒的な反応を喚起させる。
②情緒的な態度や反応の中でも、特に、否定的感情を想起させやすい。
③（その一方で、）逆の意味を喚起させる場合がある。

3. 先行研究：問題点の指摘

3.1 単一意味（含意）解釈分析：Grice (1975), Searle (1979), Giora (1997)

<u>アイロニーの伝統的定義に基づく分析とそれが招く問題</u>
伝統的定義：字義的意味とは逆の意味を表す転義用法
招いた問題：認知的意味（含意）の偏重と情緒的側面の軽視

❶アイロニーの意味が字義とは逆の意味であると定義した点
→逆の意味を喚起できないようなアイロニーもある。((4-7))

❷アイロニー理論の目標は、特定の逆の意味を導くことである、と前提させた点
→逆の意味を導くことは、現実のアイロニーでは、唯一の目的ではない

❸情緒的側面の重要性を、（暗黙のうちに）軽視させた点
→アイロニーは他の修辞表現と比べても、情緒的側面が際立った用法である。
(cf. Grice (1978)も含め多くの文献で、感情的側面も示唆はされている。)

(4) [In a downpour]
It seems to be raining.

(5) [A husband kicked a lost cat out of his garden. "Be nice to the cat," said his wife.]
What do you want me to do - invite him in for cocktails?
(Mark Petersen *心にとどく英語* 岩波書店)

(6) [After severely questioning a man, a sheriff threatens the man to hang himself. Seeing the man's writhing in being hung, the sheriff speaks following utterances very slowly and dully.]
Help.., Ben... Help... There's a man who is trying to commit a suicide now in a jail...
You've better hurry... (From the TV program *American Gothic*)

(7) [A news reporter goes to see a sheriff whom the people in Trinity are afraid of and can not go against. The reporter asks the sheriff the reason why he has not coped with problems caused by a notorious group of frauds, despite the townspeople suffer from the problems. The reporter, in a suspicious and even provocative manner, asks whether the sheriff is scared of the frauds. And the sheriff begins to speak.]
Sheriff: Can we talk off the record?
Reporter: Okay.
Sheriff: I'm serious now. You can't tell all I'm about to tell you, alright?
Sheriff: Alien beings have landed in Trinity and are about to take over. But don't you worry. I am on top of it. (From the TV program *American Gothic*)

3.2 話者態度把握分析：Clark and Gerrig (1984), Sperber and Wilson (1981, 1992)

Echoic mention/interpretation analysis（エコー分析）

(8) Three factors in the interpretation of irony (cf. Sperber and Wilson (1986: 240))
a. A recognition of the utterance as echoic.
b. An identification of the source of the opinion echoed.
c. A recognition that the speaker's attitude to the opinion echoed is one of rejection or disapproval.

エコー分析の問題点：アイロニーはエコー的使用の一種であるという主張は強すぎる。

・Non-echoic irony の存在

エコー的要素がない、もしくは、それを認識しなくても、アイロニーとして解釈できる例がある。((1)、(9))

・dissociation と否定的態度との関係が不明

エコーによって解離する（dissociate）ということが、どうして、否定的態度に繋がるのかが、不明瞭である。例えば、否定的態度を表したい相手やその相手が持つ思考から解離することで、話し手自信の身柄の確保という感覚から導ける、安心感のような態度は示さないのはなぜか。（cf. 過去形を用いることによるポライトネスの効果）

・アイロニストは字義とは逆の意味も表している、という直感は分析の射程外である。((3))

(9) [In spite of a violent hurricane, two FBI agents, Dana Scully and Fox Mulder come to Goodland, Florida in order to see Mr. Dailes and to investigate a mysterious case of serial murder which Mr. Dailes has asked them to inspect. However, Scully has doubted from the first that victims were killed by an unknown mysterious creature. They arrives at his house soaked to the skin. After a short exchange between the two agents and Mr. Dailes, Scully asks;]

Scully: What is it that brought you out here in the first place, Mr. Dailes?

Mr. Dailes: I came down for the weather. [Scully smiles bitterly at Mr. Dailes.]

(From the TV program *The X-Files*)

4. 認知的不調和分析：春木(2000)

<u>アイロニーの認知的不調和分析</u>

関連性理論で示される、認知効果"cognitive effect"（文脈効果"contextual effect"とも呼ばれる）に基づいて、認知的不調和という状態を想定し、アイロニーの中心的要因が認知的不調和であることを主張する分析（ただし、認知効果の結果ではなく、動的プロセスの側面を強調する。）

(10) 認知効果（文脈効果）（cf. Sperber and Wilson (1986, 1995: Ch. 2-3)）

a. 矛盾削除：認知環境内に既存の想定と矛盾する新しい想定が導入されたときに、確信度の低い方が削除される認知的過程

b. 強　化　:認知環境内に既存の想定を相補い合うような新しい想定が導入されたときに、既存の想定の確信度が強化される認知的過程

c. 文脈含意：既存の想定と新しく導入された想定とが相互作用し、全く別の想定をす理論的に導き出す認知的過程

(11) 認知的不調和：認知環境構築における特殊な認知状態

a. 矛盾不調和：二つの矛盾し合う想定{C}と{P}が、同一の認知環境内に存在し合う認知状態

b. 強化不調和：二つの相補う想定{C}と{P}が、（強化を行わないまま）同一の認知環境内に存在する認知状態

4.1 認知から情緒へ

4.1.1 否定的態度、評価

認知的不調和がアイロニーの中心的要因であると想定すると、アイロニーの特性である情緒的側面が適切に捉えることが可能である。

(12) 認知的不調和状態は、心理的に不安定な状態を喚起させる（可能性を持つ）。認知的不調和状態とは認知環境内での不確定な認知状態であり、そのような認知状態は直接的に、心理的な不安定を引き起こす。

(13) 認知的不調和状態によって引き起こされた心理的不安定さは、否定的、消極的な感情的（情緒的）反応を喚起させる。（また、解釈の方向を否定的な方向に向ける。）

アイロニー特性①（聞き手（解釈者）に情緒的な反応を喚起させる）
→認知的不調和状態によって引き起こされた心理的不安定さが、感情的反応を誘発する要因となる。
アイロニー特性②（情緒的な反応の中でも、特に、否定的感情を想起させる。）
→認知的不調和状態は心理的に不安定な状態であるので、否定的、消極的な感情に結びつきやすい。

(Cf.) 否定的表現で肯定的解釈を与えるタイプのアイロニーがある。ただし、これらのタイプのアイロニーは、別の要素との複合的特徴が、多くの例で観察されるため、更なる研究が必要であると考えられる。

(14) 越後屋おぬしも悪よのう。（悪代官の発話）

(15) [Will gets a car at his 21st birthday, which is repaired and presented by his closest three friends.]
A friend: How do you like?
Will: This is like... (pause) It's the ugliest fuckin' car I've ever seen in my life.
(From the film *Good Will Hunting*)

・尺度そのもののズレが関連する場合 (14)
・ジョークと関連する場合 (15)

4.1.2 面白味：ユーモアとの関連

アイロニーには面白味という側面とも密接に関連する。

(16) [Mrs. Doubtfire walks up to the house and notices that Stuart's Mercedes is parked outside.]
Mrs. Doubtfire: Loverboy is here. What a beautiful little car for Don Juan.
[Mrs. Doubtfire moves to the front of the car and breaks off the hood ornament.]
Mrs. Doubtfire: So sad when that happens. (From the film *Mrs. Doubtfire*)

・ユーモア研究における不一致理論で主張される側面を、認知的不調和という状態でアイロニーは含んでいる。
・木村(1983)では、笑いの代表的理論である余剰エネルギー説と適応矛盾説と優越感情説とを統合する理論を提案しているが、その理論の中でも、いわゆる、同化できない複数スキーマ間の同化と異化との間での振動現象が、第一段階の笑いの機制であると述べている。

(Cf.) 特殊な例

(17) [２人のナレーターによって、下記の２文が、同時に発話され同時に終わる。]
「夜も更けてまいりました。ご近所の迷惑にならぬよう音量を下げてお楽しみ下さい。
└このアニメーションはステレオ hi-fi で録音しています。大音量でお楽しみ下さい。
（うすた京介　セクシーコマンドー外伝　すごいよ！！マサルさん　TBS ビデオ）

4.2　解釈プロセス：認知的不調和状態の調和化

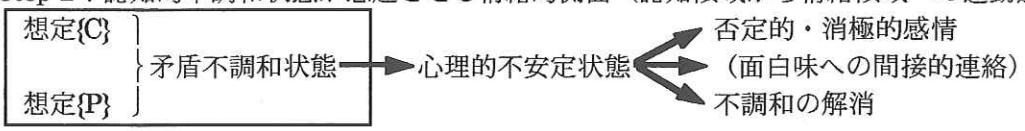
(18) [Will reveals that he has pretended to be hypnotized and tells a psychiatrist.]
Will: You really hypnotized me, you know.　(From the film *Good Will Hunting*)

Step 1：認知的不調和状態の発生（認知領域での過程）

認知環境

想定{C}：THE PSYCHIATRIST DID NOT HYPNOTIZE WILL	矛盾不調和状態
想定{P}：THE PSYCHIATRIST (REALLY) HYPNOTIZED WILL	

Step 2：認知的不調和状態が想起させる情緒的側面（認知領域から情緒領域への連動過程）



Step 3：認知的不調和状態の解消・調和化（認知領域での過程）

想定{C}：THE PSYCHIATRIST DID NOT HYPNOTIZE WILL	不調和状態の解消
~~想定{P}：THE PSYCHIATRIST (REALLY) HYPNOTIZED WILL~~	

アイロニー特性③（聞き手（解釈者）に逆の意味を喚起させる場合がある。）

→認知的不調和状態の発生から、調和化の処理過程において、最終的に削除される想定（たいていの場合はアイロニー発話によって導入される想定）と、対になっている既存想定は、常に認知環境では活性化している。この既存想定の活性状態は、調和化ステップで対想定が削除された後でも続くと考えるのが当然である。アイロニーが逆の意味を喚起させる場合は、この活性化された想定が、解釈の結果として推論されたものであると判断してしまうためと考えられる。

(Cf.) Cutler (1971: 126)によると、"I don't think"がアイロニー信号としてのアイロニー音調と同じ効果を示すと、報告されている。なぜこの句がアイロニー標識として用いられているのかを考えるならば、認知環境に起こった不調和状態の調和化を示すマーカーであると考えられる。

5.　認知的不調和分析の可能性：経験的問題と実験心理学との関連

◆アイロニーの解釈の透明性と、想定に付与される確信度との関係

(19) [話し手は、いつも安夫のことをけちだと言っている。ある時、話し手と安夫との間

で、何らかのお金に関わるやりとりがあったらしい。]
安夫は本当に気前がいい奴だ。

話し手1：とても信頼している親友
→アイロニーとして解釈するのは比較的簡単
→発話想定とそのソースに対して確信度が高く、不調和状態が際立つ為。
話し手2：嫌いというわけではないが、ぜんぜん信頼のできない知り合い
→アイロニーとして解釈するのは比較的難しい
→発話想定とそのソースに対して確信度が低く、不調和状態が際立たない為。

◆Leggitt and Gibbs (2000)の実験的研究との関連
この結果（2節参照）は、認知的不調和分析を間接的に指示するものとなる。つまり、解釈者（聞き手）の立場として、認知環境に抱いた認知的不調和状態が直接的に想起するのは、心理的不安定であり、否定的、消極的感情である、という不調和分析の主張と合う。

6. 結語

本分析の利点
・アイロニーの情緒的側面と認知的側面を包括的に捉えることが可能

理論的意義
・関連性理論内での分析間の淘汰による分析の発展に貢献
・認知効果（文脈効果）を動的な認知過程として、積極的に援用した点

エコー分析との関連
・両分析は相反するものではなく、認知的不調和が、アイロニーの中心的要因であり、エコー特性はアイロニー性を高める要因であると捉える。認知的不調和は、想定と想定との関係を捉えたものであるが、エコーはその想定がどのソースから引き出されているかを扱う。したがって、両分析の主張点は、アイロニーという同じ現象の異なる側面を捉えたものであり、統合することで、アイロニーに関する関連性理論的アプローチを発展させることができると考える。

主要参考文献

Attardo, Salvatore, 1994. Linguistic theories of humor. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
Attardo, Salvatore, 2000. Irony as relevant inappropriateness. Journal of Pragmatics 32: 793-826.
Barbe, Katharina, 1995. Irony in context. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
Carston, Robyn and Seiji Uchida, 1998. Relevance theory: Applications and implications. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
Clark, Herbert H. and Richard J. Gerrig, 1984 On the pretense theory of irony. Journal of Experimental Psychology: General 113, 121-126.
Curcó, Carmen, 1996. The implicit expression of attitudes, mutual manifestness, and verbal humor. UCL Working Papers in Linguistics 8: 89-99.
Cutler, Anne, 1974. On saying what you mean without meaning what you say. Papers from

the Tenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic society. 117-127. Chicago: Chicago Linguistic society.
Dews, Shelly, Joan Kaplan and Ellen Winner, 1995. Why not say it directly?: The social functions of irony. Discourse Processes 19: 347-67.
Dews, Shelly and Ellen Winner, 1995. Muting the meaning: A social function of irony. Metaphor and Symbolic Activity 10: 3-19.
Gibbs, Raymond W. and Jennifer O'Brien, 1991. Psychological aspects of irony understanding. Journal of Pragmatics 16: 523-530.
Giora, Rachel, 1991. On the cognitive aspects of the joke. Journal of Pragmatics 16: 465-485.
Giora, Rachel, 1995. On irony and negation. Discource Processes 19: 239-264.
Giora, Rachel, 1997. Understanding figurative and literal language: The graded salience hypothesis. Cognitive Linguistics 8: 183-206.
Giora, Rachel and Ofer Fein, 1999. Irony: Context and salience. Metaphor and Symbol 14: 241-257.
Grice, H. Paul, 1975. Logic and conversations. In Cole, Peter and Morgan Jerry L., eds., Syntax and Semantics 3: Speech act, New York: Academic Press.
Grice, H. Paul, 1978. Further notes on logic and conversations. In Cole, Peter, ed., Syntax and Semantics 9: Pragmatics, New York: Academic Press.
Grice, H. Paul, 1989. Studies in the way of words. Cambridge, Massachusetts, London: Harvard University Press.
春木茂宏, 2000. 「アイロニーと文脈効果」 JELS (Papers from the Seventeenth National Conference of the English linguistic Society) 17: 37-46.
河上誓作, 1993. 「Overstatement と Understatement：アイロニーをとりまく関連語彙の研究」. 『言語学からの眺望』. 235-246. 九州大学出版.
河上誓作, 1998. 「アイロニーの言語学」. 待兼山論叢 32, 文学篇, 1-16. 大阪大学.
木村洋二, 1983. 『笑いの社会学』. 京都: 世界思想社.
Kreuz, Roger J. and Richard M. Roberts, 1993. On satire and parody: The importance of being ironic. Metaphor and Symbolic Activity 8(2): 97-109.
Latta, Robert L. 1999. The basic humor process: A cognitive-shift theory and the case against incongruity, Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
Leggitt, John S. and Raymond W. Gibbs, Jr., 2000. Emotional reactions to verbal irony. Discourse Processes 29, 1-24.
Littman, David C. and Jacob L. Mey, 1991. The nature of irony: Toward a computational model of irony. Journal of Pragmatics 15: 131-151.
Martin, Robert, 1992. Irony and universe of belief. Lingua 87: 77-90.
佐藤信夫, 1993. 『レトリック感覚』. 東京: 講談社.
Searle, John R., 1979. Expression and meaning; Studies in the theory of speech acts. Cambridge: Cambridge University Press.
Seto, Ken-ichi, 1998. On non-echoic irony. In Robyn Carston and Seiji Uchida, Relevance theory: Applications and implications, 239-255. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
Sperber, Dan and Deirdre Wilson, 1981. Irony and the use-mention distinction. In Peter Cole, ed. Radical Pragmatics, 295-318. New York: Academic Press.
Sperber, Dan and Deirdre Wilson, 1986, 1995. Relevance: communication and cognition, (2nd edition), Oxford: Blackwell.
Wilson, Deirdre and Dan Sperber, 1992. On verbal irony. Lingua 87: 53-76.
Wilson, Deirdre and Dan Sperber, 1993. Linguistic form and relevance. Lingua 90: 1-25.
Yamaguchi, Haruhiko, 1988. How to pull strings with words: Deceptive violations in the garden-path joke. Journal of Pragmatics 12: 323-337.
吉村あき子, 1999. 『否定極性現象』. 東京: 英宝社.

話題による参与構造の変化：教員会議の談話から

内田 らら
日本女子大学大学院
(E-mail: lala-ucd@ya2.so-net.ne.jp)

0. はじめに

・Tannen (1984), Watts (1991) ⇒ 話題によって参与構造が変化する。

※ いずれも、話す権利が比較的均等な日常会話を対象に分析

⇒ 各参与者の社会的地位が異なり、その順位づけが明確な制度的場面でも、「話題による参与構造の違い」が同様に見られるかどうかが分析されていない。

◎ 本発表では、制度的場面の 1 つである教員会議をとりあげ、その談話に見られる「議事進行に関連する話題」と「決定や具体化から遠ざかる話題」で、参与構造がどのように変化するのかを明らかにする。

1. 定義

話題：参与者同士のやりとりの中で言及対象となっているある特定の事柄

(cf. 村上・熊取谷: 1995, 内田・小笠・金・森下: ms.)

2. 先行研究

2.1. 制度的場面

・制度的場面：組織や制度などの「外形的な」影響を持つ場面 (cf. 好井 1999: 36)

例）医療現場 (cf. Cicourel: 1992), 法廷 (cf. Philips: 1992), 会議 (cf. Baker: 1997) など

⇒ ・会話現象[1]の現われ方 (cf. Drew and Heritage: 1992)

・非対称性と権力 (cf. Diamond: 1996, Hutchby and Wooffitt: 1998)

・フレーム（期待の構造）分析 (cf. Tannen and Wallat: 1993)

◎「制度性」が持つ言語的特徴や行為の特徴を記述することに留まり、単一の場面における様々な話題の 1 つ 1 つに見られる参与構造は明らかにされていない。

2.2. 話題と参与構造

・Tannen (1984) → 何が適切な話題かは個人によって異なり、会話が協調的になるか否かは、参与者が持つ会話様式にかかっている。

・Watts (1991) → 各参与者は、会話で共起する話題と対人関係の 2 つの側面を交渉させつつ、自分が思う方向に話題を展開させようと試みている。

⇒ 1 個人のコントロールで参与構造が変化しうる。

◎ 参与者に制限を加える制度的場面では、Tannen (1984) が示した個人の会話様式や Watts (1991) の主張する個人のコントロールだけでは説明しきれない部分がある。

3. データ

・関東地区の某4年制大学で行われた教員会議の録音資料（約90分間）
・参与者：A → 教授兼学科主任、B → 助教授、C → 助教授、D → 助手
・議題：退職する教員 (e) の記念講演とパーティーの件

4. 分析

4.1. 議事進行に関連する話題

ここでは、B, C, D が単独でまたは共同で提示した議題や意見の大部分が、参与者の情報所持量に関係なく、社会的地位が最も高い A に、直接的にあるいは間接的に意見を求める形で発せられている。そして、それらに答えて述べた A の意見が 1 つの話題を終結に導き、その場で提示された話題の結論と扱われている。

4.1.1. 1 人の参与者による議題提示

[例 1]（e が記念講演を遠慮していることへの対処法について）[2]

01 C：××、××研究会//を、自分が、その、訳の分からない話をすることによって
02 B：　　//あっ、けがすね。@@
03 C：(0.8) あの、これまでの伝統をけがすことになっちゃいけないだとかね、そういうことをおっしゃってたんで、それは (0.8) あの、謙遜でしょ？謙遜っていうか、要するに遠慮でしょ？
04 A：うーーん。
05 C：だから、だとすれば「やって下さい」というふうにお願いするのがね//なんかいいの
06 A：　　//うーん。
→ 07 C：かなあと思ったり//もするし、だから。
08 A：　　//うん。　　うん。
09　(1.4)
→ 10 A：うん、だから、本気でそういう風に思ってらっしゃるんだったら、まあ、説得しなく、っていうか、//そこの部分はね。
11 C：　　//うん。　　そうそうそう。それでなんか g 先生のことね。

【例 1 での参与構造】

C (01, 03, 05, 07) → e が話した内容とそれに関する自分の意見
　※ C (07) →「だから」で発話中断 ⇒ 他の参与者に間接的な形で意見を求める。
A (10) → e が謙遜して記念講演を遠慮しているなら、その部分は説得するべきだという意見を提示 ⇒ 当該の話題の結論
C (11) 以降 → 別の角度の話題（＝ 過去に退職した g のこと）への移行

4.1.2. 複数の参与者による議題提示

[例 2]（e に記念講演をお願いする方法について）

01 B：それ、どうしてだろう？ それ、あの、主な理由は体調？(1.0)
02 D：主な理由はそう。
03 B：体調のことはあんまりおっしゃんなかったんですか？汚//すって、汚すっていう。
04 C：　　//私は全然体調は聞いてないの。
05 D：体調の話は最初におっしゃったんですけれど、でもそれよりもって、//おっしゃって
06 B：　　//それよりも。あ、じゃー、一旦は引き受けたけども、いろいろ考えてみるとってこと//でしょう
07 D：　　//はい。
08 B：かねえ。

09 D：(0.6) でもー、心配なさって、皆さんに心配かけるからかもしれませんね。体調って言っちゃうと (@)
10 C, B：(＝同時に＝) あーー。
11 D：皆さんが心配なさるからかなーて私は聞いてたん//ですけれども。
12 C：　　//あーーー、あ、じゃ遠慮ではなくって、やっぱり体調かもしれない。
13 D：そう、そう。
14 C：ふーーん。
→ 15 A：その点は一応あれですね、みんな、ま、とりあえず、その主任っていう形でね//最終的にー？もうー、近づいてるから。
16 C：//うん、うん、　　うん、そうですね。うん。(2.2)
17 A：ね、//あのー
18 C：　　//うーん。
19 A：まあ、お話を聞いて
20 C：うん。(1.2)
21 A：納得してもらう形できめるしかないですよね。
22 C：うん、そうですね。でも、今のところ 3 人、3 人だよね、発表するのは。

【例 2 での参与構造】

01-14 → B, C, D がお互いに情報や意見を出し合って、「e は、主に体調を理由に記念講演を遠慮しているが、それが表面化すると他の教授たちに心配をかけてしまいうるので、研究会の名を汚さないようにすることを理由にあげているのではないか」という内容を共同で作り上げている。

A (15, 17, 19, 21) → 研究会での記念講演を遠慮している e にそれでも講演をお願いするか否かは、とにかく「主任」(15) である A を中心に e に話を聞き、最終的には納得してもらう形で決めるしかないという意見を提示 ⇒ 当該の話題の結論

※ A (15)「主任」→ 自らが事柄の最終決定権を持つ立場にあることを顕示

C (22) 以降 → 別の角度の話題（＝ 研究会で発表する人数と時間配分）への移行

4.2. 決定や具体化から遠ざかる話題

ここでは、各参与者が、社会的地位に囚われず、その話題についてより知識や情報を持っている人を中心に話題が展開され、他の参与者もその話題の展開に協力をしているという構造が見られる。

4.2.1. 参与者 D を中心とした話題展開

[例 3]（e が記念講演を辞退する理由について）

01 B：でもなん、それ今回のきっかけは何か D さんの方から確認したの？
02 D：いいえ突然
03 B：e 先生の方から ＝
04 D：＝ D さんと言われて ＝
05 B：＝ あ申し出があった
06 D：はい
07 B：だけど D さんにくるのも
08　(0.5)
→ 09 D：あそれはねその//あれなんです、明日合同会議があるということを
10 B：　　//おかしいですね　　ええ

11 D：あの読まれて
12 B：ええ
13 D：D さんって言って、先に言っとくけれどということで
14 B：あ
15 D：明日先生方の前でもう一度おっしゃる
16 B：ああじゃ//先生の方からお話が
17 C：　　//ああじゃその時に＝
→18 A：＝その前って合同会議で？
19 D：いや

【例 3 での参与構造】

B (01, 03, 05, 07) → e の記念講演辞退の話を D が知っていた理由を質問
D (02, 04, 06, 09, 11, 13, 15) → B の質問への答え
※ D ＝ 実際に e と話をした人
C (17) → D (15) や B (16) への理解
⇒ D を中心とした「e が記念講演を辞退する話を D が知っていた理由」という話題の結論の明確化
A (18) → 当該の話題について情報を求める言い方
⇒ 例 3 での話題を終結させるものではない。
※ A (18) には D (19) の答えが続いている。

4.2.2. 参与者 B を中心とした話題展開と話題展開協力者としての参与者 A

[例 4]（過去に退職された教員による退職時の講義について）

01 B：日本文学はあの f 先生が固辞したんでしょ。(1.0)
02 C：ああ//そうでしたね。
03 A：　//で結局、先生、出席しなかったんですかね。
→04 B：しなかったんです。それでちょうど同じ時期に g さんがやめたんだけ//ど、
05 C：　　//ん
06 B：g さんはああいう形でね (1.0) 記念講演、という//よりも何かちょっとね、違う
07 C：　　ん　　//あっ、うーん。　　ん
08 B：(1.0) 形でやったんですね。あれも×××××研究会なんですか？
→09 C：んそうです//×、×、××××研究会でおやりになりましたよね。
10 B：　　//あそうですか、じゃあそこでやったんですね。
11 A：うーん。
12 C：f 先生初めてなんですか？それまでは日本文学でも全部あのやってました？
→13 A：やってましたね。
14 C：じゃ f 先生が特別//に
15 B：　　//うん、初めて、のような//
→16 A：　　//ま、ま、//あの、僕が来てから、
17 B：　　//ええ。//ああ。
18 C：　　//はあはあはあ。
→19 A：少なくともね。それ以前のことは知らないん//ですけど。
20 B：　　//ああ
21 C：うーん、ん彼は何で何か何か//理由おっしゃってましたか？
22 B：　　//いや、もう、言わないですね。
23 C：ああとに//かく、やんない。
24 B：　　//とにかく私はそういうことは遠慮させていただきます、それだけです。

【例 4 での参与構造】

B (01) → 過去に記念講演を固辞した教員についての話題提示

C (02) → B が提示した情報を共有していることを示す。

A (03) → 当該の話題に関する情報要求

B (04, 06, 08) → A の発言に答え、g の状況を説明している。

※ B ＝ 当該の話題に関し情報を有する参与者

B (08) → 記念講演を行う場についての確認

C (09) → B の確認への答え

※ C ＝ 当該の話題について B と情報を共有する参与者

C (12) → 記念講演の慣例に関する質問

A (13) → C の質問への答え

※ A ＝ B や C よりも長く大学にいるために、より多く情報を持つ話し手として、他の参与者たちに情報を提供する話題展開協力者

cf. A (16, 19) → あくまで自分が情報として持っていることだけを他の参与者たちに伝える趣旨の発言

21-24 → C (21, 23) の質問と B (22, 24) の答え

⇒ 当該の話題により詳しいと思われる B を中心とした話題展開

5. 考察

話題による参与構造の違いは何に起因するのか？

→ 参与者間の関係だけか？　参与者の情報量だけか？

⇒ 話題と参与者間の役割意識との関連性はどうか？

5.1. 議事進行に関連する話題

・各参与者が「A が事柄の最終決定権を持つ主任であり、他の参与者はそこから意見を求める形をとる」という「役割」を認識し、それに従っている。

⇒ 役割に規定されるところが大きい。

→ もとからの参与者間の関係が、話題構築により大きく影響

5.2. 決定や具体化から遠ざかる話題

・情報交換が主要な目的であり、参与者間の役割に囚われる必要がない。

・ある話題に関してより知識や情報を有する人を中心に話題が展開し、他の参与者もそれに協力をして、それまで持っていなかった情報を手に入れている。

⇒ 役割に規定されるところが小さい。

→ ある話題に対して参与者が持つ情報量が、話題展開により大きく影響

6. おわりに

本発表では、「議事進行に関連する話題」と「決定や具体化から遠ざかる話題」では参与構造が異なり、それは、参与者間の関係や参与者が持つ情報の量に加え、話題による参与者間の役割意識の違いにも起因していることを明らかにした。

以上の点は、日常会話のみならず、教員会議のような制度的場面でも、会話が行われる前の参与構造が常に維持されているわけではなく、話題によってその構造が変動

しうることを示した点で有意義な研究であると言える。

注

1. 会話現象の例としては、語彙の選択や話順などが挙げられる。(cf. Drew and Heritage: 1992)
2. 本発表の会話例で用いた記号は、以下の通りである。但し、分析の目的に鑑み音の延ばしや呼気音など細かい点は記していない。(cf. 森下 1999: 14)

//：参与者の言葉の重なりが始まる個所を示す。重なりのある部分の後の発話は、わかりやすいように同じ位置より始めている。

例 A: 誰もいなくなることは//あまりないと思う
B: //考えにくいわけだから

＝：発話同士が途切れなく言葉がつながっていることを示す。

例 A: CDE を交替で＝
B: ＝交替で

(数字)：その数字の秒数だけ沈黙があることを示す。但し、0.5 秒未満の場合は "、" で示す。

？：語尾の音が上がっている事を示す。　××：固有名詞を示す。

→：分析の内容を説明するにあたって注目すべき部分を示す。　@：笑いを示す。

参考文献

Baker, Carolyn D. 1997. "Ticketing rules: Categorization and moral ordering in a school staff meeting." In Hester, Stephen and Peter Eglin (eds.) *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*. Washington D.C.: University Press of America. pp. 77-98.

Cicourel, Aaron V. 1992. "The interpenetration of communicative contexts: Examples from medical encounters." In Duranti, Alessandro and Charles Goodwin (eds.) *Rethinking Context*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 291-310.

Diamond, Julie. 1996. *Status and Power in Verbal Interaction*. Amsterdam: John Benjamins.

Drew, Paul and John Heritage. 1992. "Analyzing talk at work: An introduction." In Drew, Paul and John Heritage (eds.) *Talk at Work*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 3-65.

Hutchby, Ian and Robin Wooffitt. 1998. *Conversation Analysis*. Cambridge: Polity Press.

森下 雅子. 1999. 「制度的な相互行為 ～ 日本語ボランティアグループのミーティング」お茶の水女子大学大学院 修士論文.

村上 恵・熊取谷 哲夫. 1995. 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』第 62 号.

Philips, Susan U. 1992. "The routinization of repair in courtroom discourse." In Duranti, Alessandro and Charles Goodwin (eds.) *Rethinking Context*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 311-322.

Tannen, Deborah. 1984. *Conversational Style: Analyzing Talk among Friends*. Norwood, NJ: Ablex.

------ and Cynthia Wallat. 1993. "Interactive frames and knowledge schemas in interaction: Examples from a medical examination/interview." In Tannen, Deborah (ed.) *Framing in Discourse*. New York: Oxford University Press. pp. 57-76.

内田 らら, 小笠 恵美子, 金 志宣・森下 雅子. ms. 「会議におけるパワー行使と創発的ネットワーク」

Watts, Richard J. 1991. *Power in Family Discourse*. Berlin: Mouton de Gruyter.

好井 裕明. 1999. 「制度的状況の会話分析」好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰（編）『会話分析への招待』京都：世界思想社. pp. 36-70.

Multiple Perspectives on Everyday Discourse: A frame analysis of Japanese particle *de*

Reiko Hayashi
Konan Women's University

1. Introduction

Contextualization theory deals with one of the indexical facets of language in use; the speaker's affect that is signaled by the linguistic and nonlinguistic cues. According to this theory, sharing the speaker's affect through the cues largely depends on how the speaker and the listener establish the common frame of reference. Though this Western theory of communication is universal and accounts for the fundamental aspect of communication, Japanese speakers tend not to express this process message as explicitly as Westerners do. Among Japanese, contextualization cues are often used to exploit more than one process message for one communicative purpose, which makes inferencing process complex.

This exploitation, however, can become a condition that frames Japanese social interaction in a meaningful way, and listeners deal with this polysemous nature of language use and account for the speaker's affect in their experience.

As any communicative action exploits dual meanings, so does Japanese; hierarchy and interdependence. The former maintains vertical social relations and the latter the horizontal. Both are always two-sided and on a continuum, as well as mutually reinforcing: when one is expressed explicitly as a strong process message the other functions implicitly as a weak process message in support (Hayashi, 1997; Hayashi and Hayashi, in press). Another but yet inherent Japanese social ethic is defensive concession, which is also two-sided and functions either as a strong process message or a weak process message (Hayashi, forthcoming). These social conventions are intricately intertwined, and complementary to each other. For example, interdependence might convey a strong process message while hierarchy frames it as a weak process message. Concession expressed as a strong process message might be framed by the defense as a weak process message, and hierarchy is disguised by the weak process message of defense, and so on.

This study looks at this facet of indexicality of Japanese language in use. Presenting two ordinary Japanese speakers' discourse, the study shows that what the listeners perceive from the linguistic expression, "-de ii desu (Something will do or suffice)" at the situations where they are involved are not relevant to the process messages framed by the speakers. It is claimed that the gap develops because the speakers use the polysemy of social markings Japanese language and social event conventionally bear. The study also claims that the listeners' reasoning to account for the opacity of affect is their personal practice, who frame the speakers' affect within their own linguistic and social experiences in interaction.

2. Everyday Discourse: People's Accounts for the Use of the "-de ii desu"

The data involve two different genres of discourse, one from an ordinary housewife writing in a readers' column for a newspaper, and the other, a novelist writing in a literary magazine. Both independently make similar accounts for the "-de ii desu" expression, while they conveniently represent two widely different socioeconomic backgrounds.

------- see Appendix 1 and 2 for data ----------

3. Linguistic Background of the Particle *de* and the Form of "-de ii desu"

The particle *de* is equivalent to English prepositions such as "by," "on," "in," and "with," and it is attached to the nouns to indicate a method, a tool, a location, or a material of substance.

The particle *de* also constructs the form of "-de ii," which is a contracted style of "-de mo ii."

Kojien --- the propositional particle *de mo* in "-de mo ii" is used to attach a broad or vague idea to the referent to avoid a precise definition or decision.

Makino and Tsutsui (1986: 471-472) --- *te mo/de mo* used in the form of "-te mo/de mo ii" means "even if." As an adjective, "ii" is the colloquial form of "yoi" and means "good," "suitable," and "right." Therefore the phrase "-te mo/de mo ii" expresses permission or concession.

4. Theoretical Framework for Discussion

Goffman (1959) --- message given and message given off

According to Goffman, people consciously or unconsciously express themselves at two different levels of sign activity, enabling others to narrow their perceptions of the behavior and interpret the information conveyed.

Bateson (1972) --- metamessage

The notion of "given off" is close to what Bateson (1972) calls metamessage, which is the information a speaker conveys about the relations between or among the interactants involved and about the perspective such as attitude and belief toward the message and the other interactants.

Contextualization theory (Gumperz, 1982,1992, 1996) --- inference

It deals with one of the indexical facets of language in use; the speaker's affect that is conveyed by the contextualization cues. While contextualization cues help people apprehend the particular nuances related to the interpersonal relations, they also help "frame" (Goffman, 1974) an "interactional floor" (Hayashi, 1996) with regard to how to interpret the activity of the content message and how the speaker aligns the social relations of the interactants in the floor. The theory suggests that common ground, involvement, and cooperation established through stylistic achievements help to understand the speaker's intended message.

5. SOCIAL MARKERS AND MULTIPLE PERSPECTIVES

The researchers who study linguistic strategies and attitudes may identify the speakers' use of the particle *de* as more likely conveying social markers such as politeness. However, the data show that the particle evidently indexes the different social meanings.

To account for the social significance they perceived, I reexamine the "-de ii" expression in an interactional exchange, and discuss what social marking this particle inherently postulates in interaction.

5.1. Sociopragmatic Account: Politeness, deference, and implicitness

The speakers' social attitudes about using this particle as well as other particles

such as *ne* and *yo* are often discussed in the disciplines of pragmatics and sociolinguistics, because many Japanese particles inherently index social markers that are assumed related to the social norm of politeness. For example,

The theory of politeness (Brown & Levinson, 1987): a strategy of performing off-record politeness.

Politeness Principle (PP) (Leech,1983): a strategy of minimizing the expression of beliefs that imply cost to other.

Anthropological perspective (Lebra, 1976): orientation of self in relation to others

5.2. Pragmatic Account: Frame of the particle in interactional structure

When we examine the use of the particle in interactional structure, it encodes a different reading from those mentioned above. To show what kinds of reading the particle unfolds, I incorporate the notion of frame and analyze the semantic relations (Fillmore, 1982) the particle develop when it is used in the interactional exchange as shown below.

A: nomimono wa nani ga ii desu ka (With regard to the drinks, what is good to you?)
B (1): koohii ga ii desu (Coffee is good.)
B (2): koohii de ii desu (Coffee will do.)

Framing semantic relations in interactional structure
(1) semantic relations between the statement, "coffee is good" and the speaker B
(2) sematic relations among the coffee, the speaker B and the recipient A

The frame semantic theory, which has been developed in linguistics, can be incorporated to the notion of Goffman (1974) and Tannen's (1990) frame. The particles *ga* and *de* also frame the social relation between the subject (i.e., the speaker who says "B ga/de ii") and the predicate (i.e., the state of "B ga/de ii"), as they frame the relation between the object and the predicate.

Framing social relations in interaction
(1) social relations between the statement, "coffee is good" and the speaker B
(2) social relations among the coffee, the speaker B and the recipient A

5.3. Social and Cultural Indexing in Interactional Floor

Understanding what perspectives the addressee conceives from the particles requires the social aspect of language use in interaction, because understanding what is given off in interaction largely depends on what kind of social expectation the addressees have for interpretation. One way to understand it is to observe the interactants' participation; what kind of floor they develop in interaction.

Floor --- a cognitive space shared by the interactants, where they construct their participation structure, develop the interpersonal relations among them based on the structure, and unfold their mind activity with regard to what is going on in the structure (Hayashi, 1991, 1996).

Social expectation in participating in a particularized floor --- e.g., relations between a speaker requesting a service and the listener providing a service

6. CONCLUSION

In this study I showed how people display and interpret social attitude through language in everyday discourse, and demonstrated, by presenting the natural data, that the social markers Japanese language is often said bear do not necessarily index the positive attitudes such as politeness to the addressees. Conceptualization of what it is that is given off depends on how the addressees frame their interaction in the event. Events carry significant social information in Japanese communication and the choice of language has to conform to it. Yet in the language like Japanese the social significance is marked in any utterances, and such significance does not often conform to what events mark and what expectations the addressees have, and this fact occasions interactants to implicate dual messages in interaction.

*Acknowledgement
This is a revised version of my forthcoming paper.

SELECTED REFERENCES

Bateson, G. (1972). Steps to an ecology of mind. New York: Ballantine books.
Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) Politeness: Some universals in Language usage. Cambridge: Cambridge University Press.
Fillmore, C. J. (1982) Frame semantics, In The Linguistic Society of Korea (Ed.), Linguistics in the Morning Calm. (pp. 111-137). Seoul: Hanshin Publishing Co.
Goffman, E. (1959). The presentation on self in everyday life. New York: Doubleday.
Goffman, E. (1974). Frame analysis. New York: Harper & Row.
Gumperz, J. J. (1982). Discourse strategies. Cambridge: Cambridge University Press.
Gumperz, J. J. (1992). Contextualization and understanding, In A. Duranti & C. Goodwin (Eds.), Rethinking context (pp. 229-252). Cambridge, Cambridge University Press.
Gumperz, J. J. (1996). The linguistic and cultural relativity of conversational inference. in J. J. Gumperz and S. C. Levinson (Eds.), Rethinking linguistic relativity (pp. 374-406). Cambridge: Cambridge University Press.
Hayashi, R. (1990). Rhythmicity, sequence and synchrony of English and Japanese conversation. *Language Sciences*, 12, 2, 155-195.
Hayashi, R. (1991). Floor structure of English and Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 16, 1-30.
Hayashi, R. (1996). Cognition, empathy and interaction: A floor management of English and Japanese conversation. Norwood, NJ: Ablex.
Hayashi, R. (1997). Hierarchical interdependence expressed through conversational styles in Japanese women's magazines. *Discourse and Society*, 8, 3: 359-389.
Hayashi, R. (forthcoming). Vagueness is not always polite: Defensive concession in Japanese everyday discourse. In R. Donahue (Ed.), Japanese enactments of culture and consciousness. Westport, CT: Greenwood.
Hayashi, R, & Hayashi, T. (in press). Duality and continuum in indirect talk: Linguistic style and gender in clinical supervision. In D. C. S. Li (Ed.), Discourses in search of members,In honor of Ron Scollon. Westport, CT: Greenwood.

Hayashi, T. and Hayashi, R. (1995) A cognitive study of English loanwords in Japanese discourse. *World Englishes*, 4,1, 55-66.
Tannen, D. (1990) You just don't understand. New York: Ballantine.

TEXT DATA

Reader's column, Mainich Shimbun. (1999). September, 7th.
Tawada, Y. (1999). Essay: yuzuru monogoshi monohoshige [Manner of making a concession with a hungry look]. In Chuuou Kouron, 3, 14-16.

Appendix 1

Text 1. yasai sarada de ii yo (Vegetable salad will do.)

スーパーに買い物に行こうとして、夫に「お昼、何がええ？」と聞くと、「ざるそばでえーわ」と、ダレた声で返事が返ってくる。姑にも「お昼、何がよろしい？」と聞くと、「そうやね、果物が乗った野菜サラダでいいわ」と言うではないか。そろいもそろって「ざるそばでいい」「サラダでいい」とはどういうこっちゃ。「ざるそばがよい」「サラダが食べたい」となぜ言えん。

カッカしながらカンカン照りの中、自転車をこぐ。2人が家の中で、クーラーをかけて寝ころんでテレビを見てると思うと、ますます腹が立ってくる。

レジで店員が漂白剤1本でも袋に入れようとするので、「テープ（を張るだけ）でいいです」と言いかけて、「テープにしてください」と言い直して品物を受け取った。

「〇〇でいいです」という言い方。私は大嫌いです。

「〇〇でいいです」

[Translation]

When I was ready to go shopping to a supermarket, I asked my husband, "What do you want to eat for lunch? Literal translation: What is good for your lunch (nani ga ee)?" Then, a response with a slackening voice, "zarusoba is gooood (zarusoba de ee---wa)," comes back. I asked my mother-in-law, "What would you like to eat for lunch? Literal translation: What is good for your lunch (polite form) (nani ga yoroshii)?," "Well, vegetable salad with fruit topping will do (yasai sarada de ii wa)," she says with my surprise. Both together said, "zarusoba de ii," "sarada de ii" and how come they say ("de ii [will do]")? Why can't they say, "zarusoba ga yoi (zarusoba is good.)," "sarada ga tabe tai (I want to eat salad.)?"

Burning with anger under the blazing sun, I pedal the bicycle. Thinking of them lying down and watching TV with the air-conditioner on at home, my anger swells.

At the cashier counter, the salesperson will even put a bottle of bleach in a bag. I was about to say "teepu de ii desu" ("Just a sticker/ a proof-of-purchase sticker will do."), but I stopped and corrected it, and said "teepu ni shite kudasai ("Please attach a sticker"; literally translated: "I decide on/make it a sticker instead of a bag and please attach it"), and received the bottle.

The way of saying such as "XX de ii desu" I hate it.

Text 2. "koohii de ii desu (Coffee will do.)"

ドイツで暮らし始めて十六年以上になるが、この間、二年ぶりで東京に帰ってみて、おやっと思うことがいろいろあった。喫茶店で人を待っていると、隣の人が、ウエイトレスに「コーヒーでいいです」と言って、コーヒーを注文している。「で」の使い方に違和感を覚えた。「余り物で間に合わせます」、「狭い部屋で我慢します」、「この辺で妥協します」、「アーチストへのお礼は、なしでいいです」など、「で」には、諦めと譲歩のにおいがつきまとう。

さっきの「コーヒーでいいです」という言い方に話を戻すと、これは、文字通りにとれば、本当は別のものが飲みたいけれども、そういう気持ちを抑えてコーヒーにします、という意味になる。でも、どういう理由で、自分が一番飲みたいと思うものを注文しないで、譲歩してコーヒーにしたのか、その理由が全く分からないというところが問題なのだ。日本語の使い方を間違えているのではなく、むしろ、諦め、譲歩し、遠慮し、気を使い、自分を犠牲にするような物腰だけが、場違いなところで何の意味もなく一人歩きしているような不気味な印象を与える。

ドイツでは、あらゆるチャンスを利用して自分の個性を確立することが人間の義務だという、これまた妙な考え方があるので、「何々でいい」ではなく、「何々がいい」と言う。それどころか、「コーヒーがいい」人は、普通は紅茶は飲まないし、紅茶の好きな人にはコーヒーを絶対口にしない人も少なくない。譲歩は恥じるべき敗北であり、飲み物を出す側も、自分が客に譲歩を強いたとなれば恥となる。だから、客には必ず何が飲みたいのか尋ねなければならないし、その時、日本でよく耳にする「コーヒーでいいですか？」などと言う尋ね方はひどく失礼に当たる。これは、コーヒーを飲むのが一般的だからあなたもそうしなさい、という意味なのか、もうコーヒーをわかしてしまったからそれを飲んでくれると助かるという意味なのか、とにかく失礼な言い方であることに変わりはない。

[Translation]

Since (I) lived in Germany, more than 16 years have passed, and recently, after 2 years absence, I went back to Tokyo and found that there were many things about which I thought, "why?" When (I) was waiting for someone, a patron beside me ordering a coffee said to the waitress, "Coffee will do." I had a feeling that the use of *de* does not fit in such a case. As in the following expressions, there is always an indication of resignation and concession: "(I) will make the leftover do," "(I) will compromise with the small room," "(I) will come to the settlement at this stage." "With regard to the gratitude to the artist, no payment will do," etc., ---------

Returning to the story, I mentioned about the way of saying that "Coffee will do." If (we) interpret it literally, its meaning is that, though (I) want to drink something else, (I) suppress such emotion and will have coffee. However, the problem with this is that -- for whatever reason -- (the person) makes a concession and decides on coffee without ordering what he/she wants most to drink. The speaker does not make (a grammatical) mistake with regard to the syntax, but rather, such a way of saying

gives a certain impression that the manner of giving up, making a concession, hesitating, caring, and sacrificing the self, walks by itself at the wrong place without having any special meaning. ----------

In Germany, because there is also a belief that it is a human being's duty to make the use of every possible chance to establish one's individuality, (they) may say "(I) like such and such," but not "such and such will do." It is more than that. A person "who prefers coffee" usually does not drink tea, and there are not a few people who like tea and never drink coffee. Concession is a defeat one should be ashamed of, and for a host who serves a drink, it would become a shame if he/she forced the guest to make a concession. So, (the host) always has to ask the guest what he/she wants to drink and when asking "koohii de ii desu ka (Don't you mind drinking coffee?)," as it is often heard in Japan, it is very impolite. Its implication will be that as it is common to drink coffee, you also have to drink it, and that it will be helpful if you drink coffee because (I) have already made it. However, whether you believe it or not, it is an impolite expression.

‘S KNOW WHETHER~’という表現について

森　　貞
（福井工業高等専門学校）

１．はじめに

大江(1984)及び安藤(1985)は、‘S know(s) whether～.’(S=subject) という表現を容認可能性が低いものと見做している[1]。

(1)I know whether he will come.は独立した文としては変な文であろう。

（大江 1984:105）

(2)certain, sure, know, realize などの話し手の確信を表す述語は、that 節をとり、whether 節をとらないことが予測される。

John is certain/sure/knows that/*whether it will rain.

（安藤 1985:220）

しかしながら、CNN transcripts corpus [244MB]（詳細は後述）をコンピュータ検索してみると、実例（１３例）が検出される（ちなみに、‘S know(s) if～.’は１２例）。

本稿では、次の２つの観点から、‘S KNOW WHETHER～’(know(s) whether の語連結を含むすべての肯定文）という表現について考察を行う。

(3)①補文標識whether の（認知的）認可条件

②‘S know(s) whether～.’の語用論的効力

本稿の構成は以下のとおりである。２節では、実例を検索するために使用したコーパスについて述べる。３節では、補文標識whether の認可条件を規定する前段階として、補文標識thatの認可条件を規定する（本発表者は、whether はthatと相補分布の関係にあると考える）。４節では、３節で規定されたthatの認可条件を基に、whether の認可条件を提案し、‘S KNOW WHETHER～’を２種類に下位分類する。５節では、‘S know(s) whether～.’の語用論的効力について考察する。６節は、以上のまとめである。

２．コーパス

本研究では、ＣＮＮが1996年１月から2000年９月（*CNN & Company* は1999年12月まで）にかけて放映した全ディベート番組のトランスクリプト[2] をデータベース化したものをコーパスとして使用した。コーパスのディレクトリ構成は次のとおりである。

図１

the *CNN transcripts* corpus [244MB]
- ├─*Burden of Proof* [bp]
- ├─*CNN & Company* [cc]
- ├─*Crossfire* [cf]
- ├─*Larry King Live* [lk]
- ├─*Talkback Live* [tl]
- └─other
  - ├─*Both Sides with Jesse Jackson* [bs]
  - ├─*Evans, Novak, Hunt & Shields* [en]
  - ├─*Late Edition Prime Time* [le]
  - └─*Reliable Sources* [rs]

3．補文標識thatの認可条件

一般に、補文標識thatに導かれる内容は「叙実的前提」を有すると考えられている。

(4)know, realize, regret などの事実動詞(factive verb)の補文(complement)－目的語としてのthat-claseなどーの内容は話者によってそれが事実であると前提されていることをあらわす。 (毛利1980:61)

(5)whether とthatは、次の点で異なっている。すなわち、話し手がwhether を用いる時には、補文の内容を不確かなものと思っているのに対して、thatを用いる場合は、補文の内容が事実であることを前提としている。 (安藤1985:220)

この考え方が正しいとすると、次の文は矛盾していることになる。

(6)

I don't know that～.

しかしながら、ＣＮＮ transcripts corpus を検索すると、７０８例が検出される。

(7)VAN SUSTEREN:Now, there was some life insurance taken out on Bobby, and *the prosecution has suggested that* it was taken out a month before he died and that you then killed him.

BUENOANO:I don't know that it was taken out a month before. I didn't know that there was even any insurance until after his death. (bp. Mar. 23, 1998)

(8)NATIVIDAD:Listen, this is where perception, as you say, is indeed the reality. And the perception is that indeed tax cuts have happened. They're not going to go... People aren't going to go into the details. And it's a measure in which both sides will gain an advantage.

TILLOTSON:Well, we'll try, Irene.

CHAREN:I don't know that people won't go into the details when it affects their income. I think they will. (cc. Jul. 2, 1997)

(9)MATALIN:She calls herself a courageous conservative...

FABRIZIO:That is exactly what she is.

MATALIN:...a civil conservative. Now, she's saying, I'm a competent conservative.

FABRIZIO:Well, I don't know that she says she's a competent conservative. I think that's what the stories have written. (cf. Aug. 12, 1999)

(10)CALLER:Hello, Howard. In the movie, you talked about how you'd never cheat on Allison because she's been loyal to you and she's put up with everything that goes along with your job. Even though sometimes she doesn't like it, she's made a lot of sacrifices for you. I would like to know what sacrifices you have made for Allison?

STERN:Oh, I don't know. I--you know--you know--that's a...

KING:Fair question.

STERN:Yeah, I don't know that I have made any sacrifices for Allison.

(lk. Mar. 18, 1997)

(11)BATTISTA:I know you are loathe to be called gurus, and the only reason we say that is because it is a fact that you have millions of followers who almost have a sort of religious-like devotion to all of you. And I guess the question is, why do so many people need people like you? What are they looking for? Wayne?

DYER:Well, I don't know that they need us, but I think everyone out there realizes that there is a deeper and a richer experience of life that is available to all of us. (tl. Nov. 6, 1998)

(12)HUNT:Mr.Kemp. the last time you were on Bob's show, you suggested that you wouldn't be surprised if the president, if President Clinton did not finish out his term. This was six or seven months ago.

KEMP:I don't know that I said that. (en. Oct. 24, 1998)

これらの例から、次のことが言える。

(13)I don't know that p.のp(敵)には発話時の話者以外の人物が「真」であると認定した（と発話時の話者が認識している）内容が入る。

次の文の場合は、that節の内容は発話時の話者によって「真」であると認定されている。

(14) a. He doesn't know that～.

b. I didn't know that～.

以上により、補文標識thatの認可条件は次のように規定される。

(15)補文標識thatは、発話の関与者(Sp,~Sp)のうちの少なくとも一人が、それに導かれる補文の内容[P]の「真・偽」を決定している（[P]を「真」であると認定している）と話者が認識し、その認識が卓立している場合、その場合に限り、生成される。

（注ａ）Ｓｐ＝発話時の話者，～Ｓｐ＝聴者、文主語者、発話時以前の話者、聴者・文主語者以外の発話時以前の話者との接触者の総称

（注ｂ）この場合の「卓立」とは、客観的に二つの認知対象がある場合でも、主観内的にはどちらか一方の認知対象が意識化されることによって、もう一方の認知対象が意識化されない心的状態のことを言う。

（森 1994:3）

この規定により、I don't know that～.という表現は、「自分以外の人物が『真』であると認定した内容を知らない」という意味を表わすことになり、語用論的にはthat節の内容（「真」であるということ）を婉曲的に否定する目的で使われることになる[3]。

したがって、次の例（先行部分に補文内容を「真」とする記述はないが、補文標識thatが使用されている）は、語用論的強化により、I don't know that という語の連続が〈婉曲的な否定〉という一つの意味単位（語用論的効力）を獲得した表れと見ることができる。

(16)VAN SUSTEREN:Can you solve this problem for us?

ALEXANDER:Well, you know, I don't know that I can solve the problem, but I definitely think that there are concrete steps that can be taken to address. (bp.Jan. 28, 2000)

(17)KING:Did you know he was troubled?

TRIPP:I don't know that I knew he was troubled. (lk. Feb. 15, 1999)

4．'S KNOW WHETHER～'の下位分類

補文標識whether が補文標識thatと相補分布の関係にあると考えると、補文標識whetherの認可条件は次のように規定される。

(18)補文標識 whether[if]は、発話の関与者（Ｓp, ～Ｓp）のうちの少なくとも一人がそれに導かれる補文の内容[P]の「真・偽」を決定していないと話者が認識し、その認識が卓立している場合、その場合に限り、生成される。（森 1994:3）

ところで、'S KNOW WHETHER～'という表現は、次の２つのタイプに分けられる（Type Aの具体例は4.1節、Type Bの具体例は５節において提示する）。

(19) S KNOW WHETHER～

Type A: [S do/does not know whether～ at the speech time]を前提とする表現

ex. S want(s) to know whether～.

...before S know(s) whether～.

Type B: [S do/does not know whether～ at the speech time]を前提としない表現

ex. S know(s) whether～.

S must(～に違いない)/may(～かもしれない) know whether～.

Type Aの場合には、前提の段階において(18)の条件に基づくwhether の使用が確認される。Type Bの場合にも、(18)の条件に基づいてwhether が使用されているはずであると考えるならば、Type Bにおけるwhether の使用は、『～Sが「真・偽」を決定していない』という認識により認可されていると予測することができる。というのも、(19)のType Bに関する記述内容は『Sが「真・偽」を決定していない』という認識を否定するものだからである。

以上のことから、Type Bは次のように規定し直される。

(20) Type B: [S do/does not know whether～ at the speech time]は前提としないが、[~S do/does not know whether～]を前提とする表現

4.1 Type A

Type Aに属する表現の具体例を以下に列挙する。

(21)MOHLER:<u>I want to know whether</u> what I believe corresponds with the reality of the true and living God and what he has set forth himself as the gospel. (lk. Mar. 22, 2000)

(22)GARRET:Yes, <u>I'd like to know whether</u> you see the biotech stocks as having a good outlook or are they just another empty bubble like dot.com stocks? (tl. Apr. 17, 2000)

(23)BLITZER:To a positive conclusion. So, are you saying within the next week or two, <u>we should know whether</u> there will be a deal? (le. Jul. 12, 1998)

(24)HUTCHINSON:As a congressional, you know, person, we have people come in and not tell us the facts from time to time. So you can't just point the finger at someone because they were told erroneous facts, but <u>we have to know whether</u> they asked the right questions, <u>whether</u> they had the appropriate checks and balances, those are the key questions and <u>whether</u> the right actions were taken. (bp. Sep. 1, 1999)

(25)SEN. PAUL WELLSTONE (D), MINNESOTA:We are talking about poor women and poor children. <u>We ought to know whether</u> they are better off or <u>whether</u> they are worse off. There are some disturbing evidence that many of these families in fact might be worse off. I think it is a little early, premature, for the White House to be declaring this a success. (cc. Aug. 3, 1999)

(26)SMITH:That's why I have always been afraid that I would be put in a position to cast a vote and render a verdict without all the evidence, without the truth, and to grab for a remedy like censure <u>before we know whether</u> that's even appropriate. (bp. Jan. 12, 1999)

(27)TILLOTSON:Lee Hancock, what are you hearing, if anything, from the Texas Rangers? Is there anything further you can tell us on the point of whether -- how many more such devices were there, <u>if we know whether</u> they, then, were

returned to a warehouse somewhere, or what happened to them?

(cc. Sep. 2, 1999)

(28)MURRAY:I think what the vice president is doing in calling for an investigation of the oil companies so the public knows whether or not there's anything going on in terms of gouging is critical, and Governor Bush has been silent on that issue. (cf. Jun. 26, 2000)

CNN transcripts corpus の検索によって検出されたType Aの統計結果は次のとおりである。

表1

S want(s) to know whether	25	S should know whether	3
S would like to know whether	4	S have/has to know whether	3
S be curious to know whether	1	S ought to know whether	2
S will know whether	1	before S know(s) whether	2
S need to know whether	2	so that S (can/will) know whether	2

5．'S know(s) whether～.'(Type B)の語用論的効力

大江(1984)は、'S know(s) whether～.'(Type B)の容認可能性が低い理由を次のように述べている。

(29)I know whether he will come.のようなwhether を含む肯定文が変に響くということには注釈が必要である。この型の文は文法の規則に反するというよりは会話の規則に反するから変なのである。I know whether he will come.ということがいえるのであれば、話し手はI know he will come.かI know he will not come.かはっきりいえるはずである。そういわずにwhether でとめてしまうのは大方の場合、「話すことに必要とされるだけの情報を盛り込め」という「量の原則」に違反していることになる。

(大江 1984:106)

しかしながら、最初（１節）に触れたように、コーパス検索の結果、Type Bの実例が検出されている。

では、何故、「量の原則」に違反していると思われる表現が実際に使用され得るのであろうか。４節では、'S know(s) whether～.'(Type B)は、話者が[～S do/does not know whether～]という認識を有している場合に限り、認可可能であることを指摘した。このことを考慮すると、'I know whether p.' の場合、大江(1984)が指摘するように、話者は、[S(=I) know that p/~p]の認識を有しているはずであるが、その認識を言語化せずに敢えて上記の表現を使用するのは、[~S(=~I) do /does not know whether p] であることを伝達するためであると考えられる。

これにより、Type Bが以下のような語用論的効力を生み出すことの説明が可能となる。

(30)【責任回避】（文脈によって下位項目が選択される）

S(=~I) know(s) whether～.⇒ ~S(=I) don't know whether～.

・その件に関して、私は知らない。

・私は知らないから、その件に関しての意見は言えない。

・私は知らないから、その件はＳ（＝～Ｉ）に聞きなさい。

・その件はＳだけが知っている。

(31)【立場主張】（文脈によって下位項目が選択される）

S(=I) know whether～.⇒ ~S(=~I) do/does not know whether～.

・その件に関して、～S（＝～I）は知らない。

・～Sは知らないのだから、その件に関して～Sは意見を述べるべきではない。

・～Sは知らないのだから、その件は私に聞きなさい。

・その件は私だけが知っている。

Type Bの具体例を列挙する。

(32)DAVIS:...and the fact of the matter is Bill Clinton, of all people knows whether there can or cannot be something on this dress. This isn't some secret kind of evidence that you're withholding from the president. So, he knows the answer, if it's physically impossible for it to be related to him, he knows that. If it's possible, he knows that. This isn't a game, and, you know, to tell him the results of the test really doesn't add to his knowledge, it's just whether -- educate him, maybe in a way that he, frankly, wouldn't have to tell the truth. (bp. Aug. 11, 1998)

(33)VAN SUSTEREN:And you know what, Sol, that's where you and I always right there part because, I will tell you, the one thing that I remain unconvinced of is, I do not believe it was the president of the United States that has so malign Ken Starr. I think that there was information in the newspaper, God knows whether it came from, whether it was assistants, whether it was aids, but lawyers look at facts, and I do not see the facts where the president, himself said: Go attack Ken Starr. (bp. Jun. 30, 1999)

(34)HART:I think there needs to be some level of engagement. But the real travesty here is that we cannot go about engagement given what this president has been involved in. We now know whether or not Bill Clinton was particularly signing off on the chits. We now know that China was funding Democratic fund-raising activities in the United States. (cc. Jun. 22, 1998)

(35)HERING:I think also, though, people have pretty good input into what the job market is really like. You hear -- you know whether your wife has lost her job, you know whether your brother-in-law has been laid off, and so they have, in addition to the media input, a very good sense of what is going on in the economy. (cc. Dec. 4, 1998)

(36)KIMMELMAN:It may mean the market is going up because they see extra monopoly profits, higher prices for consumers and nobody can take them on. Armstrong ran the satellite industry he knows...

BUCHANAN:I know, it's Hughes technology isn't it.

KIMMELMAN:He knows whether they can compete with cable.

BUCHANAN:We were talking about him about a week ago on something else.

KIMMELMAN:He obviously decided that cable was going to beat satellite and he's going cable and cable stocks are up. That's danger for consumer rates.

(cf. Jun. 24, 1998)

(37)KEACH:I personally do not, because I don't necessarily think he needs psychiatric help. Mike is the one that knows whether he has a problem and needs it. And maybe he does. Now, I heard Mr. Gray say that he thinks that is appropriate, I'm certainly not going to discourage him. In fact, I would encourage

him if he feels he needs it. Do I personally, based on everything I know about Mike Tyson, believe he needs psychiatric help? The answer is no.

(lk. Jul. 9, 1997)

(38) KING: Jeffrey MacDonald, how do you not scream every night since you know whether you did it or not, and you say you didn't. You must be going nuts.

(lk. Oct. 14, 1997)

(39) DENARO: There was no way David Berkowitz acted alone. He has already come out and said there is other people involved. I mean, this has been -- he said that publicly close to 20 years ago.

JOSEPH COFFEY, FORMER NYPD DETECTIVE: David Berkowitz was the only person involved in these crimes. He knew detail. He knew how he shot every victim. He knew the conditions of the street. He knew where he shot the victims. He knew what part of the body he shot them in. He knew whether they were in automobiles or they were walking along the street. He knew every possible detail. (lk. Aug. 16, 1999)

(40) ROCHELLE: Nick, you may know whether there is anything in his past that might affect that.

CHARLES: Well, personally, I don't, but I know that his attorneys today, Carl, and Susan, his attorneys thought it was crucial that sentencing happen today to avoid this 30-day waiting period where prosecution could now pry into his past in full vivid detail and make a case for a maximum sentence.

(tl. Sep. 25, 1997)

(41) SCHRAM: And, you know, for example, there was this absurd situation where Monica Lewinsky's attorneys put out a statement saying that neither they had told the media about what Monica was prepared to testify to, nor had Ken Starr's office, as if they really know. And, of course, the media knows whether or not that statement is true. We didn't tell our readers, our viewers whether or not that is accurate, and we didn't say what we should have said, which is, "This does not preclude the fact that they told associates, and the associates told the media." (tl. Aug. 7, 1998)

(42) SCHAFFLER: ... you know whether you intended to internationally inflict, and we were talking during the break that that's extremely difficult to prove on a basketball court. (tl. Mar.10, 2000)

(43) BARRY SCHECK, CRIMINAL DEFENSE ATTORNEY: There is no question that with respect to this dress, they already know whether there is sperm on it. They have already been in a position where they could have done DNA tests and even for all we know, gotten a sample from the president. They know the results. What is upcoming is something that lawyers call "a perjury trap."

(le. Aug. 11, 1998)

5. おわりに

本稿では、'S KNOW WHETHER～'という表現は２種類(Type A, Type B)に下位分類できること、そして、'S know(s) whether～.'(Type B)は、[~S do/does not know whether～.]を前提として、(30)(31)の語用論的効力を生み出すことを示した。しかし、今回、その語用論的効力の精密な算出過程を示すまでには至らなかった。今後の課題としたい。

（注１）今井・中島(1978)はこの種の表現を容認可能としている。

(i) I know that / whether John loves Martha.

（注２）http://www.cnn.com/TRANSCRIPTS/

（注３）稲田(1989)には次のような記述がある。

叙実文では、補文の内容が真実であると話者は信じている。したがって、ｉのような一人称主語・現在形・否定文は本人が真実だと信じていることを知らないという矛盾した意味を持つことになる。

ｉ．a. I don't know that Mary is honest.

b. *I don't realize that he has gone away.

実際ibや多くの叙実文では矛盾した内容となるが、iaは I am not certain that ～, I don't know whether～という意味の婉曲表現として使われる。 (p.164)

主要参考文献

（和文）

荒木一雄・安井稔(編)(1993)『現代英文法辞典』三省堂.

安藤貞雄(1985)『続・英語教師の文法研究』大修館書店.

稲田俊明(1989)『補文の構造』（新英文法選書３）大修館書店.

今井邦彦・中島平三(1978)『文Ⅱ』（現代の英文法５）研究社.

大江三郎(1984)『英文構造の分析』弓書房.

太田　朗(1980)『否定の意味』大修館書店.

川瀬尚樹(1981)「補文辞の選択について」『大阪工業大学紀要』２６－１.

小西友七(1974)「28. don't know *that* (or *if*) he is honest」渡辺登士(編集代表)『続クエスチョン・ボックスシリーズ２０接続詞・前置詞』大修館書店.

小西友七(1995)「20. I know *whether* John loves Martha. および I don't know *that* John loves Martha.と言えるか」渡辺登士(編集代表)『英語語法大辞典第４集』大修館書店.

ジェニー・トマス(1998) 浅羽亮一(監修)、田中典子/津留崎毅/鶴田富子/成瀬真理(訳)『語用論入門』研究社.

ジェフリー・N・リーチ(1987) 池上嘉彦・河上誓作(訳)『語用論』紀伊國屋書店.

ジョン・R・テイラー(1996) 辻 幸夫(訳)『認知言語学のための１４章』紀伊國屋書店.

中右　実(1983)「文の構造と機能」『意味論』（英語学体系５）大修館書店.

中右　実(1994)『認知言語学の原理』大修館書店.

毛利可信(1980)『英語の語用論』大修館書店.

森　　貞(1990)「カドウカ構文の生成要因について」『福井工業高等専門学校研究紀要（人文・社会科学編）』２４.

森　　貞(1991)「認知言語学的アプローチによる補文標識の分析」『福井工業高等専門学校研究紀要（人文・社会科学編）』２５.

森　　貞(1994)「knowのあとの補文標識について」『英語表現研究』１１（日本英語表現学会）.

森　　貞(1994)「『あるか（どうか）』と『ないか（どうか）』に関する認知言語学的考察」『国語学会平成６年度春季大会要旨集』

（英文）

Mori, S.(2000) "On 'S know(s) whether/if~.' constructions," 『福井工業高等専門学校研究紀要（人文・社会科学編）』３４.

Pope, E.(1977) *Questions and Answers in English*. Mouton.

Quirk, R, et al.(1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

条件文とモダリティ
ー「視点」を中心にー

岡本　芳和 (QYV01011@nifty.ne.jp)
関西外国語大学大学院

0.　はじめに

英語の条件文とは、典型的に If を使って仮定や条件とその結果を表わす文のことをいう（『英語学用語辞典』)。Sweetser (1990)は、この条件文を 3 領域（内容、認識、言語行為）で分析している。本発表では、Sweetser (1990)においても分析の対象となっているのだが、If 節で扱われる条件文をその対象とする。その中でも前件に法助動詞が表われているものを扱う。Sweetser (1990)の分類を本発表に使用した理由は、彼女の分析は従来のものとは異なり、If 節で表わされる条件文の区別が「領域(=domain)」という概念によって明確になされているからである。

まず、Sweetser (1990)の条件文について紹介し、Sweetser には論じられていない条件文とモダリティの関係について仮説を立てた。それをもとに If 節中に見られるモダリティと条件文の関係について考察し、さらに、「視点」と「言語行為」といった語用論的観点と相互作用モデル(澤田 (2000))からこの関係について検討し、前件に法助動詞が表われた時どのような解釈ができるのかを考えてみたい。

1.　Sweetser (1990)の条件文

Sweetser (1990)は、語や文の意味解釈される場を領域(=domain)[1]と呼び、内容（現実世界)、認識、言語行為の 3 つの領域を設定している。条件文もこの 3 つの領域で意味解釈されるものとして以下のように 3 つに分類している。

(1) Content Conditionals

前件の事象もしくは事態が実現することが、後件で述べられている事象もしくは事態の実現することの十分条件である(Sweetser (1990: 114))。

a. If Mary goes, John will go.

b. If you get me some coffee, I'll give you a cookie.

(2) Epistemic Conditionals

条件部であらわされている仮定的な前提が真であることを知ることが、帰結部で表わされている命題が真であると結論するための十分条件である(Sweetser (1990: 117))。

a. If she's divorced, (then) she's been married.

b. If John went to that party, (then) he was trying to infuriate Miriam.

(3) Speech-Act Conditionals

後件で表わされた言語行為の遂行が前件に表わされた事態の達成の条件である（前件の事態は後件の言語行為を可能にする、あるいはそれの原因となる）(Sweetser (1990: 118))。

a. If I may say so, that's a crazy idea.

b. If I haven't already you to do so, please sign the guest book before you go.

Sweetser (1990)

Sweetser はこのように条件文を分類したが、条件文と法助動詞との関係については論じていない。そこで次の 2 つの仮説を立てて考えてみる。

《仮説》

(4) If 節中の認識的法助動詞の制約：If 節中の認識的法助動詞は、先行文の内容を受けたものでなければならない。

(5) If 節で表される条件文の前件に単純未来の will か認識的法助動詞が現れる場合、その条件文は認識条件文か言語行為条件文のいずれかになり、内容条件文にはならない。

2. If 節中の法助動詞

法助動詞が一般的に根源的意味と認識的意味の 2 つに区別される[2]ことはよく言われている。この法助動詞が If 節中に表れることは可能である。さらに、意味解釈においてどのような意味的特徴が生じるのかを考慮しなければならない。そこで、このセクションでは上の 2 つの仮説について論じてみたい。

2.1. If 節中の法助動詞の意味解釈

2.1.1. If 節中の単純未来の will

まず、If 節中の法助動詞 will[3]の意味解釈についてはいろいろと議論されてきた[4]。これについては、主に「後未来(=after-future)」と「未来に対する現在の予測可能性」の 2 つの解釈があるとされる（以下下線発表者）。

(6) 後未来

a. I will come if it <u>will</u> be of any use to you.

b. If it <u>will</u> amuse you, I'll tell you a joke.

Comrie (1982: 150)

(7) 未来に対する現在の予測可能性

If the water <u>will</u> rise above this level, then we must warn everybody in the neighbourhood[5].

Quirk et al. (1985: 1009)

If節中に単純未来のwillが表われた場合、(6)や(7)のようにこの種の条件文は言語行為条件文になる。

2.1.2. If節中の根源的意味の法助動詞

If節中に見られるwillは多く議論されてきたが、その他の法助動詞について論じられている文献[6]はほとんどない。Sweetser (1990)の分類を基に、If節中に表れる根源的意味の法助動詞を(8)から(10)に取り上げる。

(8) I'll be happy if I <u>can</u> save sick animals.
(9) If he <u>can</u> speak English fluently, he must be an American.
(10) Take out the garbage, if I <u>may</u> ask you to.

Dancygier (1999: 89)

これらはSweetserの分類でいうと、(8)は内容条件文、(9)は認識条件文、(10)は言語行為条件文をそれぞれ表わしている。さらに(10)の言語行為は、命令を表している。また例のIf節に見られる法助動詞は(8)は可能、(9)は能力、(10)許可（共に根源的意味）で、このようにIf節中には根源的意味の法助動詞が表われ、それぞれが3領域の中で意味解釈されている。

2.1.3. If節中の認識的法助動詞

2.1.2.で論じたように、If節中には根源的法助動詞が表われることは可能であるが、認識的法助動詞はIf節中には入らないことが主張されてきた(Jenkins (1972)、安藤 (1983)、Palmer (1990[2]))。

(11) a. John may be examined by the doctor tomorrow.
b. If John may be examined by the doctor tomorrow, I'll be eternally grateful. 1) permission *2) possibility
(12) a. John must take drugs.
b. If John must take drugs, I will give him money for them.
1) necessity *2) logical entailment

Jenkins (1972: 96)

しかし、Sweetser (1990)の分類を基に考えてみると、(13)のようにこのIf節中にも認識的法助動詞が入っても意味解釈において文法的に容認度は落ちないように見える。

(13) If Taro <u>may</u> have gone back to his hometown, he may meet some old

friends

「太郎が故郷に戻っていたというなら、彼は旧友と会っているかもしれない。」

これは認識条件文になり、この may は推量（認識的意味）である。このような種類の条件文は相手の発話を引用的に（エコー的に）用いた場合、解釈が可能である[7]。これは、語用論的に考えるとどういうことなのだろうか。

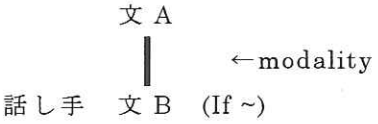
3. 条件文と視点

If 節中に法助動詞を含み 3 領域で解釈される条件文について、「視点」と「依存性」という概念を用いてさらに仮説を検討する。

3.1. 相互作用モデルと視点

ここでは、仮説(4)の If 節の認識的法助動詞の制約について考えてみたい。(13)のような文を分析するにあたって、澤田(2000)で提案された「相互作用モデル」に照らして考えてみる。相互作用モデルとは、ある文とそれに先行する文（前提や共通知識を含む）との相互作用を考慮に入れるものである。

(14) 相互作用モデル



If 節中の根源的意味については、先行文の内容を受ける場合(15)と受けなくてもよい場合(16)の 2 つに分けることができる。

(15) 'but I'll tell him we've met.　Richard ought to put you up, but if he <u>can't</u> for some reason, there're hotels in the town...'

(P, Highsmith. *The Talented Mr. Ripley*)

(16) "If I <u>may</u> put it in a nutshell, Mr. Merton, I should say it was all up."

(C, Doyle. *The Mazarin Stone*)

(15)の can't は可能で、明らかに前文の内容を受けている。一方で、(16)の may は許可であるが、これは先行文の内容を受けていなくても問題ない。しかし、認識的意味が前件に現れる場合、先行文の内容をうけなければならない。

(13') H: Taro may have gone back to his hometown.

S: If Taro <u>may</u> have gone back to his hometown, he <u>may</u> see his old friends.

話し手の発話に見られる前件の may は聞き手の may を受けて話し手が用い、後件の may は話し手が使ったものであると考えられる。このような認識的意味の法助動詞が If 節中に用いられると必ず先行される内容をうけなかればならない（言語行為的に使用されなければならない）。(17)と(18)は言語行為条件文の例である。

(17) If Nancy must know the actual facts of the murder case, please catch her, and disclose the truth about it.

(18) 'If she mayn't have a dream,' James said, 'What might I tempt her with?'

(British National Corpus)

聞き手の視点

(19) If･･･E-modal(p)･･･, then q.

全体として話し手の視点

(19)のように If 節中の認識的法助動詞のある条件文を図式化することができる。If 節に If, *as you say*, p...,のような引用的な形であれ、聞き手の心的態度を話し手が読み取って使っている場合でも、If 節全体の視点は話し手にある。すなわち、聞き手の視点を取り入れた前件の命題 p に対して話し手はその聞き手の態度に関わりあいをもって話し手の発話を条件化しているのである。

3.2. 前件と後件の依存性

If 節中に見られる 2 種類の助動詞（根源的(Root)･認識的(Epistemic)）と単純未来を表わす will(Future)について、仮説(5)をまとめてみたい。ここでは前件と後件の「依存性(dependency)」について考え、そのつながりを明らかにする。

(20) If R/E/F (p), q.

→依存性が低い → 認識条件文

→依存性が低い → 言語行為条件文

(21) If R(p), q.

→依存性が高い → 内容条件文

(20)では、前件には 3 タイプの法助動詞が表われて、前件と後件の依存性が低い場

合、それが認識か言語行為のどちらかの条件文に解釈される。しかし(21)のように根源的意味の法助動詞が前件に表われて、前件と後件の依存性が高い場合、内容条件文になる。以下の例は単純未来の will の例で、(22)は認識条件文と(23)言語行為条件文である。

(22) If he won't arrive before nine, there's no point in ordering for him.

Dancygier (1998: 118)

(23) a. If you will be alone at Christmas, let us know about it.

b. If you can predict now that you will be alone at Christmas, let us know about it now (or at least before Christmas).

Leech (1987[2]: 65)

(22)で、Dancygier (1998: 119)は、この前件に見られる will は聞き手の視点から述べられたものであり、先行される文脈に束縛されたもの(Contextual givenness (Dancygier 1998:111)) と述べている。また、Leech (1987[2]: 65)は、(23)の例[8]は(22)と違って、先行される文脈に束縛されない例である。詳しく見てみると、「クリスマスに一人になりそうでしたら、今のうち（あるいは少なくともクリスマス前に）連絡ください」という発話時での話し手の予測を話し手が If 節を使って条件化している。これは先行される文脈の束縛を受けていなくても、この will は先行される聞き手の発話内容を受けている。上のモデルで言うと、先行される聞き手の内容を受けることになる。

まとめると、(15)から(23)に見られる条件文では、前件と後件の依存度が低い（独立している）。しかし、(8)や以下の(24)や(25)のような内容条件文では前件と後件の依存度が高い。

(24) 'I'll be very glad to help if I can,' Tom said in a properly excited voice, 'but can't the interrogator come now?' It is necessary for me to leave the house at ten o'clock.'

(P, Highsmith. *The Talented Mr. Ripley*)

(25) 'Are you going back to Rome today?'

MacCarron raised his eyebrows. 'I imagine so, if I can catch a few hour's sleep here. I haven't been to bet in two days.'

(*ibid.*)

このような前件と後件の依存性が高い条件文は、内容条件文にしかならない。従って、If 節中に見られる認識的法助動詞や単純未来の will が表われると、それは依存性の高い内容条件文にはならない。

4. まとめと今後の課題

Sweetser (1990)の条件文の分類を基にIf節の前件に見られる法助動詞について上にあげた仮説をもとに考察してきた。その前件に表われる根源的意味の法助動詞は先行される内容を受けても受けなくてもよい。しかし、そこに認識的法助動詞が表われる場合、相互作用モデルに見られる先行される内容を受けなければならないことになる。つまり、その認識的法助動詞は話し手の視点ではなく、聞き手の視点を話し手が取り入れているということになる。一見、文全体は話し手の視点で発話また報告されているように見えるが、実はこのような条件文に見られる認識的法助動詞は聞き手のモダリティを話し手がとらえているのである。また認識条件文か言語行為条件文で表われる法助動詞は、話し手の視点が発話時にあり発話時に判断しているので、未来に話し手の視点がある内容条件文にはならないこともわかった。

注

[1] Sweetser (1990)では、領域(=domain)は接続詞や条件文が意味解釈の場として単義的に結びつく場として定義されている。一方、助動詞では領域が意味変化の場として多義的に結びつく場として定義されている。

[2] このような助動詞の区別は、安藤 (1983)、 Coates (1983)、Leech (1987[2])、Palmer (1990[2])、澤田 (1993)、Swan (1995[2])などがある。また、安藤 (1983)では根源的意味を非認識的と呼んでいる。

[3] 本発表では、この will は未来時制的にとらえ単純未来の will としておく(Declerck 1991b)。また、この will は予測を表わす認識的意味の法助動詞として考える立場もあるが、未来時制か法助動詞なのかという細かな議論はここでは避けておく。

[4] 主な文献として Close 1980, Comrie 1982, Quirk et al. 1985, Declerck 1991a, Palmer 1990[2], Dancygier 1998, 田中 1998 があげられる。

[5] この文はニュースか天気予報を話し手(報告者)が聞いてその内容を受けてこの話し手はこの文を発話もしくは報告したものと考えられる。なぜならば、ここでの If 節の中に見られる this level とはこの文の話し手が使ったものであると考えられる(this はダイクティックなことばである)。例えばオリジナルの発話が"The water will rise above 3 meters."などであったことが考えられる。このように話し手聞き手の関係を話法的にとらえるともっとわかりやすい。またオリジナルの発話がどのようであったのかを考慮することも重要である(岡本 2000)。後述するように、この条件文の分析は先行する内容を受けた条件文として分析したほうがわかりやすいように見える。

[6] Palmer (1990[2]: 180)では、動的法助動詞(=Dynamic modals)は条件文の前件で自由に起こることがある唯一の助動詞であると述べている。

a. If you <u>can</u> come, I shall be delightful.
b. If you <u>must</u> act the fool, please go away.

Palmer (1990[2]: 180)

a の can は可能を表わし、全体が内容条件文になっている。一方で、b の must は義務を表わし、全体が言語行為条件文になっている。いずれも、根源的意味が用いられている。Palmer はこの 2 つを Dynamic modals としているが、ここでは非認識的意味（根源的意味）として扱う。

[7] しかしながら、Jenkins も Palmer も次のようにパラフレーズできる場合は、この認識的法助動詞が可能であるとしている。

Jenkins (1972: 102)
a. If it may rain today, we'd better buy rubbers.
b. If he might object, I won't ask him.
c. If John must know the answer, why don't you ask him?

→If you are right in saying that S,.... / Given that S,....

Palmer (1990[2]: 182)
If he may come tomorrow...
→If you say he may come tomorrow...

さらにJenkinsはこの種の条件文を"concessive" if-clauseと呼んでいる。一方でPalmerはこのような条件文は「条件」でないと述べている。後者についてここで疑問が生じてくる。それならば、なぜIf節を使って話し手は発話をしたのだろうか。

[8] Close (1980: 104)も同じ例をあげている。これはCloseからの引用である。

参考文献

Akatuka, N. 1985. "Conditionals and Epistemic Scale." *Language* 61: 625-639.

安藤 貞雄. 1983. 『英語教師の文法研究』. 東京: 大修館書店.

Close, R. A. 1980. "*Will* in if-clause." In S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (eds.), *Studies in English Linguistics for Radolph Quirk*, 100-109. London: Longman.

Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.

Comrie, R. 1982. 'Future time reference in the conditional protasis.' *Australian Journal of Linguistics* 2, 143-152.

Dancygier, B. 1999. *Conditionals and Prediction: Time, Knowledge, and Causation in Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.

Declerck, R. 1991a. *Tense in English: Its Structure and Use in English*. London: Routeldge.

_____. 1991b. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha

Jenkins, L. 1972. Mo*dality in English Syntax*. Ph. D. Dissertation, MIT. Reproduced by the Indiana Linguistic Club.

Leech, G. N. 1987[2]. *Meaning and English Verb*. London: Longman.

岡本 芳和. 2000. 「話法の伝達動詞と引用部の関係－語用論的アプローチ－」. 『語用論研究』. 2号.

Palmar, F. R. 1990[2]. *Modality and the English modals*. London: Longman.

Quirk, R. *et al*. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

澤田 治美. 1993.『視点と主観性』. 東京: ひつじ書房.

_____. 2000. 「二つのNEED (上・下)」. 『英語青年』. 146巻, 1~2号, 45-49, 88-91.

Swan, M. 1995[2]. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.

Sweetser, E.E. 1990. *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantics structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

田中 廣明. 1998. 『語法と語用論の接点』. 東京: 開拓社.

メタ言語否定について—話し手の意図と聞き手の解釈—

田中廣明
関西外国語大学
tanaka@khc.kansai-gaidai-u.ac.jp

1. はじめに

本発表では、「メタ言語否定(metalinguisitic negation: 以下 MN)」について考察する。

(1) "...[metalinguistc negation] must be treated not as a truth-functional or semantic operator on proposition, but rather as a device for objecting to a previous utterance on any grounds whatsoever—including the conventional or conversational implicata, its morphology, its style, or its register, or its phonetic realization." (MN とは命題に対しての真理値的・意味論的演算子ではなく、前言の発話に対して反対する（異議を唱える、否認する）ための装置であり、その際否定されるのは（命題ではなく）慣習的・会話的含意、形態素、スタイル、使用域、発音などである。) (Horn 1985: 133, 1989: 363)

(2) a. We don't eat tom[a:touz] here, we eat tom[eiDouz]. （発音）
b. He isn't neurotic OR paranoid; he's both. （一般会話の含意）
c. The king of France isn't bald—there is no king of France. （前提）
d. I didn't manage to trap two monGEESE—I managed to trap two monGOOSES. （形態素）
e. Grandma isn't feeling lousy, Johnny; she is indisposed. （スタイル/使用域）

(2a)は「発音の仕方」、(2b)はどちらか一方が真であれば良いという「一般会話の含意(generalized conversational implicature)」、(2c)はフランスには王様がいるという「存在前提(existential presupposition)」、(2d)は mongoose の複数形の「形態素」、(2e)は気分が悪いという「informal なスタイル」のみを否定してる。これらは、真理条件的(truth-functional)な意味（命題内容）を否定する「記述的否定(descriptive negation: 以下 DN)」((3)) ではなく、命題に付属する使用条件などを否定している。

(3) We didn't see the hippopotami—we saw the rhinoceroses. (=DN) （吉村 2000a）

2. メタ言語否定

2.1. 特徴

(4) Quark: You do not entertain much here, do you?
Major Kira: Oh, I *entertain* a lot. I just don't entertain you. (*Star Trek: Deep Space Nine* 米 TV)
（クワーク：少佐、あなたはあまり人を呼ばないんでしょう？　キラ少佐：そんなことはないわ。たくさん人を呼ぶわよ。あなたを呼ばないだけよ。(=It's not like that. I entertain a lot.(=I don't "not entertain much here.") I just don't entertain you.)

(5) a. MN は「エコー否定」である。エコーの内容は、どの程度自分の信念として否定しているかによって、MN か DN かに区別することができる。ただし、エコーは前言に限られない。一般的な想定や百科辞典的知識に対してのエコーでも良い。
b. 前言の話し手（＝聞き手）の発話意図と、MN の話し手の発話意図が異なる。

c. MN と後ろの修正節は矛盾関係(contradiction)にある。ただし、それは、MN の話し手の意識の中では矛盾ではない。聞き手(=前言の話し手)にとっては矛盾となる。

d. MN と感じられるためには、話し手が前もって量的・質的な上限を持っていなければならない。

2.2. エコー否定

(6) "The correct generalization about the metalinguistic cases that the material in the scope of the negation operator, or some of it at least, is echoically used in the sense of Sperber and Wilson (1986), Wilson and Sperber (1988, 1992)." ... "This, I claim, is the crucial property of so-called metalingusitic negations: the representations (or a part of it) falling in the scope of negation operator is implicitly echoic." (Carston 1996: 320-321)

「MN の唯一、本質的な特徴はエコー否定である」Carston (1996, 1998a, b) とすると、DN でエコー否定との区別が付かない。

(7) A: Mary seems happy these days.
B: She isn't HAPPY; she just put on a brave face. (Carston 1996)

Carston(1996)は、(7B)を「分離的態度(dissociative attitude)(相手の言葉をどの程度自分と遊離させるかという態度)(この場合「嫌悪的、否定的、拒絶的態度」)」が強いため、エコー否定(MN)とするが、エコーして否定した内容を自分の信念としているため(7B)は DN である。

MN のエコー否定

(8) A: Don't deprive us of your lecture on negation.
B: I won't deprive you of my lecture on negation; I'll spare you it. (Carston 1998a)

(8)はエコーした内容が前言の命題を含むかどうか、すなわち自分の信念として否定できる内容であるかどうか。

エコーするものは次の 3 つが候補者となる。**①「命題」のみ、②「命題」以外の「使用条件(含意、音声など)」、③「命題」プラス「使用条件」**(van der Sandt 1991)である。①は Burton-Roberts(1989)の言うことに等しい。**命題部分をエコーし、修正節を聞いて矛盾であると感じ、メタ言語的な解釈へ向かう方策である。**②はメタ言語否定とするのはあくまでも B の話し手であるという立場である。③とすると、否定(演算子)が 2 種類あることになる。「命題」と「使用条件」の両方を引き取っておいて、「命題」のみを否定するエコー否定(DN)と「使用条件」のみを否定するエコー否定(MN)に分けなければならない。**MN のエコー否定では、エコーするものは②の「使用条件」のみであり、それを話し手の信念としてではなく、(一種類の否定演算子で)否定していることになる。**

先行発話(前言)のない MN。

(9) バースデーカードの表書き: This Birthday Card is NOT from one of your admirers.
中身: It's from TWO of your admirers. Happy Birthday from both of us. (Carston 1996)

(10) 「末恐ろしいピッチャーじゃなくて、もう恐ろしいピッチャーだ。」1999 年 4 月 27 日ロッテの黒木投手が西部の新人、松坂大輔を評して。

(9)(10)はエコーがないと反論されるのではなく、「一般的な想定(general assumption)」や「期待(expectation)」「常識(common sense)」「百科辞典的知識(encyclopedic knowledge)」にエコーしている。(9)は、The birthday card is from an admirer.という想定を仮定した上での発話。(10)も「松坂投手は末恐ろしいほどすごい投手だ」と一般には思われているであろうとする黒木投手の想定。

2.3. express / communicate（吉村 2000a, b）と発話意図

「メタ言語否定によって否定されるものは、まさに、このエコーの元になるものによって、expressされているが、communicateされていないものである」（吉村 2000a, b: 23）。

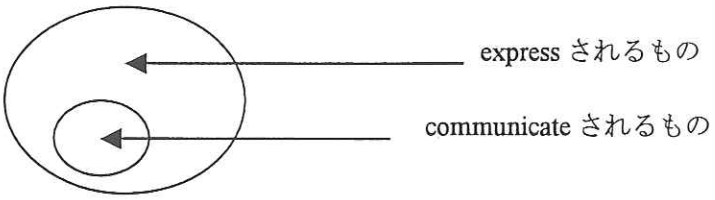
express：「ある言語形式を用いることによって、必然的に伴われるもの」

communicate：「（まわりにある様々な情報から）聴者が取り上げてくれるように話者が意図していることを話者が明らかにした想定」（Sperber and Wilson 1986/1995）（吉村 2000b: 22-23）

(11) A: You resemble Mr. Yoshioka very much, who taught me English in my high school days. You must be his daughter.

B: I'm not his daughter—he's my father. (Aは大学の若手教官、Bは新入生とすると、「…Aは、自分が明示的に伝達しようとした『恩師とBが親子である』というポイントと異なる部分に異議を唱えたBに少し面くらい、Bの自立心のようなものを感じる。…（この参照点構造による概念化は）expressされていると考えなければならないが、それはAが意図的にcommunicateしようとした内容ではない」吉村（2000b: 23））

(12) express/communicate



メタ言語否定する対象は、Aが（communicateした意図はないのであるが）expressするものの中からcommunicateされ得るとBが解釈できるものでなければならない。

(13) A: Is that haggis good?

B: That haggis is not good; it's excellent. (van der Sandt 1991 改)（haggis: ハギス（料理名））

(13A)のgoodからはAは意図（communicate）していないのであるが、言語形式上、goodにはそれ以下ではないという量の含意（quantity implicature: Q-based implicature（Horn 1989, Levinson 2000））をexpressしている。Bはその含意を（メタ言語）否定してexcellentと修正表現を述べている。ところが、次のような例ではうまくいかない。

(14) [先輩の警官の不正を目にしたDavis巡査が、監査室に訴えようとする。ところがBosco巡査は、監査室長が不正を目の敵にするあまり、殴られて病院行きになったことを告げ、やめておけと言っている場面]

Davis: Are you frightening me?

Bosco: No, Davis. I'm educating you.　(*Third Watch* 米TV)

Davidがexpressするfrightenには、educateの意味はない。Boscoはfrightenのような脅しのきつい言葉ではなくて、婉曲的な弱いeducateという言葉を使ってDavisのためになるようにしてやっているのだと言っている。Davidの持たないBoscoの尺度の基準は、〈脅迫的, 婉曲的〉あるいは〈強い言葉, 弱い言葉〉である。

吉村(2000a, b)のexpress/communicateはメタ言語否定のみならず、誤解(misunderstanding)、曲解(distortion)も当てはまる。

(15) (A) "I'm not very happy about what you're doing." (B) "*In other words*, you don't trust me?"

(A) "I wouldn't quite say that."　（田中 1998b: 238）

express/communicate は、MN のかなりの部分を説明できるように思えるが、本質的な特質とはなっていない。**MN の特質は、前言の話し手(＝聞き手)の発話意図と、MN の話し手の発話意図が異なるために起こる現象**であり、話し手は相手の express しているが communicate していない部分から触発されているにせよ、話し手は話し手独自の「尺度」、あるいは「基準」と呼べるものを持っている。そのためには「上限」の設定や「矛盾」の解釈など、様々な制約が必要である。

2.4. 矛盾(contradiction)の解釈

MN はすべて「意味論的（真理条件的）な矛盾(semantic(truth-functional) contradiction)」を表す(Burton-Roberts 1989)。**(16a-c)の最初の節(前半部)を聞いた聞き手は、通常の DN と解釈するが、後の修正節(後半部)を聞いて、前半部と矛盾する解釈に陥ってしまい(惑わし発話(garden-path utterance))、前半部の否定を語用論的、メタ言語的に再解釈する。**

(16) a. I'm not his daughter—he's my father! (=11B)
b. We didn't engage in sexual intercourse, we made love.
c. I didn't read the paper and get up, I got up and read the paper.

Carston (1986)は矛盾が MN の唯一、決定的な特徴ではないとする。Carston (1996)の基準（エコー否定であること）からすると、(17)は MN。矛盾ではない MN であるため、矛盾は MN の唯一、決定的な特徴ではない。

(17) X: You seem amused by my problem.
Y: I'm not Amused by it; I'm Bemused by it.（amused（面白がる）と bemused（当惑する）の韻を踏んだ訂正） (Carston 1996)

Y が X の命題内容のみを否定しているとすると、そのあとで「bemused である（当惑している)」と修正するため、矛盾は感じられない。これは MN ではなく、DN になる。ところが、amused と bemused という音声的な類似性が問題である。Y は X の言葉から、命題のみならず、amused という bemused と似た音声までもエコーして否定している。Y にとって、否定の焦点は音声的な類似性である。命題内容としては amused と bemused は違う種類の命題上（違う尺度上）にあり矛盾ではないが、音声的には韻を踏んで同じ尺度上で、MN 的なおかしさが生じている。bemused が puzzled とか confused ならおかしさはなく単なる DN。(17)は MN 的な DN。

MN の話し手にとっての矛盾と、聞き手にとっての矛盾の区別が必要である。

(13) A: Is that haggis good?
B: That haggis is not good; it's excellent. (van der Sandt 1991 改) (haggis: ハギス（料理名))

話し手がエコー否定してるものは「命題」以外の「使用条件（含意、音声など)」である。(13)の場合、エコー否定しているものは good の持つそれ以上ではないという尺度の含意(scalar implicature)のみである。すなわち話し手 B にとってはこの否定(not good)と excellent は矛盾していない。B は「ハギスがおいしくない（＝まずい)」とは思っていない。すなわち自分の信念としては表明していない。B はあくまでも、ハギスのおいしさという尺度上<good, excellent>の good を否定しているから、「good ではなく excellent である」と言っても、何ら矛盾しない。ところが、B の発話を聞いた聞き手 A は、「good ではない」と言われると「まずい」のではないかと default 的に解釈してしまう。そのため、excellent という言葉を聞いて矛盾を感じてしまう。

(18)「古田は言っています。『私は４番バッターじゃなくて、４番目です』と。」(1997 年 10 月 19 日、朝日放送アナウンサーのプロ野球中継（ヤクルト・巨人戦）でのコメント)

(19)カリエスを心配して病院に行った友人がいる。当人はカリエスだと信じ込んでいたよう

で、医者にもそう伝えた。医者は検査をして、こう言った。
「大丈夫。カリエスではありませんでした。あなたはガンです。」（永六輔『大往生』）

（田中 1998a）

(18)では、古田は「あなた方が思うような4番ではない」と言っており、否定しているのは「4番バッターが持つ打線の中心のスラッガーとしての役割」のみである。古田の中では、「4番バッターでない」ことと「4番目」であることは矛盾していない。(19)も同様で、医者が否定しているのはあくまで、「カリエス」に付随する「死なない病気である（治る）」というこの友人が疑いもしない含意の方である。それゆえ、この医者にとっては、「カリエスでない」ことと「ガンである」ことは矛盾しない。ところが、(18)(19)を聞いた聞き手は、「4番バッターではない」＝「4番以外である」、「カリエスではない」＝「ガン（というような死病）ではない」ととるのがdefault的な解釈であるため、矛盾を感じ、「惑わし発話(garden-path utterance)」と感じる。

(20)	エコー否定しているもの	矛盾の有無
DN:	命題	無し
DN的なMN:	命題 ＋ 使用条件（音声、含意など）	無し
MN:	使用条件（音声、含意など）	話し手にとっては無し/聞き手にとっては有り

2.5. 上限

Levinson(2000)は、「**量の含意(Q-based implicature)**」からMNを説明している。量の含意とは、Grice（1975)以来の「量の公理(Maxim of Quantity)」の前半部「必要とされている情報をすべて与えよ」から、「それ以上ではない」という含意が生じることを言う。(21a)では、「にんじんを3本食べれば」、「2本や1本は必ず食べていて(John ate *at least* three carrots.)」（意味的含意(entailment)）、「4本以上は食べていない(John ate *at most* three carrots.)」（量の含意）ということになる（cf. 五十嵐 2000)。(21b)はその否定文であるため、DNの解釈では「最低3本食べたのではない」のであるから、量の含意を否定することなく「4本5本は食べていない」（意味的含意）し、「2本や1本は食べている」（量の含意）ということになる。DNは命題内容のみを否定し、使用条件（量の含意）は否定しない。ところが、(21d)はその量の含意を否定し（2本や1本食べたのではない）「4本食べた」と述べ、DNと逆の解釈が生じる。

(21) a. John ate three carrots.
b. John didn't eat three carrots.
c. [John ate at least three carrots] & [<u>John ate at most three carrots</u>]
d. John didn't eat three carrots; he ate four. (Levinson 2000)

量の含意そのものを問い直す。それには、「MNの話し手が持つ尺度の上限」と、「聞き手（先行発話の話し手＝MNを聞いている聞き手）の持つ尺度の上限」は異なることを指摘したい。

(22) A: Is he happy?
B: He is not happy; he is ecstatic.

Levinson(2000)あるいはHorn (1985, 1989)の説明では、(22)はHe is happy.は「ちょうどhappyであり、それ以上ではない」という（量の公理の前半部から生じる）量の含意が生じている。(22B)のMNは、その含意の方を否定し「それ以上でないことはない」すなわち「恍惚状態(ecstatic)である」ことを述べている。Levinson, Hornの説明では、話し手はhappyの上限を破る否定を行っていることになる。ところが、これだけでは、前節で述べた話し手Bの発話意図と聞き手A(=

先行発話の話し手)の発話意図が異なることや、何故Aは矛盾と感じBは感じていないのかなどを説明することができない。むしろ、Levinson, Hornの説明は、Aの方の解釈に当てはまる。では、MNの話し手Aはどういう上限を持っているのであろうか。

Levinsonに従って、happy, ecstaticを強い述語、弱い述語の順に<ecstatic, happy>と書く。MNの話し手Bは、彼(He)については最初からecstaticの強い述語(立言)の方を信じていると考えられる。すなわち、BはGriceの量の2番目の公理、「必要以上の情報は与えるな」が成立すると信じていることになる。ところが、Aが、Bの信念(予想)に反して、自分が信じている情報より少ない量の情報を述べたのである。Aが与えた情報は、Bが信じていた情報より少ない情報である。そのため、Bは「より少ないことはない(happyではない)」ことを主張している。

通例、より少ない情報を提示されると、より多い情報は成立しないことが含意される。

(23) A: そこへは、私たちはどうやって行くことになるの。
B: ええと、私はデイブの車に乗せてもらうことになっているんだけど。(Thomas 1995)

Bが与えている情報は、Aが要求しているより少ない。そのため、Aが要求している情報は成り立たないことが含意される。この場合は、Aは車に乗せてもらう手はずには入っていないとBは言っているのである。

(22B)は、より多い情報が成り立たないことはないと言っているのである。通例のhappyだからと言ってecstaticが成り立たないことはないと言っていることになる。話し手Bは、happyが成り立たないと最初から思っていたのではなく、自分が信じるecstaticが成り立たないと言われたことへ反論しているのである。(19)でも同じことが当てはまる。

(19) カリエスを心配して病院に行った友人がいる。当人はカリエスだと信じ込んでいたようで、医者にもそう伝えた。医者は検査をして、こう言った。
「大丈夫。カリエスではありませんでした。あなたはガンです。」(永六輔『大往生』)

この医者は、友人の「カリエスではないか」という心配から、自分が持っている「この人はガンである」という信念が否定されるものではないことを述べている。当然、死病という尺度上では、<ガン, カリエス>という強弱の順序になる。

このように考えると、MNの話し手の発話意図と、その聞き手(=先行発話の話し手)の解釈は全く異なることになる。そのためには、MNの話し手は自分自身が信じる尺度の上限を持っていなければならない。聞き手の尺度の上限はそれよりは弱いことになる。

ただし、これだけでは上述した(2a)の発音や(2d)の形態素、(2e)の使用域(レジスター)など、「Horn尺度(Horn scale)」の考えにくい例は説明し切れていない。そのためには、「尺度の上限」という基準を、MNの話し手が「正しい(適切)と信じる項目」まで含めた方がよい。正しい項目は、正しくない項目と強、弱の順序対(ordered pair)をなす。

(24) 「障害は不便です。だけど不幸ではありません。」 (乙武洋匡『五体不満足』)

(24)は、通例のMNの否定と修正節の順序が入れ替わった例である。いままで見てきたMNでは、「障害は不幸ではありません。不便なだけです」となる。通例は、「不幸」と「不便」には強弱の差がないと感じられる。それでも(24)では話し手が正しい(「障害」の記述に当てはまる)と思うのは「不便」のほうであり、「みんなが思うように『不幸』ではない」と言っている。話し手にとっては、自分が正しいと信じている「不便」が、一般に想定されている「不幸」より情報量が多く、価値があるのである。

3. おわりに

まず、MNは先行発話の使用条件(発音、含意など)を引き取った、自分の信念ではない「エ

コー否定」である。次に、先行発話の話し手（＝聞き手）の発話意図と、MNの話し手の発話意図が異なり、それを聞いた聞き手の解釈も異なる。さらに、MN と後ろの修正節は矛盾関係(contradiction)にあるが、それは、MNの話し手の意識の中では矛盾ではない。聞き手（＝先行発話の話し手）にとっては矛盾となる。最後に、MNと感じられるためには、話し手が前もって量的・質的な上限を持っていなければならず、それと聞き手の上限は異なっている。このように、MNの話し手の発話意図と、聞き手の解釈を分けて考えると、MNの特質が浮かび上がってくるように思われる。

参考文献

Burton-Roberts, Noel. 1989. "On Horn's Dilemma: Presupposition and Negation." *Journal of Linguistics* 25, 95-125.

Carston, Robyn. 1996. "Metalinguistic Negation and Echoic Use." *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.

——. 1998a. "Negation, 'Presupposition' and the Semantics/Pragmatics Distinction." *Journal of Linguistics* 34, 309-350.

——. 1998b. *Pragmatics and the Explicit-Implicit Distinction*. Ph.D. Dissertation. University College London.

Foolen, Ad. 1991. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity: Some Comments on a Proposal by Laurence Horn." *Pragmatics* 1, 217-237.

Grice, Paul. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, vol. 3, *Speech Acts*, pp. 41-58. New York: Academic Press.

Horn, Laurence. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61, 121-174.

——. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.

五十嵐 海理. 2000. 「「メタ言語的否定」の新分類」『六甲英語学研究』第3号, 1-14.

Kempson, Ruth. 1986. "Ambiguity and the Semantics/Pragmatics Distinction." In Travis, C. (ed.) *Meaning and Interpretation*, pp. 77-104. Oxford: Blackwell.

Levinson, C. Stephen. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Ma.: MIT Press.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/1995[2]. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

田中 廣明. 1998a. 「メタ言語否定における非現実認識」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『小西友七先生傘寿記念論文集・現代英語の語法と文法』 pp. 270-279. 東京:大修館.

——. 1998b. 『語法と語用論の接点』東京: 開拓社.

Thomas, Jenny. 1995. *Meaning and Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman.

van der Sandt, Rob A. 1991. "Denial." *CLS* 27/2: *The Parasession on Negation*, 331-344.

Wilson, Deidre and Dan Sperber 1988. Representation and Relevance. In Kempson, R. (ed.) *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, pp. 133-153. Cambridge: Cambridge University Press.

——. 1992. "On Verbal Irony." *Lingua* 87, 53-76.

吉村 あき子. 2000a. 「メタ言語否定と関連性理論」『学習院大学言語研究所研究集会：関連性理論研究は認知・言語の研究に何を寄与しうるか』口頭発表.

——. 2000b.「メタ言語否定と関連性理論」『英語青年』第146巻 第7号, 438-439(22-23).

プロフェションと語用論—語用論はいかに「場」の行動を分析するか

高原　脩
神戸市外国語大学

グローバルな国際化時代の今日、言語の伝達機能と使用のコンテクスト、場面、状況を重視し、人々の相互理解を深め、普遍的に適用できるダイナミックな人間のコミュニケーションを可能にする原理を追求することが益々重要になってきている。そのような状況にあって、様々な言語研究の分野の中で「言語使用の科学」としての語用論が強力な学際的研究領域として目覚ましい進展を見せている。

「語用論は言語とコンテクストの関係の研究である」(Levinson 1983: 21) と言われ、話し手の意図や会話の推論、そして言語理解を説明するには、コンテクストが中心的な役割を果たすため、その重要性がしばしば指摘されてきた。しかし、その概念は曖昧かつ異なった意味で用いられることがあり、規定の仕方が難しく、コンテクスト論や場面論の構築を目指す試みはそれ程多くはなかった。コンテクストには二つの意味がある。広義には、語、文、談話を単位とし、ある発話と関連する周辺の言語的ないしは非言語的構造が関わる要素であり、また狭義には、人類学者Malinowskiや言語学者Firthによる静的な捉え方から、話し手、聞き手の相互行為の一つである動的な概念としての捉え方があり、修正、拡大が行われている。一連の言語理論の中で生成理論ではsyntaxの自律性が強調された。しかし、言語分析の単位との関係におけるコンテクストの役割として、文の理解にはそれが用いられる周辺の状況を知る必要がある。なぜなら文だけを見ていたのでは多くの文は無意味となり、仮に意味を成すとしても間違った意味をもつことになるからである (Mey 1999: 34) 。機能主義の言語研究では、syntax はコンテクストに影響されるものとして捉えられる。生成意味論や発話行為においても、コンテクストは重視され、とりわけ、間接発話行為や丁寧さの条件では、発話はコンテクストにおける行為とみなされる。関連性理論では、聞き手の視点を考慮し、コンテクストとの関連で関連性の概念を解明する。社会言語学では、社会的状況の観点からコンテクストを概念化し、状況や社会の変数を定義する。また、相互行為的社会言語学者は、動的な相互行為の観点から、特定の言語交換が社会的、文化的あるいは対人関係のコンテクストを変えると主張し、会話分析者は会話の参与者の視点から、コンテクストは発話の相互行為の中で構築されていくものと捉える。談話やテクスト分析では、談話構造を局部的にまたは全体的に文の前後に作用する秩序ある単位とし、文間やコンテクスト間の様々な関係を扱う。意味論においても、コンテクストに依存する「指示」、「定性」、「照応」などの事象や「多義性」、「同義性」などの語彙の分析においてコンテクストの影響に注意が払われる。また、認知科学やAIでは、言語的知識を処理するための非言語的な知識であるコンテクストと関連するframe, schema, script を重視する。さらに、子供の言語習得では、子供の発話はコンテクストに拘束されているものとして捉え、その習得は大人と子供とのコンテクスト化した相互行為により可能になるとみなされる。

このように、様々な分野においてtext や talk の構造や過程に及ぼすコンテクストの影響が認められ、コンテクストの多様な解釈を巡って永年議論されてきた。その結果、場面論についての関心が近年、急速な広がりを見せている。しかし、コンテクストが言語使用をどのように制約し、言語理解にどのように貢献するのか、というcontextual analysis

はまだ十分に行われているとは言えない。従って、納得のいく説明可能なコンテクストの構築は、会話のモデル内においてなされるべきであり、人々が会話をする様々な理由を十分に説明する、より包括的な会話モデルの開発が望まれる (G. Brown 2000: 145)。会話や談話の意味を理解するということは、コンテクストや社会的場面に依存することであり、会話や談話は社会的場面での過程や言語使用としてダイナミックな役割を果たすものとみなされる。言語の社会的機能や発話行為の語用論そして談話分析を含む言語科学の理論的基盤が拡大され、人々は特徴的な談話環境である諸制度や広範囲なプロフェッションに見られるコミュニケーションの諸問題にアプローチできるようになり、実質的な問題の解決に向け重要な役割を果たしてくるようになった。人々が様々な実際的目標を遂行し、日常の多くの仕事で行う中心的な手段である'talk-in-interaction' がプロフェッションの分野で次第に複雑になるにつれ、何が仕事場での相互行為に特有なものであり、何が一般の会話規則に求められるものであるのかを説明することが重要となる。(Sarangi & Roberts ed. 1999: 29) 最近の国際会議や関連研究書の出版に見られるように、日常のtalkとは異なり、実際上の問題を解決する方法を示す制度的 talk のうち、プロフェッションと語用論への関心が高まり、それらは語用論の重要な研究領域として次第に成果を挙げてきつつある。

このような背景を踏まえ、本シンポジュウムでは、三講師が言語学、コミュニケーション障害学、法社会学の各場面の事象に見られるいくつかの問題を提起する。

国広講師は、「場面と意味」というテーマの下、言語表現の意味は視点の位置や焦点のあり方により決まる面があり、場面の状況との結びつきが深いことを、日英語の興味深い具体的な資料に基づき解説する。

次いで、大井講師は、語用論とコミュニケーション障害学の接点について概説し、重度の知的障害と知的に正常な自閉症という知能・言語・コミュニケーションの二つの異なる組み合わせを対比することで、語用論の規定能力に関する想像をめぐらせ，そこに見られる言語使用の規則を浮き彫りにする。

最後に、樫村講師は、制度的相互行為としての発話交換により達成される場面のあり方としての社会秩序を考察の対象とする。Workplace communication 研究の中心的枠組みの一つであるエスノメソドロジーを用いた「会話分析」の方法について説明した後、「法律相談」という場面において、この視角からの会話分析がいかに行われるかを示し、制度的相互行為の構造を言語の面から解明する。

かくして、国広講師では、Lexical Semantics や Lexical Pragmatics の立場から、大井講師と樫村講師では、会話分析の手法により、語用論的視点からの問題解決の可能性とその実践的な有用性について提言される。また、当該場面において三講師が共通にとりあげているメッセージの送り手と受け手との理解や解釈という語用論的事象の特性について、各講師の見解が示される。

場面と意味

——場面と視点と焦点——

東京大学名誉教授　　国広哲弥

言語表現は視点の位置によって決まる場合があり、言語表現の意味には、視点の位置や焦点のあり方によって決まる面がある。このことを具体例に基づいて説明するのが本論の目的である。

場面の構成要素： 話し手、聞き手、表現対象、視点、状況。

A. 場面と視点。

英語の場面内視点と日本語の場面外視点。　(cf. 所有表現と存在表現)

(1) Le pain n'est pas encore venu. / We haven't got any bread yet. / パンがまだ出てない。(Frei 2000 文、No. 197)

(2) J'ai changé d'adresse. / I've moved. / 住所が変わりました。 (Frei, No. 377)

(3) Ceci entre nous! / This is between you and me. / これはここだけの話だよ。(Frei, No. 896)

視点の移動。

(4) How about there? / このへんでどうですか。(聞き手に視点を移す場合)

(5) Hey, look at this! / おい、あれを見ろ！　(映画 Home Alone 1)

(6) We are almost there. / もうすぐですよ。(二重視点)

B. 直示（deixis）の基準としての場面。

時間的直示の基準は発話時、空間的直示の基準は話し手の位置と向きである。辞書における直示語の定義ではこの場面的基準を用いなければならない。

(1)　「いま」

[岩波国語辞典第五版]　過去とも未来とも言えない時。

[大辞林第二版]　話し手が話をしている時点。

(2)　「みぎ」

[岩国]　東を向いた時、南の方。また、この辞典を開いて読む時、偶数ページのある側を言う。

[大辞林]　空間を二分したときの一方の側。その人が北に向いていれば、東に当たる側。

「みぎ・ひだり」の定義には、人体を図示する必要がある。

(3)　contemporary:　(a) 同時代の。(b) 発話時と同時代の。(c) 現代の。

(4)　present (adjective): (a) 存在する。(b) 発話時に存在する。(c) 現在の。

(5)　current (adjective): (a) 広く行われている。(b) その時に認められる。(c) 発話時に認められる。現代の。

「その時に認められる、その時の」という意味は、どの辞典にも採録されていない。

Cf.　*The New Oxford Dictionary of English,* 1998.

current　adjective　belonging to the present time; happening or being used or done now: *keep abreast of current events* | *I started my current job in 1994.* ■ in common or general use: *the other meaning of the word is still current.*

「その時の」の意味の 'current' の実例：

(5a)　Make your contribution as informative as is required (for the *current* purposes of the exchange).　(George Yule, *Pragmatics,* The Second Edition, p. 37)

(5b)　parents, if they like, can correct the child until they're blue in the face, but she will continue to use her *current* pattern for making negatives until she's ready for the next stage.　(R. L. Trask, *Language,* The Second Edition, p. 172)　Cf.　(I) No I want juice.　(II)　I no want juice.　(III)　I don't want juice.

(5c)　Thus, a speaker can generally select one or another of such conceptualizations as the one she will use to represent the ideational complex that she *currently* wants to communicate.　(Leonard Talmy, *Toward a Cognitive Semantics,* p. 14)

C.　語の基本的機能の中に組み込まれた「場面」。

(1)　「のだ」の基本的機能：

ある現状を認知するという主体的行動を行ない、それと関連があると"主観的に判定される"既定命題を「のだ」の前に提示するということである。[中略]　さらにこ

の既定命題も主観的にそう認められるものであることに特に注意をうながしておきたい。(国広、1992: 19-20.) (さらに田野村、1990: 228; 佐治、1991, 1999 参照)

前提となる「現状」が何であるかはっきりしない時は「のだ」は使いにくい。

(2) Stage-level predicates: *be available, be visible,* etc. (Diesing, 1992; G. Carlson, 1977, 'Reference to Kinds in English.')

D. 場面と焦点。

焦点は広かったり狭かったり、対象物あるいは現象素の一部分に当てられたりする。このことを考慮に入れることによって、多くの多義的意味派生が説明される。焦点のあり方による多義派生は臨時的なこともあるが、語義の一部として定着することもある。

(1) 学校。

(2) bracket (verb): ○ ○ [● ●] ○ ○ (現象素)

括弧を指す名詞に由来するこの動詞用法は、括弧の空間的位置関係に基づくものと、括弧の機能に基づくものとに分けられる。

図形的に見ると括弧はまとめられるものの両端に位置しているところから、次の用法が生じる。

(2a) Her home is *bracketed* with office buildings.

(2b) news stories *bracketed* by commercials.

括弧は複数個のものの一部を何らかの共通の属性に基づいてまとめる働きをすると共に、それ以外のものを除外する働きをする。

(2c) *bracket* together cities of around the same population. (まとめる)

(2d) *bracket* off politics. (除外する)

(3) punctuate: ——○——○——○——○—— (現象素)

この動詞の主語が 「 ○ 」に相当するが、線で現されるある連続体に焦点を合わせるか、丸に焦点を合わせるかによって、二つの意味が生じる。これは図形 (figure) と背景(ground)の問題であると同時に、空間と時間の問題でもある。

(3a) The place was filled with the sounds of rhythmic hammers and whining power

saws. After two weeks the wall panels, *punctuated* with windows and door openings were stood upright as if the building had suddenly been inflated. (Sidney Sheldon, *The Stars Shine Down*)

(3b) We'd come from one of the many funerals that *punctuate* small-town life, though this one had been more significant than most, since it was Kelli's mother who had died. (Thomas H. Cook, *Breakheart Hill*)

(4) day: 時間 → 空間 → 出来事 → 経験 (焦点の推移による)

E. 場面と眺める方向 (perspective)。

古語「けり」の意味。(語源は「き」＋「あり」)

(1) 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。(竹取物語、かぐや姫) [伝承回想]
(2) 田子の浦ゆ打ち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りけり。(万葉集、三・三一八赤人) [詠嘆]
(3) 妹として二人作りしわが山斎（やま）は木高く繁くなりにけるかも。(万葉集、三・四五二旅人) [現在（山口明穂、2000:111)]
(4) 緑なる一つ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける。(古今集、秋下、二四五読み人しらず) [過去と現状を共に言い表わす（山口明穂、2000:170)]
(5) 式部卿宮、明けん年ぞ五十になり給ひける。(源氏物語、乙女) [未来、(山岸徳平)]

「けり」の基本的機能：

細江逸記：伝承回想（『動詞時制の研究』p. 137)
山田孝雄：現に見る事に基づきて回想する意。（『日本文法講義』p. 160)
山口明穂：過去の事態を思い起こし、それを現在につなげる。(日本語を考える』p.169)

「けり」の現象素： 過去 ————現在
← ———— (細江、山田)
———— → (山口)

この方向性の違いは、文脈により語用論的に生じるものであり、「けり」そのものは、過去から現在に至る全時間帯を示すに留まるものと考える。

参 考 文 献

Diesing, Molly (1992), *Indefinites*. The MIT Press.

細江逸記(1932)、『動詞時制の研究』泰文堂。

国広哲弥(1984)、「『のだ』の意義素覚え書」、『東京大学言語学論集 ’84』。

国広哲弥(1992)、「『のだ』から『のに』・『ので』へ――『の』の共通性」、『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会。

三上 章 (1972)、『現代語法序説―シンタクスの試み―』くろしお出版。

佐治圭三(1991)、『日本語の文法の研究』ひつじ書房。

佐治圭三(1999)、「『のだ』への補説」、『無差』第6号、京都外国語大学日本語科。

田野村忠温(1990)、『現代日本語の文法 I ―「のだ」の意味と用法―』和泉書院。

山口明穂(2000)、『日本語を考える』東京大学出版会。

山田孝雄(1922)、『日本文法講義』宝文館。

障害をもつ人との会話
ー重い知的障害及び高機能広汎性発達障害ー

大井　学
金沢大学

１．語用論とコミュニケーション障害

語用論とコミュニケーション障害学とが接触を持ち始めたのはここ２０年ほどのことである。ただし、少なくとも日本国内でのそれは双方向的というより、今のところコミュニケーション障害についての臨床実践に語用論が応用されるという一方的なものにとどまっている。応用には２通りあって、コミュニケーションに障害をもつ個人の言語学習にとって周囲の人々との会話をのぞましいものにすることをめざすものを「広い語用論」、その個人の語用能力の障害を評価したり、特定の語用技能を改善したりすることに語用論理論を役立てるものを「狭い語用論」と呼ぶ。これらの概要は大井（印刷中ｂ）がまとめており、また、日本における子どもを対象とした多様な臨床実践の到達点については長崎（1994）及び大井（1995a）に詳しい。

本報告で取り上げるのはそうした臨床応用の技法ではなく、コミュニケーションに障害をもつ個人と周囲の人々とは互いにどのように会話しているかという問題である。彼らとの会話を分析することは、一方では彼らの社会的行動や言語学習に対する支援の新たな技法を見出していくことにつながると共に、他方では人間の言語及びコミュニケーション一般に関する知見を付け加えるものと期待される。ただ、報告者のこれまでの仕事はもっぱら前者に向けられており、残念ながら後者の方向で話題を提供するには至りそうにない。

２．重度知的障害と高機能広汎性発達障害

ここでは、多様なコミュニケーション障害のうち、知能、語彙・文法、語用論の３つの組み合わせにおいて顕著な対照を示す次の２つのカテゴリ、すなわち重度ないし最重度の知的障害（米国精神医学会の診断と統計の手引きDSM-Ⅳでは精神遅滞）、および高機能の自閉症（同じく広汎性発達障害）に焦点を当てて議論を進めたい。

最重度ないし重度知的障害は、知能のみならず言語にも重篤な遅れを来たし、学齢期に至ってもことばの産出と理解が困難で、わずかに話せたりことばに反応できたりする場合も、語彙と文法のシステムをもつには至らない。しかし前言語的なコミュニケーションの発達は単に遅れるだけで質的な歪みは示さず、年齢を重ねると場合によっては知能水準を上回る巧みさをみせることすらある。

これに対して高機能広汎性発達障害の場合は、知能と言語にほとんど問題がないにもかかわらず、前言語的コミュニケーションの発達からその後の言語の対人的使用に至るまで一貫して深刻な歪みを示す。幼少期には共同注意を示す行動や参照視行動がほとんど見られなかったり、伝達意図が見られないままことばを獲得したりし、代名詞の逆転や反響言語、独り言、反復質問等に代表される、文法と語彙の面で間違いがないが伝達的にはきわめて不適切な特異な言語使用を示す。学齢期にはそれらが解消して普通の会話ができるようになるが、言語行為の適切性条件、聞き手の注意の取得、ターン交替や話題の管理、情報の新旧の区別など幅広い言語使用の領域に顕著な問題を残しやすい。さらに、相当程度に知能が発達しても推論的伝達の遂行に困難を示したり、比喩や冗談、反語を理解できなかったりする。

これら２つの障害を報告者のこれまでの会話体験に即して比べると、興味深いコントラストが浮かび上がってくる。我々が高機能広汎性発達障害を持つ子供と話す際には困らず、重度知的障害の場合に困るのは、彼らの身振り・表情ないし発話からメッセージの認知的な意味を読み取ることである（例えば、箱について何か行為が求められていること自体は容易に伝わってくるが、箱について何をしろというのかがなかなかわからない）。そのバリアを乗り越えるためには、後述するように彼らと我々とが共有していると思われる通じ合いの仕組みを充分に享受するやり方ーゆっくりとした確かな伝え合いーが求められる。出来るだけ多くのシグナルを彼らから受け取り、文脈におけるその意味をより鮮明にとら

えるようにするのである。逆に重度知的障害をもつ子どもとの間では容易に体験できるのに、高機能自閉症の子どもとの間で体験困難なのは、互いにメッセージを送り合っているという感覚、そのためにターンを譲り合ったり争ったりしているという感覚、さらに互いの心が出会って次々に会話に何かを付け加えて行っているという感覚を持つことである。このバリアを超えるには、我々にとって自明と思える通じ合いの仕組みのうち、彼らがどの部分をうまく使っていないかを我々自身が明確に理解することである。言い換えれば、我々自身がどういう規則に沿いどんな手順に従って会話しているかということを、出来る限り明るみにさらすことが求められる。

３．重度知的障害をもつ子どもとの会話

報告者は以前に最重度ないし重度の知的障害をもつ子どもの前言語的コミュニケーションについて、話し手の意図の表現と聞き手によるその理解のプロセスに関する組織的な検討を行った（大井, 1995b）。それについて触れる前に、その作業のきっかけの１つとなっているエピソードを大井（1998）から引用して紹介したい。

「さて彼がそうしている間にも、いよいよ歌は終わり、揺れは止められ、シーツは床に広げられ、先の男の子は降りていきました。大人はそれぞれシーツの端に軽くふれたまま、くだんの男の子の方を見やります。そこからの両者のやりとり約50秒ほどのビデオ記録を、文字に写し取ったものを次に示します。（下線の実線部が直後の破線部と重複する）

男の子：席を立ち数歩あるいて、一方の大人のそばにやってきて、シーツを見ながら声をあげ、腰をかがめて右手でそれを叩き、すぐ立ち上がって両頬を１回打ち、再びしゃがみこんでそれに両手でさわろうとする。
大人：男の子を見守る。
男の子：大人を見ながら椅子の方に３歩後ずさりし、とまって方向を斜め右前に取り、数歩大人から遠ざかる。
大人：「**もう１回か**」と男の子に呼びかける。
男の子：大人を見て、急いで元の椅子に戻り、座ると、首を左に傾げ、右頬を数回打つ。
大人：男の子を見守る。
男の子：続けて右頬を数回打ち続けながら立ち上がり、両頬を数回打ちながらシーツに向かって歩き、かがんでシーツを両手でこするようにし、シーツを見ながら数回両頬を打ち、最後にシーツを両手で叩く。
大人：「**なに**」
男の子：急いで元の席に戻り、声を出しながらすわり、首を左に傾げて右頬を２度叩き、首を戻して両頬を２回叩いた後、両手を下ろし、大人の方を見る。
大人：片手でシーツを叩いて見せながら「**もう１回か**」。
男の子：首を横に２回振りつつ立ち上がり、シーツに近づき、それを見下ろし、まっすぐ立ったままひときわ大きく鋭い声を出す。
大人：「**もう１回か**」と、人差指を男の子の目の前に立ててみせる。
男の子：両手を２度打ち合わせながら大人をちらっと見、またシーツを見下ろしながら両頬を１度叩き、右足　をシーツに乗せる。
大人：男の子をみて「**してちょうだいか**」、「**してちょうだいか**」
男の子：向きを大人の方に変えながらシーツの上を２歩歩き、真っ正面から大人と向き合って、両手を数回打ち合わせる。
大人：シーツを指さし、「ねんねは」。
男の子：にこにこしながら横たわる。

大人は立ち上がって、歌いながらゆっくりと大きく彼を揺らし始めました。こうして１つの伝達的な出来事の幕が、彼の望んだ遊びを始める方向で、無事におろされたわけですが、前半と後半とではかなり様子が違っています。前半、男の子は席を立っている時にことばをかけられると、なぜか２度とも席に戻りました。彼がシーツに乗りたがっていることは大人にもよくわかっており、彼をシーツに乗せる用意までしていたにもかかわらずです。大人は決して彼を椅子に座らせるつもりだったのではありません。後半になって流れが変わりました。３度目に席を立った彼はもうそこに戻ることなく、大人と向きあい続けました。

男の子は始めから終わりまでシーツに乗りたがっていました。しかし、前の子が終わったからといって、大人の同意も得ずにいきなり乗り込んでくるわけではありません。その前に何かすることがあると彼なりに思っているように見えます。そのことは大人も知っていますが、すぐには彼の要請を受け入れません。大人は彼ともう少し話がしたかったようです。この場面を収めたビデオを見ながら彼

女が筆者に語ってくれたのは、シーツばかり見ないで自分にも眼を向けて欲しかった、そして彼女の問いに対して応えてほしかったという、彼に対する気持ちでした。

まず最初に男の子がシーツに近づいて身振りしたときに、彼を黙って見守ったのは、視線を自分の方に向けるかも知れないという期待があったからだそうです。男の子がウロウロし始めたので、気持ちを確かめたいと思い「もう１回か」とたずねました。このときに席に戻ったのには非常に戸惑ったそうです。なぜかわからず見守っていると、再び近づいてきたので、ことばで反応を促してみたところ、またまた席に戻ってしまい、彼女はますます戸惑ったそうです。何かすれ違っていると感じ、おもわず身振りを添えて言い直してみたのだということでした。前半に比べれば、彼と話ができた感じがあり、非常に嬉しかったし、自分なりに納得できたので、彼に寝転がるようにいったというわけです。

ただし、男の子の方が彼女と同じように「話が出来た」と感じたかどうかには、実はすこし疑問があります。少なくとも、自分の考えが伝わったとは感じていたと思われますが、そのことについて話は済んだのだ、もういうことはないと思っていたかどうか、よくわかりません。

ここで男の子と彼女と筆者の関係に触れておきましょう。彼女はある障害児施設の保母で、６歳近いこの男の子の担任です。そこへ月に１回だけやってくる非常勤の言語指導担当者が筆者です。後半で身振りを添えるようにしたのは、後になって考えてみると、以前筆者から受けた助言が心の隅にあったからかもしれないとのことでした。それは、遅れの重い子ども達に、話しことばだけで何かを伝えるのは難しいので、身振りつきで話す方がよいというものです。その施設に通う子ども達の多くは遅れが重かったので、確かに筆者は口癖のようにそう言い続けてきました。しかし、それが、この出来事に見られるような鮮やかなコントラストを作り出すとは、予想していませんでした。自分自身のかけたことばにおよそそぐわない男の子の反応に驚き、企図した影響をなんとか彼に及ぼそうとした、彼女の一瞬の気働きが、きわめて興味深い出来事を引き起こしたのです。そして筆者にとっては、それは別の興味を一層かき立てるものとなりました。おりしも筆者が進めつつあった、重度精神遅滞児と大人との交渉－相互の一致や合意に至ろうとする相互作用－に関する研究の行く手を照らし出すものと思えたのです」（以上まで、ミネルヴァ書房刊、秦野悦子・やまだようこ編「コミュニケーションという謎」第３章、53-55頁）。

このエピソードに示されているような、子どもの意図のつたない非言語的な表現に対する大人側の明確化の要請（太字部）は、健常乳児でも生後９ヶ月前後から行われているもので、１２ヶ月を過ぎると子どもたちは伝達行為を反復・追加・修正して、明確化を果たそうとすることが知られている。上のエピソードでも同様のコミュニケーションのための協力が子どもと保育者との間で行われている。ここで特に興味深いのは、大人の要請に対して子どもが明確化を行えるか否かに、大人の問いかけ方が影響を与えているらしいという点である。すなわち、最初の２つの太字部の問いかけは言語のみによっており、それに対して子どもは慌てて椅子に戻るという不思議な反応を返す。次の２つでは大人はことばに身振りを添えており、子どもは最初の２つとは全く異なって、落ち着いて明確化反応を行う。最後の大人の問いかけはことばのみに寄るものであったが、子ども自身は明確化に成功し、大人はそれに満足している。

報告者の体験としては、重度知的障害を持つ子どもとの会話では、彼らの伝達行為に対して言語的に解釈を提供してもはかばかしい応答が無く、また言語的に明確化を求めると会話が崩壊するという印象があった。こうした実感の一部は、彼らと発達検査の成績でマッチングした健常乳幼児との比較研究によって確認された。Golinkoff (1986) を下敷きとする子どもと大人のやりとりの分析システムを用いて、４から６歳の重度知的障害児、12ヶ月から17ヶ月の健常児それぞれ１０名を、療育又は保育施設の保育者との会話について比較した。その結果、重度知的障害児は自分の伝達行為に対する大人の提供した解釈を受容することが健常児に比べて乏しく、また、大人は重度知的障害児の伝達行為に対して解釈を提供しないまま、要求（であることがほとんど）の内容を推定して充足することが多かった。子どもの伝達に対する大人の解釈を子ども自身が受容しているやりとりの例を２つ下記に示す。健常児では、子どもが始めた相互作用のうち55%がこれら２つで占められていたのに対して、重度知的障害のある子ど

もではそれが14%にとどまっていた。

【大人の解釈を子どもがすぐに受容する】
子ども：机の上のモデルカーに体を傾けて手を伸ばす（最初の信号）
大　人：それに触れて「これがほしいのね」（解釈の提供）
子ども：体を起こし手を下げる（解釈の受容）

【子どもの修正後、解釈の受容に至る】
子ども：大人の口に触る（最初の信号）
大　人：歌うのを止める（解釈の提供）
子ども：大人の手を取って拍手させる（子どもの修正）
大　人：別の音楽遊びの一部を歌い「これがしたいのね」（解釈の提供）
子ども：拍手する用意をして大人を見る（解釈の受容）

最初に示したエピソードのように、子どもの伝達行為に対する大人からの言語応答が子どもの反応の混乱をもたらすこと、一方で大人からの非言語応答は子どもを混乱させることが少ないことも報告者はしばしば経験していた。そこで、４名の重度知的障害児に対して次のようなコミュニケーション実験が行われた。彼らは何れも、合掌したり両手を打ち合わせたりして要求を表現することが多かったが、それに対する大人の言語的な解釈や明確化要請は、次の例のように乱暴な直接操作や子ども自身の伝達の中断をもたらすことが珍しくなかった。

子ども：大人のボールに手を伸ばす
大　人：離さない
子ども：力づくでそれを奪う

子ども：棚の上を見て両手を叩く
大　人：「ああ、電車ね、取ってあげるよ」と子どもを見る
子ども：離れていく

実験では子どもの要求伝達に対して大人がそれを承認する時はことばに添えて子どもの身振りを模倣するように、否認するときは腕組みをして動かないようにした。その手続きを１セッションあたり２０回程度で数セッション繰り返すと、どの子ども達も次のように大人の反応を受容するようになった。

子ども：大人の胸を見ながら両手を叩く
大　人：「いいよ」両手を叩く
子ども：ブランコに向かって歩き始める

子ども：大人の顔を見て両手を叩く
大　人：腕組みする
子ども：大人から離れていく

実験に参加した４名のうちの１名について、さらに実験的な指導を行った結果、彼は上記のような身振り模倣と腕組みに適切に反応するようになったのに加えて、大人の指示身振りを模倣するようになり、また、大人の言語的な明確化要請に対して手差しや物に触れる身振り明確化するようにもなった。指導を行う前の彼は、次のように大人がどんな言語応答をしようがひたすら合掌身振りを繰り返すだけであった。

子ども：シーソーに座って、大人に背を向けたまま合掌する
大　人：「Ｔ君なあに？」
子ども：合掌する
大　人：「シーソーか？」
子ども：合掌する
大　人：「一人でできんよ」
子ども：合掌する

指導が進むにつれ彼は、大人の問いかけに応じて物を触って大人を見るようになっていった。それだけでなく、つぎのようなかなり長いやりとりを経て、大人の理解の失敗を修復して伝達を成功させるようになった。指導前の状態と比べてこうした変化は非常に際だって感じられた。

子ども：合掌
大　人：何？
子ども：３メートル離れたところの玩具の１つに手を伸ばす
大　人：別の物を指さして「あれ？」
子ども：目指す玩具に照準を合わせた正確な手差しをし、指先を動かす
大　人：「ああこっち？」と指し直す
子ども：合掌
大　人：合掌
子ども：立ち上がって玩具を取りに行く

こうしたやりとりは、１歳台前半の健常児達が保育者と繰り広げている、伝わらなかっ

たメッセージについての大人とのネゴシエーションの過程と非常によく似ていた。違う点は、１歳児たちが大人の言語応答にもそれなりに太刀打ちが出来ていたのに対し、彼は大人が盛んに身振りを用いていることでようやくこの過程を操ることができたことである。

４．高機能広汎性発達障害の子どもとの会話

報告者は彼らとの会話についてまだ組織化された細密な会話分析を行うには至っておらず、以下に示すのは数人の事例が示したいくつかの断片的なエピソードの分析である。その焦点は次の２つである。まず、１）聞き手を特定し注意を取得する技能、及び相手の話しかけに反応する技能に見られる問題、ならびにそれへの大人の介入について、次に、２）相手からの発話の解釈、及び相手に対する情報提供に見られる問題、ならびにそれへの大人の介入。

聞き手特定、注意取得、話し手への反応

高機能のアスペルガー障害を示すリカが、同じ幼稚園年長組の健常なクラスメイト、ユリとマイに話しかける場面である。スカートのバックルを外すのを手伝うようにという再三のリカの要請にもかかわらず同級生は気づかない。

（ユリとマイが大きなトンネルを運んでくる）
リカ：（二人に背を向け、自分のスカートの背中側のサスペンダーのバックルをもち）誰か取って（振り返りながら）誰か取って
同級生：（トンネルを組み立て、リカを見ない）
リカ：（二人の方を向きバックルを押さえて）誰か取って
同級生：（リカを見ないで組み立て）
リカ：（二人に近づき）これ、誰か取ってエへ、後ろの方オホ（二人にバックルを向ける）
同級生：（リカを見ないで組み立て）
リカ：（二人を振り返り）後ろの方誰か取って（二人から離れて、床上のぬいぐるみにピストルを撃つしぐさ）バキューン、ドーン、バキューン
同級生：（リカを見ないで組み立て）
リカ：（再び二人に近づき、寄ってきたユリが真横を通り過ぎるのに合わせて、背中を回しながら）ねね、ちょっと誰か取って
ユリ：（トンネルの中のマイを振り返りながら、リカにはめもくれず行きすぎ）マイちゃーん、おいでおもしいよ
リカ：（ユリの方を見ながら、体を回しつつ、悲痛な口調で）ちょっと誰か取って
ユリ：（リカの真横を通り過ぎトンネルを覗き込む）
マイ：（トンネルの反対側の出口から顔を出し）ばー
リカ：（前向きにマイのほうに近づき）誰か取って後一つ（出てきたマイに背を向ける）
マイ：（リカの背中を見ながら横の熊を触る）
リカ：（サスペンダーをさわり笑ってマイを振り返る）
ユリ：（トンネルをかぶって）お化けだぞー
マイ：（ユリに近づく）
リカ：（**マイとユリを見ながら**近づき）ちょっと**バックルちょっと見て**ほら（**背中を振り返り**ながら笑う）
マイ：（バックルを外しにかかる）

リカの最後のターンの太字部は、それまでの彼女のやり方と違って、適切なタイミングで聞き手の注意を得る装置をいくつも同時に組み合わせて使っている。すなわち、まず聞き手との視線接触、聞き手が注意を方向づけるべき対象の指定、及び話し手自身の視線方向の変化による聞き手の追随注意の誘発、というように。これらがあって始めて、ようやくリカは同級生の注意を得られたように思われる。

聞き手を特定しその注意を得る技能に、高機能広汎性発達障害をもつ子どもはしばしば問題を持っている。それは次に示すような、彼ら同士の会話においてもあらわれ、大人がそれに介入すると彼ら自身が伝え方を変えようとすることがある。次の場面では小学校４年生のタクがフリーマーケットの開店宣言をしようとしている。この場面には他に小学校２年生から短大１年までの子どもが３名、そのきょうだい－その一人ケンは５歳児－２名がいる。

（子どもが他に５人離れて着席）
タク：（横の大人を見て座ったまま）それじゃ、ゴーって言ったら開始ね（視線を外しだれも見ず）スリー、ツー
他児：（誰もタクに注目せず）
大人：みんなに聞いて
タク：皆さんオッケーですか？
ケン：はい
タク：では始めます、スリーツーワンゴー！

タクはさまざまな共同活動で開始を宣言したがっていたが、たいていは仲間の注意を得ずに上のようなカウントダウンを始めるので、反応を得ることができない。ときには周囲の無反応にカウントダウンを終えた彼自身が「何も起こらない」とコメントすることすらもあった。

聞き手が名前を特定された場合は別にして、話し手がその子どもに向かって至近距離から話しかけた際にも反応しないこともしばしば目撃される。次の会話では、料理場面で小学校５年生のカナが真横に立っている短大１年のテルからの話しかけに反応しない。大人がカナに聞き手になっていることを指摘すると反応が始まる。

（ボウルをカナに近づけ、中の肉を指して）
テル：おい、ここ赤いから焼いて
カナ：（プレートで別の肉を焼く）
テル：（ボール内の肉を摘む）ほらみいや
カナ：（別の肉を焼く）
テル：（カナの背中から）話しきいとるんかねちゃんと？
大人：カナちゃんヒロ君が聞いてるよ何か
カナ：何？（うつむいたまま）
テル：（カナの手元を指して）これ赤いって、だから
カナ：赤い？

発話解釈と情報提供

上に示した幼稚園年長組の健常なクラスメイトのユリ、マイ、それにアスペルガー障害のあるリカ達の会話に戻る。場面はマイがお医者さんごっこの玩具を持ち出してきたところである。

（お医者さんの箱を持ったマイがリカに近づく）
マイ：（リカの肩を叩き）リカ、ほらお医者さんごっこ
リカ：（箱を床に広げるマイを振り返る）
ユリ：あユリも（トランポリンから降りる）お医者さん
リカ：（ユリと入れ替わりでトランポリンに乗る）
ユリ：（胸を押さえながら苦しそうな口調で）すみません（マイに近づく）
マイ：（箱がうまく開かず）あれ？
ユリ：こっち（箱を開けるのを手伝い、）ユリ、お医者さん、なんか（大きな聴診器を取る）
マイ：（小振りの聴診器？をとり）これ何や？
ユリ：それ知らない
リカ：（トランポリンの上から指さして）**それ、マイが持ってるのそれ、お医者さんやよ、マイが持ってるの**
マイ：（一瞬ユリと顔を見合わせる）
ユリ：（聴診器を耳につけ）はいお医者さん、マイさんどうしたんですか？

マイとユリが医者さんごっこをやると宣言し、１つの診療器具の名前が分からないという話しをしている。それへのリカの太字部のコメントは、他の二人にとっては解釈が難しかった模様である。二人にとってお医者さんごっこをしていることは自明であり、そのことばを改めてリカから聞いても何にもならない。

次にリカがユリの発話に応じる場面をみよう。

（プレイルームの壁に装備されたビデオカメラが突然鈍い音を立てて動く。カメラには鴨のぬいぐるみがかぶせてある）
ユリ：（ほほえみながらカメラを指して大きな声で嬉しそうに）あ、うごいたー
リカ：（カメラを見て、目をそらし、冷静に）**小鳥うごくよ、それ**
ユリ：（表情が消え小声で）ほんとや（元の嬉しそうな表情に戻り）遊ぼ、小鳥さん（カメラを見て）
リカ：（笑いながらボールプールに飛び降りる）
ユリ：（いったん真顔に戻り、次に嬉しそうな顔をして）あ、遊ばんてー

リカの太字部分は、ユリの先行ターンの発話の字義的な意味を別のことばで言い換えただけで、ユリが驚いていることへの推論は含まれていない。

発話の字義的意味や命題、あるいは論理的な含意に比べて、高機能広汎性発達障害をもつ個人にとって、発話内の力や命題態度、さらには文脈から推論される意味や会話が作り出す含意を取り扱うのは相当に難しいことのようである。これらが元で彼らとの会話はしばしば奇妙な成り行きや、深刻な誤解に陥ったり、また次に示すようなターンの重複を来したりする。この例は小学校５年生のカズと

彼の自宅を訪れたお客とが、オヤツを食べながらビデオゲームの話しをしている時に起きた。

お客：カートは誰が乗ってるの？
カズ：えと、えと、ルイジ、ピーチ、ヨッシ、クッパ
お客：ううん、はいはいはい
カズ：ドンキーコング、バーリオ、キノピオの８人が乗ってるカートが
お客：８人も乗ってるの？マリオだけじゃないんだ
カズ：えっと一人乗りのカート

カズはお客の驚きに反応するのではなく、間違った発話の意味を修正するのに忙しいようで、下線部が重なる。その結果お客は先の幼稚園児ユリと同じ様なむなしさを味合わされることになる。幼稚園のクラスメイトはこうした会話の崩壊に戸惑うだけであったが、大人であるお客は次の例のように修復できることもある。

（スーパーマリオがどのゲーム機で動くか知らないお客は見当はずれのことを言う）
お客：スーパーマリオのやつは
カズ：うん
お客：コンピュータで動きますか？
カズ：えと、え、は、８人のうちから一人選んで、７人のコンピュータカート勝負
お客：**ふーん？コンピュータカート？**　えとカズ君ね、スーパーマリオはスーパーファミコンで動いてんの？
カズ：任天堂６４

太字部でお客は、先行ターンの文脈的な含意（そのソフトはコンピュータで動くか）の計算に子どもが失敗したことに気づき、修復をはかっている。

こうした会話の失敗について大人はもっと積極的に彼らを助けることもできる。次の例は非常に高い知能を持ち、恐竜展で詳しい知識を仕込んできた少年Ｋと、その自宅を訪れたお客、及び彼の母親との会話である（高橋和子, 1997. から引用）。

お客：どうしてこの恐竜は絶滅したの？
少年：わからん
お客：そんな説明はなかった？
少年：わからん。だってねぇ、研究してみないとわからない
母親：Ｋ君は、でも説があるのを知ってるでしょう。第１説は？
少年：隕石
（この後この少年は「卵の殻の厚さ」、「哺乳類に負けた」、「寿命」など合計５つの説を述べる）

少年が恐竜について良く知っていると聞いていた客にとって最初の答えは意外なものであったにちがいない。客の再度の促しに応じて少年が返した回答は、諸説はあるが結論を得るには研究が必要であるという、科学論文に書いてありそうな味気ない解説風で、これでは客は満足を得られないであろう。「結論はないとしてもせめて持っている知識を述べよ」という母親の促しによって、少年はこういう会話においてどう振る舞うべきかを教えられ、また客の要求も満たされるに至った。

ここで見てきたような伝達の失敗は、高機能広汎性発達障害を持つ子どもにとって、日常的たまに起きるといった程度の生易しいものではなさそうで、彼らの言語生活の過半を覆っている深刻な問題であると思われる。幼稚園児リカとクラスメイトの会話を例に取ると、彼女は自らが主導した伝達の試みのうち実に６割近くで相手の反応を得ることが出来なかった。その多くは彼女自身の注意取得の失敗、または、彼女の発話の相手の先行発話との関連の低さによるものと考えられた（大井, 2000）。カウントダウンを得意とした小学生タクと自閉的な仲間たちとの会話もまた同様である。彼は仲間との相互作用の機会を持ち始めた当初は、その伝達の試みの過半において聞き手を特定せず、注意を取得しないまま話す結果仲間の反応を得られず、その度に切なくぐずり声をあげざるをえなかった。

彼らと会話する大人たちは、彼らの伝え方の隠された特異さに混乱させられつつも、それがどこから来るのかをしばしば自覚できないでいる。大抵の大人はクラスメイトと同様にリカのことばに軽い戸惑いを覚えていたが、一体何が起きているのかを口にするのは難しかった。また、タカのことばに誰も反応しないのはなぜかに目を向けるのでなく、大人たちは仲間に変わって彼に応答していた。しかし、大人自身が何らかの会話分析を行うことで、徐々に彼らがどのルールを使っていないか、あるいは我々があまり使わないどんな独特なルールを使っているのかについて知るに

至るように思われた。なお、こうした報告者の印象は、広汎性発達障害との鑑別が難しかったか意味語用障害症候群の事例について、会話分析が会話の特異さの性格を鮮明にするのに役立つこと、それが子どもへのコミュニケーション・トレーニングの糸口を与えるという示唆（Wilcox & Mogford-Bevan, 2000）とよく符合している。

５．まとめ

ここで取り上げた２つの障害カテゴリ間に見られるコントラストからは、この報告から可能な議論の射程を遥かに超えるとはいえ、ついつい人間の会話に普遍的なしくみの存在やその基底にある固有の心の構造みを想定したくなってしまう。それは一方では重度の知的障害にもかかわらず残存しうるものであり、また他方で高い知能にもかかわらず深刻な損傷を受けうるものでもあるらしい。

重度知的障害を持つ子どもとの会話では、我々は言語というバリアにからめ取られて、彼らと我々とが共有していると思われる会話の仕組みを活用出来ないことが多いようである。実際、そのために、我々自身が気付かない形で、彼らと我々との相互理解が深刻な危機にさらされることが決してまれではない。それはちょっとした不快感を与える程度の彼らのささやかな実力行使と言う緩やかな形で現れることが多いが、時としては激しい抗議や反抗の暴力に及ぶ場合もある（大井、1998）。

高機能広汎性発達障害をもつ子どもとの会話では、言語という形式に別の意味でわれわれはからめ取られてしまい、彼らも我々と全く同じ仕組みに基づいて会話しているという誤解に陥っているように思われる。それが我々の想像を遥かに越えて彼らをひどく混乱させているらしいことは、成人した優れた知能を持つ高機能広汎性発達障害の人々のコメントー例えば軽い世間話や冗談に対する違和感ーを通じて知ることができる。

会話の普遍的な仕組みについて考えることはここではできないが、かろうじて手の届くのは、２つのコミュニケーション障害を対比させながら、我々と彼らとをつないでいる（もしくは隔てている）と思われる言語使用の規則を浮き彫りにすること、さらにそれが彼らと我々との共存にとって持つ意味を出来る限り広い範囲で明らかにする課題である。

本報告がそのささやかな一端をなすことができたとすれば幸いである。

文　　献

Golinkoff, R.M. 1986 'I beg your pardon?' The preverbal negotiation of failed messages. *Journal of Child Language*, 13, 455-476.

長崎　勤（1994）言語指導における語用論的アプローチー言語獲得における文脈の役割と文脈を形成する大人と子どもの共同行為ー．特殊教育学研究, 32, 2, 79-84

大井　学（1995a）語用論的アプローチによる言語指導．特殊教育学研究, 32, 4, 67-72

大井　学（1995b）言語発達の障害への語用論的接近．風間書房

大井　学（1997）語用論から見たＬＤと高機能自閉症の関係．日本ＬＤ学会第６回大会シンポジウム「ＬＤと高機能自閉性障害ー概念の混乱をめぐって」．ＬＤ学会第６回大会発表論文集、18-19

大井　学・小林早苗（1998）「普通の会話」ができる自閉症児の語用障害に関する仮説の検討．聴能言語学研究, 15, 3, 172

大井　学（1998）重い遅れと通じ合う身体．秦野悦子・やまだようこ編「コミュニケーションという謎」．ミネルヴァ書房

大井　学（2000）自閉的な仲間同士の相互作用がもつ意義と効果ー健常クラスメイトとの相互作用との比較．日本特殊教育学会３８回大会自主シンポジウム「高機能広汎性発達障害をもつ子どもの支援ー心、仲間、コミュニケーション」資料

大井　学、印刷中a　障害をもつ子どもとの会話．秦野悦子編「会話する心ー語用論が開く世界」．ナカニシヤ書店

大井　学、印刷中b　語用論的アプローチ．大石敬子編「ことばの障害の評価・指導」．大修館書店

高橋和子（1997）高機能自閉症児の会話能力を育てる試みー応答能力から調整能力をめざしてー．特殊教育学研究, 34, 2, 99-108.

Wilcox, A and Mogford-Bevan, K (2000) Applying the principles of conversational analysis in the assesment and treatment of a child with pragmatic difficulties. In Müller, N (Ed) Pragmatics in Speech and Language Pathology. John Benjamin Publishing Company

法律相談場面の会話分析

樫村　志郎
(神戸大学)

私の報告では、一般に「法律相談」といわれる場面をとりあげてエスノメソドロジー的会話分析がいかに行われるかを示したいと思う。以下の１～３は当日には簡単に触れるにとどめ、４に掲げた会話場面を中心にとりあげる予定である。

１　基本的概念－「エスノメソドロジー」、「社会秩序」、「言語」、「場面」

「エスノメソドロジー ethnomethodology」は、社会的相互行為によって、社会秩序とよばれる状態がいかにして達成されるのかを解明しようとする研究である（参考文献１）。「社会秩序 social order」とは、その秩序への参与者の間で、行為や意味の相互調整が可能になっている状態を言う。たとえば、交通法規は、車両や人間の移動行為や計画の調整を可能にするから、一定の秩序を生み出す装置である。法律相談もまた、なんらかの装置によって、生み出されている社会秩序である。ところで、人間の相互行為は、言語を深く組み込んだものであるから、エスノメソドロジー研究は、相互行為場面における自然言語の作用に中心的な関心を払う（参考文献２、３）。この場合の「自然言語 natural language」は、広く社会秩序の達成に必要な情報を表示するために利用できる一切の媒体を指す。シンボル体系を背後にもつものとしての言語に限定しない。人が言語によってある商品を売りたいという自らの意図を表示するとき、相互行為する他者がそのものを買いたいという意図を表示するならば、交換ないし契約などと呼ばれる社会秩序の達成が促進される。社会秩序の観点からは、言語とよびうるものの範囲を確定することは必要ではなく、ある「場面」において、コミュニケーションがなんらかの仕方で成立していることが確認できればよい。「場面」とは、現実の相互行為がおきている場所と時間のことを言い、想像上ないし理論上の場所や時間はこれに含めないことにする。したがって、法律相談場面というときは、現実のいつかどこかで起きたアクチュアルな場面のことを指し、仮設された理論上の相互行為モデルは含まれない。

２　会話分析の方法的基準

エスノメソドロジー的会話分析は、アクチュアルな発話交換場面を対象にして、それがいかなる社会秩序をいかにして達成しているのかを問う。会話分析研究の中には、この報告で言う「社会秩序」ではなく、より狭く対象を設定し、会話の秩序ないし、発話交換の規則を明らかにしようとする研究方向も存在する。しかし、この報告では、発話交換の秩序そのものではなく、発話交換によって達成される場面のあり方としての社会秩序を対象とする。

自然言語はいかにして場面の中でコミュニケーションを達成しているかについて、会話分析はつぎのように仮定している（参考文献４）。

（１）自然言語による表現は、場面の全体の中で理解されるときにのみ、たいていの場合、実際上十分な程度の明確性（自明性）を達成する。

（２）自然言語による表現はつねに場面の中で起こるが、このことにより、自然言語の表現の場面の中での自明性は、条件付けられている。しかし、たいていの場合、この条件は自覚されない。

（３）自然言語による表現を通じた社会秩序は、その表現行為が行われる場面の秩序の全体の変容としてのみ、達成される。

会話という場面に関していうと、一つ一つの発話やその部分等は、いずれも上にいう「自然言語による表現」の例である。たとえば、発話は、会話場面の中で理解されるときにのみ、実際上十分な程度の明確性をもつ。また、発話は、会話の中でのみ起こるが、その発話により会話全体の意味が明確になる。しかし、発話は、発話者の意図や文法的規範などのような、会話の場面の外にある存在の現れとみなされがちであり、場面の中でそれが起こるということはたいていの場合興味を引かない。最後に、発話は、会話の道筋を構成し、会話をある特定の社会秩序として変容していく。とりわけ、会話による社会秩序達成は、会話者の側で、会話の全体を「はじめからそれであったもの」として回顧的に理解する行為をともなうことがしばしばある。

なお、相互行為者は、常識その他の知識を、自然言語による表現の理解において用いている。会話分析においては、相互行為者が互いの表現を理解し合う際にこうした知識を用いていると考えられる限りにおいて、その同じ知識を分析のために用いる。とりわけ、各々の相互行為者が、自らの発話の意味の理解のために、他者がそうした知識を用いると期待していないような知識は、どれほど確実な知識であっても、分析のために用いてはならない。しかし、この禁止がどれほど厳格に守られなければならないかは、当面の分析の目的に応じて、異なる。

以上の主張を、具体的な会話場面で例証してみるとつぎのようになる。

会話場面１

１　((電話の呼び出し音))

２　Ａ：　はい。○○ペンションです。

３　Ｂ：　あ、すいません。あの：：昨日お電話した

４　Ａ：　はい

５　Ｂ：　××（(苗字)）と申しますけれども

6　A：　はい

7　B：　え：：と１２月の予約をお願いしたいんですけれども：：

8　A：　はい

電話の呼び出し音は、送受器をとるように促すものである（常識）。電話の受け手（A）は、呼び出し音に引き続く時点で、「はい」という返事（常識）を行うことにより、「電話を受けること」をしていることを相手に明確に伝えている。「○○ペンション」という表現は、電話の受け手が、「組織」として自己を呈示していることを示している。これに対応して、電話の掛け手（B）は、「昨日お電話した××」として自己を表現しているが、これは、電話の受け手の自己呈示の仕方に対応することで、自己を「組織と相互行為する個人」として呈示するものである（このことの自明性は、主として、電話における名乗り合いのなされるべき時点（常識）で、この表現が行われたことにより、達成されている）。このような仕方で、この電話の相互行為者が、互いに「組織的相互行為性」を示し合っていることは、おそらく両者によって了解されている。というのは、Aは、Bの名乗りを二度の「はい」によって当然のもののように受け取っているし、Bは、名乗りの後に、電話の「用件」へとトピックを移しているが、これらは、相互行為者が、相互にこの相互行為の局面について「なにも問題がない」ことを示し合っていると理解できるからである（逆にいえば、何か問題がある場合には、聞き返しその他の行為を行うことができる）。また、これまでのところ、この会話は、はじめから「ペンションへの予約の会話」であったものとして回顧的に理解できる。ただし、これが「ペンションへの予約の会話」であることは、この会話の展開の過程の中から次第にわかってきたものである（したがって、会話過程で行われる理解の行為と、それぞれの時点で達成される回顧的会話理解とは異なった２つのものである）。

このように分析された会話装置は、他の場面でも会話者によって用いられている限り、その場面の分析に用いることができる。たとえば、つぎの電話会話場面を見よ。

会話場面２

1　子：　あ、僕やけど、何。

2　母：　あ、○○（名前）かいね、すぐかけてきたんやねぇ。

3　子：　え、うん。ほんで、何。

4　母：　今度、○○引越しするやろ。

5　子：　うん。

まず、自己呈示について。子が掛け手であり、自己を「僕」と呈示している。この呈示は、意味内容としては自己の特定にならないので、声による呈示の方法であると理解できる。母の自己呈示はないが、これも声による呈示によると理解できる。このような分析ができるのは、電話の相互行為者が、親子であることから、声についての知識を用い合っていると、分析者が仮定できるからである。つぎに、用件への移動について。自己呈示の達成ののち、3 行目において、用件への誘いが行われ、母による用件提示が行われる。また、この呈示の仕方の分析において、留守番電話か伝言への応答として、子によって掛けられた電話であるという想定を、用いることができる（分析者は、2行目においてこのことに気づくが、相互行為者の間では、はじめからこの理解がある。もっとも、2行目の母の「すぐかけてきたんやねぇ」の発話は、子の過去の行為に言及していることから、親子の間に「はじめからあった理解」をそのようなものとして、分析者にも、子にも、呈示している）。

このように、会話分析においては、発話とその連鎖の細部を観察することで、相互行為者が、共通のものとして了解し合う意味や意味世界を、分析的に構成することが目的の一つになる。

ところで、相互行為場面での表現伝達の可能性はさまざまであるために、会話において相互了解が達成されるために利用可能な言語的装置には限定が生まれる。たとえば、たいていの電話の会話においては、音声を用いる表現のみが有効であり、これに対して、工事現場の騒音の中での会話では、音声以外の表現装置が有効になるであろう。そのような限定は、相互行為者がどのような会話装置を利用しているかを見ることで、解明できる。

3　制度的相互行為としての発話交換場面

社会の中には、公式または非公式の制度が存在する。公式の制度とは、表現された規範のシステムに多かれ少なかれ依存しているものであり、非公式の制度とは、表現されていない規範のシステムへに多かれ少なかれ依存しているものを言う。高度に公式の制度の例は法制度であり、非公式制度の一例は家族である。公式にせよ非公式にせよ、制度が規範のシステムに志向したりそれによって裁可されている度合い（その規範システムの実効性）は様々である。制度的相互行為とは、表現されたものにせよ、そうでないものにせよ、規範システムへの志向やそれによる裁可が、共有された意味世界をなしている会話のことである。アクチュアルな相互行為は、つねに多かれ少なかれ、公式および非公式の制度性を示している。制度への志向や制度による裁可を利用することで、相互行為者は、制度的意味にもとづく相互行為の達成（例えば、法的責任の配分）を行う（やや不十分だが、こうした場面をとりあげるものとして、参考文献5）。

制度的場面では、相互行為者は、発話が特定の規範のシステムに志向し裁可されていることを知り、それを利用することができる。いかにしてそれが達成されるのか、が分析の課題をな

す。言い換えると、制度的場面の会話分析の主題は、会話においてこのような制度への志向や制度による裁可が、いかにして、相互行為者の共通の意味や意味世界を構成していくかを解明すること、そして、制度的意味構成のメカニズムを解明することで、制度的相互行為がいかなる構造をもっているかを言語の面から解明することである。

よく知られているように、制度的場面では、相互行為者は、異なった「役割」を演じることがある。会話の水準でいうと、制度的場面では、各行為者の発話が、制度的規範システムの異なった部分に一貫した志向性を呈示するようにデザインされていることに、それは現れる。

会話場面３（TV 特別報道番組での電話インタビュー）

1　A：　かなり怪我人：：：：出て：：ますか
2　B：　いや、あの：：：：幸い一人だけね：：＊ホ：：ムの：：：、(・)ホ：：ム
3　A：　　＊え：：：
4　B：　が地割れしましてね：：
5　A：　ええ
6　B：　そこへ足を挟まれて、
7　A：　はあ：：：

会話場面４　（TV 特別報道番組でのスタジオインタビュー／ニュース解説）

1　A：　まずやはり目に付くのは建物の被害が、ずいぶんとひどいという
2　A：　こと＊ですね：：：：
3　B：　　＊そ：：ですね：ま：あの今回の兵庫県南部地震ですけれど
4　B：　＊も、あの淡路島の北部からですね：え：阪神間のその：：海沿
5　A：　＊え：
6　B：　いのところにかけてですね：非常に広い範囲で
7　A：　はい

ここでは、A の質問はあるトピックに非特定的に言及すること（「かなり怪我人出ている」、「被害がずいぶんとひどい」等）により、そのトピックについて、B による特定的な情報提供を引き出すようにデザインされている。また、B の側では、A の発話に対して形式的な同意（「幸い一人だけね」、「そ：：ですね：」）を与えた後、その発話を延長して、その「伝えるべきことがら」に関して情報を提供するための長い発話を開始している。こうすることで、Bは、マスメ

ディアに対して事実を伝える者として自己を呈示しているが、このことは、A の直前の発話によって前もって A の裁可が与えられたBの役割である。また、Bは、答えることにより、A による裁可という行為への裁可を与えている。こうして、いずれの会話場面においても、相互行為者は、あるタイプに属する異なる発話の対に志向しつつ、異なる役割において「情報を伝える」という相互行為を達成している。

上の２つの会話場面を比べると、後者はより公式的な制度性を示している。それは、「目に付く」、「兵庫県南部地震」という表現の使用と、地名への言及やその客観的な仕方（「淡路島・・から阪神・・にかけて・・広い範囲で」）により、「情報を伝えることを行っていること」表現しているからである（「公式化」（参考文献２）と呼ばれる言語装置に本質的に類似しており、隠れた公式化と呼ぶことができるかも知れない）。

4　法律相談という場面

以下に、報告でとりあげる会話を掲げる。

会話場面５（法律相談）

1 L：　じゃ(.)だいぶ遠方から来られたんですね：
2　　(1.0)
3 L：　ええっと、あの、さっそくなんですけど、どういったご相談、でしょうかね：
4 C：　えっと、自己破産のことなん-　につい＊て：
5 L：　　＊は：：＊：：
6 C：　　＊え、そうだ＊ん
7 L：　　＊は：：
8 L：　は：：は：：は：：
9 C：　あの
10 L：　あの：：えと○○（(苗字)）さんゆ：：、ご自身の問題で＊すか
11 C：　　＊はい、そう、
12 C：　＊です
13 L：　＊ふふ：：ん
14　　(1.0)
15 L：　とゆっと：あの、負債：：が、だいぶあるわけ
16 L：　ですか＊：
17 C：　　＊はい

18 L：　(.)それは な にかあのまとめたものは、も＊っ て お ら れ な い

19 C：　　＊きょう-　きょうは

20 L：　わ け で す-　あっきょうはもってきておられない

21 C：　もってきて：な い ん で す け ど、はい

22　　(0.5)

23 L：　え：：どういったところから、じゃ、あの、借りておられます？

24　　(1.5)

25 C：　え：と：、し ん ば ん が い＊ し ゃ

26 L：　　＊信 販 会 社

27　　(3.5)

28 L：　だけですか。

29　　(0.5)

30 C：　とかあと：：わ：：もの：で：の支払いとか、

31 L：　うん

32 C：　ものゆっか

33 L：　ものでの支払いというとどういう＊もの-

34 C：　　＊もの：を買いますね

35 L：　ん：ん：

36 C：　してローンを、あの：組む：：＊-　んだものの、そ の 支 払 い と か ：

37 L：　　＊あ：は：は　　は：は：は　は：は　は

38 C：　でっす、はい

39 L：　まずそれ、は、信販：：会社のクレジットでは＊ないんですか。

40 C：　　＊は　い、

41 C：　そう、です=

42 L：　=あの：＊：、サラ金なんかはないんですか。

43 C：　　＊hhhh

44　　(2.0)

45 C：　どうゆ：のが ＨＨ さらき＊んなんかよくわか-

46 L：　　＊あサラ金というとたとえばね、sss

47 L：　あの：：：、ま、(.)武富士とか、プロミスとか、レイクとかね？

48　　(1.0)

49 C：　ん：、いま、あがった名前の中の：はありません=

50 L：　=そうですか=

51 C：　=はい=

52 L：　=H ん：：、

53　　(1.5)

54 L：　全部で、何社くらいあるんですか

55 C：　たぶん七社：、ぐらいはあると思い＊ます

56 L：　　＊ん：：hhh 七社ぐらいで、え：：：

57 L：　金額を合計したらどれくらいありますか。

58　　(6.0)

59 C：　ひゃく：- ひゃくごじゅうまん、ぐらい（にひゃく＊）あるかな：

60 L：　　＊ん：：ひゃく

61 C：　＊思いつくだけでちょっとわかりません=

62 L：　＊５０万ぐらい

63 L：　=あ：(？)ん

64　　(4.0)

65 L：　それはあの：、失礼ですけど何につかわれました：?、その、そうゆう、

66 L：　ま、ものを買った分はわかりますよね：

67 C：　はい、

68　　(1.0)

69 C：　あとは：：えと：実家に：帰る：HH＊Hhhh の：とか：

70 L：　　＊Hん：　Hん：

71 L：　Hん：Hん：

72 C：　ん：と：hh 買い物＊とかに使いました=

73 L：　　＊ん：

74 L：　=買い物とかに=

75 C：　=はい

76　　(1.0)

77 L：　で、ま- あの、実家ってゆ：のはご遠方なんですか。

78 C：　××のほう＊なんですが、はい

79 L：　　＊あ：そ う で す か。あ：：じゃ、旅費もいりますよね：

80　　(1.5)

81 L：　あの：　(HH) あ、こちらは、じゃご主人の実家ですか、××町のほうは。

82 C：　はいそうです。

83 L：　ご主人のお仕事は？

84 C：　わ：あの：車の板金塗装を＊：：

85 L：　　＊あ：あ：あ：

86 C：　してます。

87 L：　あ：　自営：　ですか=

88 C：　=いいえ違います、会社の＊ほうに

89 L：　　＊会社に勤められて＊る

90 C：　　＊はい

91 L：　ん：、 hh ご主人はその-　このことは知っておられるん？

92 C：　この自己破産：：の-　と-　ことは知ってます。

93 L：　あ、自己は H さ H んというかその、ふ-　hh H そういう- あの負債が-

94 L：　あるんだということを知ってます＊か？

95 C：　　＊なんげん：、かのみを知ってます。

96 L：　なんげんかのみ。うん=全部は話しておられない=

97 C：　=全部は、はい、（まだ）話してません。

98 L：　であの：：○○さん：が、ま、借りてね、

99 C：　はい、

100 L：　ご主人が保証人になってるようなの：はありますか

101 C：　いえ、ありません。

102 L：　ふ：：んじゃ○○さんばっかり=

103 C：　=はいそうです=

104 L：　=あ：：

105　　(4.0)

106 L：　あの、自己破産：について知りたいということですけど、

107 C：　はい。

108 L：　あの自己破産：がどういうものなのかということですか？

109 C：　はい、(.)そういうことです＊(ね？)

110 L：　　＊ん：：?と。 hh え：とね：、あの：　ま-

111 L：　破産-　自己破産てゆ：のはあのどうして自己破産、というかというと

112 C：　はい、

113 L：　じぶんで破産の申し立てをするから自己破産というんですね：

114 C：　はい、

115 L：　であの： hhhh え：：はさ-　破産制度とい うのはどうゆ：ことかとゆ：と：

116 C：　はい、

117 L：　あの：

118　　(2.0)

119 L：　ま：　プラスの財産がありますよね？(.)あのま、おか-

120 L：　現金だとか＊：預金だとか：

121 C：　　＊あ：：

122 C：　はい

123 L：　hh それから：　不動産だとかね？動産とかそうゆ：プラスの財産がある

124 L：　でしょ：、(.)　でプラスの財産と借金を比べてみてね、

125　　(1.0)

126 L：　あの：、ま-　借金のほうが非常に(.)　多くてね？債務超過だと：：

127　　(1.0)

128 L：　ゆ：場合に=それからまあ-　あの：支払いが不能であると、

129 C：　はい、

130　　(2.0)

131 L：　債務超過-　であってもま：あの：払える場合もあるんですけどね=

132 L：　=あの収入どんどんあればね？

133 C：　hhh

134 L：　で：　(.)ま-　収入がなくて払いができないというような場合に：

135 L：　(.)その：：破産宣告を、したときの(.)、状態で、え：プラスか

136 L：　マイナスかを比べてみてね？でそのときのプラスの財産を、(.)

137 L：　現金に換えて

138　　(0.5)

139 L：　払っ-　ま：-　その：払うということをめざす制度なんです=

140 L：　=あの-　債権額に応じて、(.)払っていくという

141　　(1.0)

142 L：　ま制度なんですね=

143 C：　=はい=

144 L：　=ところがその、ま、そういうこと同じですけど、払うほうにもこの、

145 L：　プラスの財産がぜんぜんないと、破産手続きを hh 進めていく：費用

146 L：　にも-　も出てこないと、ゆ：よ：な場合もま-　あるわけですね？

147 C：　はい、

148 L：　そうゆ：場合は、 hh その：破産状態だから破産宣告という裁判は

149 L：　するんだけど：：

150 C：　はい、

151 L：　あと手続き進めても意味がないから、

152 C：　はい、

153 L：　あの：破産の手続きは廃止すると、

154　　(2.5)

155 C：　はい、

156 L：　ん：そりゃま：：ま-　同時廃止といいます=同時に廃するの同時廃止

157 L：　といいますね？

158 C：　はい、

159 L：　そうゆ：：：ま

160　　(1.0)

161 L：　手続きがあるんです、(.)で：：○○さんの場合を：当てはめてみると、

162 C：　はい、

163 L：　まおそらくそうゆ：ケースになるんだろうと思ったんで=失礼なんだけど

164 C：　はい　い HH え HH

165 L：　プラスの財産があん-　まあなんかあればね？

166　　(2.5)

167 L：　で：(.)そうするとね、それで同時破産-　手続きが終わってしまうんです

168 L：　けど：、(.)　結局払ってないから

169 C：　はい、

170 L：　百五十万ある：負債はそのまま：残ってるわけですよ：=

171 C：　=＊はい

172 L：　=＊破産-　破産：の：　hh

173 C：　＊はい

174 L：　＊破産の宣告受けてもね？

175 C：　はい。

176 L：　破産者になりましたとゆ：ことになるわけで：

177　　(1.0)

178 L：　あの：負債はそのまま残ってるんです。

179　　(1.0)

180 L：　でその、

181　　(0.5)

182 L：　負債を

183　　(2.0)

184 L：　じゃ：なくする方法はないだろうかということなんですけどね？

185 L：　あの：ま：この人の

186　　(1.5)

187 L：　負債を抱えていったんでは(.)あの生活がやっていけなかったり

188 L：　(　) できませんから、裁判所が一定の場合にはね？(.)あの：：：

189 L：　その破産をした人の、申し立てによって、免責という裁判を-

190 L：　免責っていうのは責任を免れ-　えるという-　させるということ

191 L：　ですけどね？そうゆ：裁判をしてもらえる場合があるんです。

192 C：　(はい)

193 L：　でま：ただそれには要件があって：この：　hh　お金のない-

194 L：　HHH　あの借金の：できた原因がね？

195 C：　はい

196 L：　あの：

197　　(2.0)

198 L：　ど：ゆ：ことかとゆうことを見るわけですよ=

199 C：　=はい=

200 L：　=ど：ゆ：ことで出来たかとゆ：ことをね？でえ：：

201　　(0.5)

202 L：　その社会的に：　ん見てね*：　hh　誰が考えても

203 C：　　*はい

204 L：　hh　こんなことで借金をしてそれで：

205　　(0.5)

206 L：　あの：払わんでもいいとゆ：よ：なことをする-　んのはね？

207 L：　とてもこれは許せんと、

208　　(2.0)

209 L：　ゆ：よ：な場合は免責をし-　裁判所がや-　しない場合があるんですよ

210 C：　(はH：H：)

211 L：　で：まいくつかそういう-　事由があるんですけどね？

212 C：　はい

213　((以下続く))

○　転記記号説明

：：	音の引き延ばし	(.)	短い息継ぎ
(数字)	沈黙（括弧内の数字は秒数）	(文字)	聞き取れない言葉
=	前後の音の密着接続	、	言葉の短い区切り
*	オーバーラップの開始点（上下に表示）	H	吐く息
-	音のいい差し	h	吸う息
?	上昇イントネーション	下線	音の強調
。	下降イントネーション	ss	擦過音

○　参考文献

1 Garfinkel, H. (1984,1967) *Studies in Ethnomethodology*. Polity Press.

2 Garfinkel, H. and Sacks, H. (1970) On formal structures of practical actions. In McKinney, J. C. and Tiryakian, E. A. (eds.) *Theoretical Sociology*. New York: Appleton-Century-Crofts.

3 樫村　志郎(1998) エスノメソドロジーとは何か？, *日本ファジィ学会誌*, 10(1):2-10.

4 樫村　志郎(1996) 会話分析の課題と方法, *実験社会心理学研究*, 4(1):148-159.

5 樫村　志郎(1989) *「もめごと」の法社会学*. 弘文堂.

日本語用論学会規約

第１章　総則

第１条　本会は「日本語用論学会」(The Pragmatics Society of Japan)と称する。

第２条　本会は語用論ならびに関連分野の研究に寄与することを目的とする。

第３条　本会は次の事業を行う。

１．大会その他の研究集会の開催
２．機関誌の発行
３．その他必要な事業

第４条　本会は諸事業を推進するため運営委員会および事務局を置く。

第５条　運営委員会の承認を経て、支部を各地区に置くことができる。

第２章　会員

第６条　本会の会員は通常会員の１種類とする。

第７条　通常会員は、本会の趣旨に賛同し所定の手続きを経て本会に登録された個人および団体とする。

第８条　会員は諸種の会合および事業の通知を受け、事業に参加することができる。
また、所定の手続きを経て、研究集会で研究発表し、機関誌に投稿することができる。

第３章　役員

第９条　本会に次の役員を置く。

会長	１名
事務局長	１名
運営委員	若干名
会計監査委員	１名

また、顧問を置くことがある。

第１０条　会長および事務局長は、運営委員の推薦によるものとする。

第１１条　運営委員は会員より選出するものとする。任期は２年とし、再選を妨げない。

第１２条　運営委員は会長、事務局長を加えて運営委員会を構成する。その任務・権限等は次の通りとする。

１．研究集会にかかわる事項の決定
２．予算および収支決算の承認
３．機関誌の編集・発行にかかわる事項の決定
４．会計、庶務、渉外の事務
５．その他運営委員が必要と認めたもの。

第１３条　本会の規約の変更は、運営委員会の発議により、会員総会で承認を得る。

第１４条　会計監査委員は会員の中から選出する。任期は２年とし、１期に限る。

第４章　会議

第１５条　定例会員総会は、年に１回会長がこれを招集する。また、必要な場合、臨時会員総会を招集することができる。

第１６条　定例運営委員会は、必要に応じて、年に１回以上招集される。

第５章　会計

第１７条　本会の運営経費は会費、寄付金等を以てこれに当てる。

第１８条　運営委員会は、予算案および収支決算書を作成する。予算案および収支決算書は会計監査委員の監査を経て、会員総会で承認を得る。

第１９条　本会の会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

第６章　事務局

第２０条　事務局を事務局長もしくは運営委員の所属する大学に置く。

第２１条　事務局は会費の徴収、会場の手配、会員に対しての連絡などをとり行う。

日本語用論学会第３回(2000年度)大会
PROGRAM & ABSTRACTS

2000年12月2日発行
編集発行　日本語用論学会
代表者　　小泉保
発行者　　日本語用論学会
573-1001
大阪府枚方市北片鉾町16-1
関西外国語大学外国語学部　澤田治美　研究室内
Tel: 0720- 56-1721
Fax: 0720- 55- 5552
印刷　（株）河北印刷